

2019(令和元)年度

# 障害者スポーツを取巻く 社会的環境に関する調査研究

— 地域現場、障害者スポーツ選手キャリア、大学に着目して —

## 第1章

地域現場における  
実態調査

## 第2章

障害者スポーツ選手の  
キャリア調査

## 第3章

大学の先進的  
取り組み調査

## 第4章

シンポジウム抄録集

## 第5章

チャレンジ!ユニ★スポ  
(体験会ケーススタディ)



## はじめに

---

YMFS 調査研究

障害者スポーツ・プロジェクト・リーダー

藤田紀昭

いよいよ 2020 東京パラリンピックが迫ってきた。本研究プロジェクトは 2013 年に東京大会開催が決まる前年の 2012 年度から、大学における障害者スポーツの実態、障害者スポーツ選手のキャリア、指導者や競技団体の実態、パラリンピアンへの認知度やメディアでの障害者スポーツの取り上げ方、そして、地域現場の実態などについて継続的に研究を進めてきた。

この 7 年間で、障害者スポーツのトップ選手を取巻く環境は大きく変化した。個人の自宅を事務所としていた競技団体は一時的とはいえ、東京都内の一等地に事務所を構え、強化に取り組み、自費で大会や合宿に参加していた選手の多くは国や自治体からの助成を受けて海外遠征に出かけられるようになった。さらに以前は使用することが難しかったナショナルトレーニングセンターで医科学サポートを受けながら強化に取り組めるようになった。本調査プロジェクトが立ち上がった時に、たった 7 年間でこれほどの変化があると誰が予想しただろうか？一方で、地域においてはパラリンピック開催の追い風を受けながらも障害者スポーツ関係者が地道に、熱心にスポーツの普及活動に取り組んでいるにもかかわらず、2012 年と比べて飛躍的な環境改善が見られているとはいいいがたい。本調査プロジェクトはこうしたトップ選手を取巻く現状と地域の現状の一端をこれまで明らかにしてきた。今年度も引き続きこれらの現状を報告する。

第 1 章、地域現場における実態調査では、岩手県の実態について報告している。全国障害者スポーツ大会開催後の状況を知ること、東京から離れた地域の状況、政令指定都市以外で障害者スポーツ協会が設立されていることなどから岩手県を対象としてフィールド調査を実施した。東日本大震災の被災地区における卓球バレーの導入の様子など、地域での障害者スポーツの普及の実態について報告している。

第 2 章、障害者スポーツ選手のキャリア調査に関しては 9 名の選手の個人史を追う形でスポーツを始めるに至った経緯や継続の状況を明らかにした。障害者がスポーツを始めるに際しては様々な人や機関の支援を受けていることが明らかになった。しかしながら、この点に関しては保険によるリハビリ期間の短縮など国の制度変更等により、現

在十分な支援が受けられていない可能性が考えられる。引き続き調査により示していきたい。

第3章は、昨年度から引き続き先進的な取り組みを行っている大学の実態を報告する。今年度調査をさせていただいた、金沢星稜大学、大阪体育大学はいずれも障害者スポーツに関する大学の授業と地域での障害者スポーツに関する実習を連携させて、学生たちに障害児・者や運動の苦手な子どもたちに対応する力を身につけさせようとしている点に特徴が見られた。

第4章は今年度実施したシンポジウムについて報告している。シンポジウムのテーマは「障害者スポーツ競技団体の課題と展望について」である。パラリンピック競技団体、パラリンピック競技ではない競技団体の現状、課題、今後の展望について当日熱心に議論された様子が報告されている。

この他、「チャレンジ！ユニ★スポ」と銘打って静岡県で実施した障害者スポーツ体験の様子についても掲載している。これは(公財)ヤマハ発動機スポーツ振興財団と(公財)静岡県障害者スポーツ協会のコラボレーションによって実施したケーススタディである。小・中学校の児童・生徒 1000人以上が参加したイベントについて報告している。同時に実施した調査については次年度の報告書に掲載予定である。

本報告書が<2020>に向けて変化しているわが国の障害者スポーツの世界、それを取巻く地域や社会の実態を映し出す貴重なメディアとなれば勿怪の幸いである。

最後に、本調査研究プロジェクトにご協力いただいた選手、競技団体、大学関係者、静岡県教育委員会、小・中学校の先生と子どもたち、調査を側面から支えてくださった(公財)日本障がい者スポーツ協会、(公財)笹川スポーツ財団など、様々な障害者スポーツ関係者の皆さんに心からお礼申し上げます。

	2012(H24)	2013(H25)	2014(H26)	2015(H27)	2016(H28)	2017(H29)	2018(H30)	2019(R1)
大学における障害者SPの現状	○		○		○	○	○	○
パラリンピアンスポーツキャリア		○						
障害者スポーツ選手のスポーツキャリア								○
パラリンピック指導者の現状		○						
障害者スポーツ競技団体活動		○					○	
障害者SP選手発掘育成システム			○					
パラリンピアン社会的認知度			○		○		○	
ジャバラ選手のスポーツキャリア				○				
パラリンピックTV放送					○			
地域現場の実態						○	○	○
障害者SP関連CF状況						○		
チャレンジ！ユニ★スポケーススタディ								○

## ■目次

はじめに	1
第1章	
地域現場における実態調査	5
第2章	
障害者スポーツ選手のキャリア調査	48
第3章	
大学の先進的取り組み調査	80
第4章	
シンポジウム抄録集	87
第5章	
チャレンジ！ユニ★スポ（体験会ケーススタディ）	101
あとがき	108
附録 各調査 調査票	109

## ■ 障害者スポーツ・プロジェクト

リーダー	藤田紀昭	日本福祉大学スポーツ科学部	教授
メンバー	小淵和也	(公財) 笹川スポーツ財団スポーツ政策研究所	政策ディレクター
	河西正博	同志社大学スポーツ健康科学部	助教
	齊藤まゆみ	筑波大学体育系	准教授
	中森邦男	(公財) 日本障がい者スポーツ協会 日本パラリンピック委員会	参事
監修	浅見俊雄	東京大学・日本体育大学 (公財) ヤマハ発動機スポーツ振興財団	名誉教授 理事
事務局	大庭義隆	(公財) ヤマハ発動機スポーツ振興財団	
	尾鍋文光	(公財) ヤマハ発動機スポーツ振興財団	

## 第1章

### 地域現場における実態調査

## ■岩手県の障害者スポーツ地域実態調査に至った背景・狙い

当財団は、平成 24(2012)年度から「障害者スポーツの社会的環境課題の調査」に継続して取り組んでいるが、平成 29(2017)年度より「地域現場の実態」を明らかにすることで、環境課題をマクロとミクロの視点で捉え、より立体的な把握を目指す活動を開始した。これにより、“障害者スポーツの現場で役立つ、リアリティー感ある調査成果”を目指すものであり、本年度で継続 3 年目となる。調査対象地域の第 1 回目は静岡県、第 2 回は福岡県・福岡市・北九州市とした。

※調査結果の詳細は当財団発行の該当年度の報告書をご覧ください。

さて継続 3 年目となる本年は岩手県を調査対象地域とした。

理由は下記の通りである。

- ①岩手県は「2016 希望郷いわて大会 第 16 回全国障害者スポーツ大会」開催実績があり、その 3 年後となる本年（2019 年）時点での地域現場における大型障害者スポーツ大会実施後の環境を把握したい。
- ②岩手県は県協会（岩手県障がい者スポーツ協会）があるが、他にも全国的には政令指定都市以外では珍しい市町村単位の障害者スポーツ協会を有している。（一関市障がい者スポーツ協会）
- ③東京 2020 開催決定で社会インフラの急激な発達や環境の激変地域に該当しない。
- ④東京圏（東京 2020 オリンピック・パラリンピックの影響を考慮）と中部・九州圏（過去に調査実施済の地域）に該当しない。

などが岩手県選出の理由になる。

一般的には地域での障害者スポーツ環境の充実や整備、発展等は全国障害者スポーツ大会（以下、「全スポ」）の開催に伴い、大きく進歩する実情があるが、2016 年の全スポ岩手大会開催後、3 年を経過した現時点で、どのような変化がもたらされているのか？を確認したいと考えた。

また、全国的には政令指定都市以外の市町村単位で障害者スポーツ協会が設立されるケースは、まだまだ希少である中、一関市障がい者スポーツ協会を有する岩手県の取り組みは他府県にとっても有益になることが期待される。

※参考情報：第 1 回目調査地域の静岡県には県障害者スポーツ協会はあるが同県内の 2 政令指定都市（静岡市、浜松市）には独立した障害者スポーツ協会がない。また、第

2 回目調査地域の福岡県には県協会があり、さらに 2 政令指定都市（福岡市、北九州市）にも、それぞれ市協会が存在する。

本年度、岩手県での調査実施にあたり、多大なご協力をいただいた「一般社団法人岩手県障がい者スポーツ協会」「岩手県障がい者スポーツ指導者協議会」「一関市障がい者スポーツ協会」の皆様へ厚くお礼を申し述べたい。

## ■岩手県内の各関係組織について

岩手県内には障害者スポーツに関わる以下の団体がある。（順不同）

### 【岩手県全域】

- ・一般社団法人岩手県障がい者スポーツ協会
- ・岩手県障がい者スポーツ指導者協議会

### 【一関市】

- ・一関市障がい者スポーツ協会

本調査では、これら団体や事業活動を調査対象とした。

岩手県の地域特性としては、北海道に次いで全国第 2 位の面積を誇る広大な地域であり、県内は大きく 4 つの地域で構成されている。

盛岡市や滝沢市を含む「県央地区」。

二戸市や久慈市を含む「県北地区」。

一関市や奥州市、平泉町などを含む「県南地区」。

宮古市や釜石市など三陸海外地域を含む「沿岸地区」である。

岩手県障がい者スポーツ協会（以下、「県協会」）は「県央地区」の県庁所在地である盛岡市に所在する県社会福祉施設「ふれあいランド岩手」内に事務局がある。

「県協会」は県内全域をカバーし活動している。主な事業活動は①「生涯スポーツ系～スポーツを楽しもう!」、②「リハビリスポーツ系～まずはやってみよう!」、③「競技スポーツ系～目指せ全国障害者スポーツ大会&パラリンピック」、④「障がい者スポーツ指導者養成事業」、⑤「各種大会運営事業」である。

県内の各種障害者スポーツ教室や競技大会運営にあたり、岩手県障がい者スポーツ指

導者協議会（以下、「指導者協議会」と連携し障がい者スポーツ指導員の協力を得ながら事業活動を行っている。

また、県競技大会運営などでは、一般県民を対象にボランティア（※愛称「ココパト（ココロをつなぐパートナーの略）」）を募って支援を得る取り組みを行っている。

盛岡市内に位置する「ふれあいランド岩手」は“障害者専用スポーツ施設”でないため、「県協会」は同施設を含め、県内各地の一般スポーツ施設や公民館などを活用して活動に取り組んでいる。

県南地区に位置する一関市には「一関市体育協会」の加盟団体の1つとして2018年に「一関市障がい者スポーツ協会（以下、『市協会』）」が設立され、一関市民のみならず、近隣地区の平泉町、奥州市など県南地区での障害者スポーツ振興活動を積極的に推進している。

岩手県内の各協会が取り組む事業における特筆すべき事項として県境を挟んで宮城県北部地域の栗原市、登米市などとも活動連携する他、岩手県一関市同様に政令指定都市でない宮城県気仙沼市にある「気仙沼市障害者スポーツ協会」とも交流事業を行うなど、岩手県内の障害者スポーツ組織は県のボーダーを越えて、広い視野で事業活動に取り組んでいることが挙げられる。

「市協会」は、一関市体育協会とも連携して事業活動している。

全国的にも珍しい、政令指定都市ではない一般的な地方都市である一関市において独立した障がい者スポーツ協会設立に至った経緯を関係者に伺ったところ、「市協会」は、障害の有無に関わらず運動やスポーツができる環境の整備、社会の実現を目指し、一関市身体障害者福祉協議会長、2016年希望郷いわて水泳大会の金メダリストら5人が発起人となり発足された。（2018年2月14日）その後、同年2月28日に一関市体育協会の正会員となった。「市協会」は一関市体育協会加盟の種目別協会として、行政、市体育協会、企業など様々な団体との幅広い連携をもって、障害者スポーツの普及、競技力の向上に資する活動を展開している。

具体的には、積極的に市民へ障害者スポーツの楽しさや理解を深める活動、障害者スポーツ選手のサポート、障害者スポーツの普及、大会への選手派遣を行っている。また、これ以外にも一関市体育協会や一関市が主催する事業に対し、主管、協力するなど、協会会員が一致団結して各種事業に取り組んでいる。

なお、「市協会」の主な実績は以下の通り（2019年12月現在）。

- ①みんなのスポーツフェスタ 2018・2019（主催：一関市・一関市体育協会）  
内容：障害者スポーツの指導やデモンストレーションなど
- ②第37・38回 一関国際ハーフマラソン大会（主催：一関市・一関市体育協会他）  
内容：貴重品・荷物預かりコーナーでの受付、対応など
- ③いちのせき健康スポーツフェア 2018・2019（主催：一関市・一関市体育協会他）  
内容：障害者スポーツの指導やデモンストレーションなど

「県協会」では毎年、盛岡市にて岩手県障がい者スポーツ大会を開催しているが、県内各地でも、複数の市町村が協力し合い、合同で障害者スポーツ活動（教室、交流会、大会など）を開催するなど、県内各地で障害者スポーツ推進が非常に活発である。

#### 【報告者による考察】

複数の市町村が合同で、時には県境も越えて障害者スポーツを推進している理由を探るべく、県内4地区を巡って現場に密着しフィールドワークを実施することで見てきたことがあった。それは以下の事項である。

- ①2016全スポ岩手大会開催がもたらした環境変化を大切にしている（レガシー）。
- ②県内各地域で高齢化（65歳以上の人口構成比）が急速に進んでおり高齢者比率が50%超の地区が顕在化、高齢者の健康寿命延伸が急務（生涯スポーツ）。
- ③2011東日本大震災では沿岸地区を中心に津波で甚大な被害が発生しており、未だに沿岸地区では復興途上にあり、まずは人と人の絆や暮らしの充実が重要（コミュニティー再生）。

そして、これらは後述する岩手県内の様々な障害者スポーツ推進活動と密接な関係にあることもわかった。岩手県内の障害者スポーツ推進は上記に挙げた「レガシー」「生涯スポーツ」「コミュニティー再生」が根幹にあり、そしてもちろん障害当事者の可能性に対する理解や発見をスポーツ機会の提供を通じて継続的に働きかけている点にある。

（尾鍋文光）

## ■調査概要

調査設計にあたり、当財団障害者スポーツ・プロジェクトの齊藤まゆみ氏（筑波大学 体育系 准教授）に引き続き監修いただくとともに、同プロジェクトの小淵和也氏（笹川スポーツ財団 スポーツ政策研究所 政策ディレクター）にも協力いただいた。調査票は前年度版をベースに、岩手県内の各協会の確認を経て最適化を図った。

特に今年度は「障がい者スポーツ指導員調査」において、指導員としての活動参加度を高めるためには具体的に何が必要か？の設問項目を追加している。

### <調査対象>

- ・第21回岩手県障がい者スポーツ大会参加選手、県内各地で開催の競技大会や交流会、スポーツ教室受講者：回収数
- ・岩手県内の障がい者スポーツ指導員：回収数

### <実施内容>

- ・調査票配布・返送方式（参加者向け、指導員向け）
- ・フィールド調査（視察）

### <日程・場所>

#### 【スポーツ教室・練習】

- ・5月18日（土）障がい者卓球教室（ふれあいランド岩手/盛岡市）
- ・5月19日（日）知的障がい者バスケットボール（盛岡峰南高等支援学校/盛岡市）

#### 【競技大会】

- ・6月1日（土）第21回岩手県障がい者スポーツ大会（盛岡市）  
岩手県営運動公園（開閉会式/陸上・フライングディスク）  
ふれあいランド岩手（水泳・アーチェリー・卓球）  
盛岡スターレーン（ボウリング）

#### 【普及啓発イベント（交流事業）】

- ・5月17日（金）宮古圏域障がい者スポーツ交流会  
宮古市民総合体育館シーアリーナ（宮古市/沿岸地区）

- ・6月28日（金） 令和元年度一関地方ふれあいスポーツ大会  
一関市総合体育館ユードーム（一関市/県南地区）
- ・7月7日（日） 希望郷いわてオープン2019卓球バレー交流大会  
ふれあいランド岩手（盛岡市/県央地区）
- ・11月16日（土） 中山地区卓球バレー交流会  
奥中山地区公民館多目的ホール（一戸町/県北地区）

【他県との交流事業】

- ・9月7日（土） 一関市障がい者スポーツ協会&気仙沼市障害者スポーツ協会  
交流事業 卓球バレー 第2回体験交流会  
本吉保健福祉センター（宮城県気仙沼市）

## 1-1 アンケート調査

### 1-1-1 大会参加選手対象調査結果

本項では、第21回岩手県障がい者スポーツ大会参加選手を対象に実施したアンケート調査結果について報告する。

調査期日：6月1日（土）

調査大会名：第21回岩手県障がい者スポーツ大会（盛岡市）

調査会場：岩手県営運動公園（開閉会式/陸上・フライングディスク）

ふれあいランド岩手（水泳・アーチェリー・卓球）

盛岡スターレーン（ボウリング）

#### 1) 回答者の属性

アンケート調査は532名より回答を得た。回答者の属性を図表1に示す。対象者の72%が普段からスポーツ・身体を動かす機会があると回答しており、性別では男性が340名（63.9%）、女性が187名（35.2%）であった。この比率は、パラリンピアンを対象とした調査（YMFS,2013）、ジャパンパラ大会参加者を対象とした調査（YMFS,2015）、地域における実態調査（YMFS,2017;YMFS,2018）とほぼ同じであることが示された。

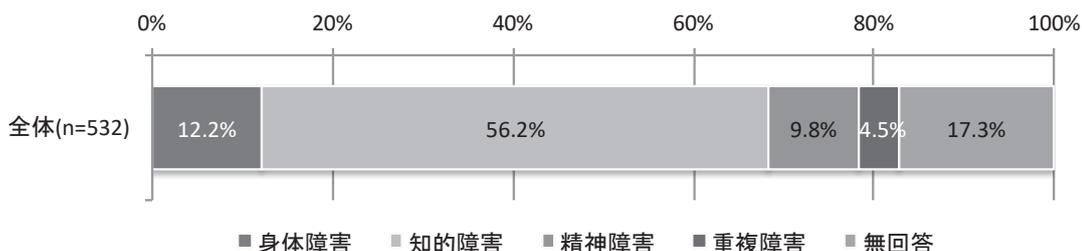
参加者の年齢は6歳から60歳以上まで幅広いが、16-18歳（117名,22.0%）が最も多く、次いで、40-49歳（77名,14.5%）、23-29歳と30-39歳（64名,12.0%）となっており、平均年齢は33.6歳（SD17.5）と10代から40代の参加者が多いことがわかる。その多くは、施設利用者・就労予定者を含む無職（261名,49.1%）であり、次いで生徒・学生（160名,30.1%）であった。

属性		全体 (n=532)	
		件数	割合
性別	男性	340	(63.9%)
	女性	187	(35.2%)
	無回答	5	(0.9%)
年齢	5歳以下	-	-
	6～12歳	2	(0.4%)
	13～15歳	36	(6.8%)
	16～18歳	117	(22.0%)
	19～22歳	40	(7.5%)
	23～29歳	64	(12.0%)
	30～39歳	64	(12.0%)
	40～49歳	77	(14.5%)
	50～59歳	48	(9.0%)
	60歳以上	52	(9.8%)
	無回答	32	(6.0%)
職業	生徒・学生	160	(30.1%)
	プロ選手（競技収入により生計を立てている）	-	-
	教員（公立・私立問わず）	2	(0.4%)
	官公庁・自治体職員	1	(0.2%)
	団体職員	-	-
	病院職員	3	(0.6%)
	リハビリ施設職員	-	-
	福祉施設職員	19	(3.6%)
	スポーツクラブ職員	-	-
	一般企業の会社員	14	(2.6%)
	自営業	4	(0.8%)
	主婦・主夫	12	(2.3%)
	無職（施設利用者・就労予定者を含む）	261	(49.1%)
	その他	34	(6.4%)
	無回答	22	(4.1%)

図表 1. 回答者の属性

## 2) 障害の程度・種類

障害の程度について、保有する障害者手帳をもとに図表2に示した。まず、身体障害（視覚障害、聴覚障害、肢体不自由、内部障害）が65名（12.2%）、次に知的障害が299名（56.2%）であり、精神障害52名（9.8%）、重複障害（身体・知的、身体・精神）24名（4.5%）、無回答92名（17.3%）と全回答者に占める知的障害者の割合が高いことが示された。



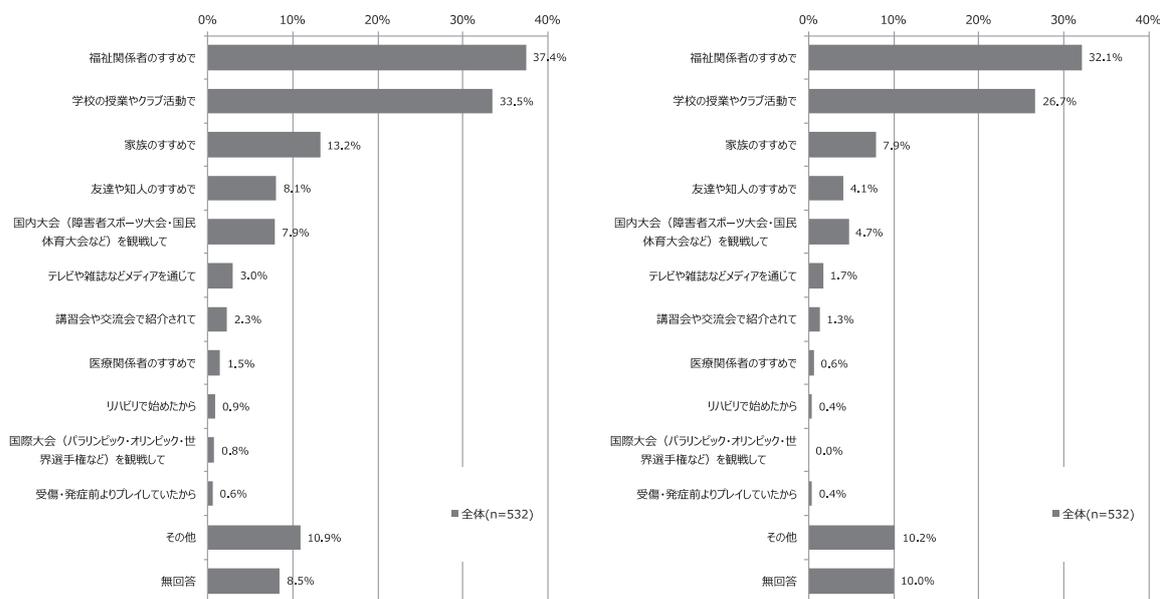
図表 2. 障害の程度・種類

## 3) 出場予定競技と始めたきっかけ

図表3は、各大会の出場予定競技（複数回答）を示したものである。フライングディスクが最も多く、次いで陸上競技、ボウリング、卓球、水泳の順であった。次に、図表4は、その競技を始めたきっかけについて示したものである。福祉関係者のすすめ（37.4%）が最も多く、次いで学校の授業やクラブ活動で（33.5%）、家族のすすめ（13.2%）、友達や知人のすすめで（8.1%）、となっており、特に影響が強いものとして「福祉関係者」の存在が示された。

	全体 (n=532)	
	件数	割合
フライングディスク	177	(33.3%)
陸上競技	164	(30.8%)
ボウリング	78	(14.7%)
卓球	56	(10.5%)
水泳	14	(2.6%)
アーチェリー	1	(0.2%)
車いすバスケットボール	-	-
グランドソフトボール	-	-
バスケットボール(知的)	-	-
サッカー(知的)	4	(0.8%)
バレーボール(聴覚・知的・精神)	9	(1.7%)
ソフトボール(知的)	-	-
フットボールベース(知的)	-	-
無回答	50	(9.4%)

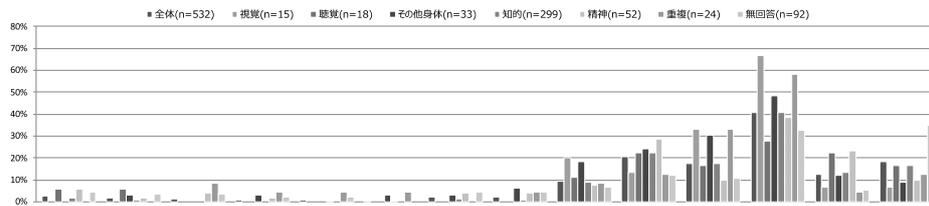
図表 3. 出場予定競技



図表 4. 競技を始めたきっかけ（左）と最も影響があったきっかけ（右）

#### 4) 障害者スポーツ選手としての目標

図表5は、障害者スポーツ選手としての目標を示したものである。調査時に出場している大会出場が最も多く（216件,40.6%）、全国障害者スポーツ大会出場（110件,20.7%）、県大会のメダリスト（93件,17.5%）と続くことから、参加者の意識はパラリンピックを頂点とする競技スポーツのピラミッド構造を志向するのではなく、地域のスポーツ大会に出場するという、身近で具体的な目標を持っていることが示された。そこで、障害種別に目標について見たところ、聴覚障害、知的障害、精神障害のある参加者では、パラリンピックやデフリンピック、世界選手権等のメダリストという競技志向が見られることも示された（図表5）。また、その他の内容をまとめると、健康・体力の維持向上、参加、継続というキーワードが得られ、参加すること自体が目的であることも示された。一方で、現在の競技が全国大会等につながるものではないため、目標を持つことができないという意見もあることから、競技者のニーズとスポーツの選択肢との間に齟齬があることが推察された。これは障害特性に起因するスポーツ環境の整備状況に関する部分と、居住地に関する課題の両面が存在すると考えられる。



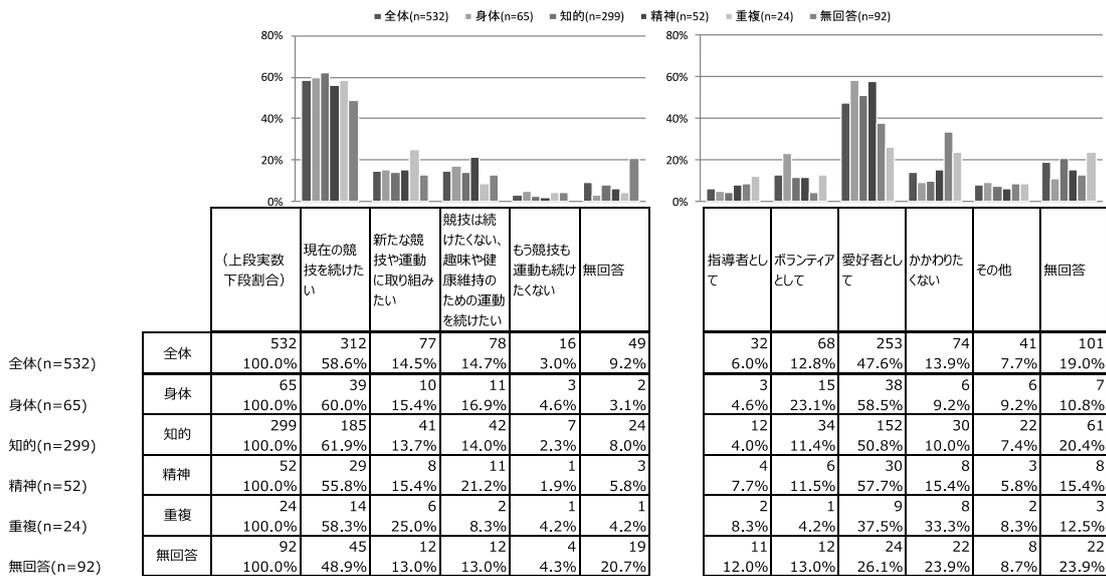
	全体(n=532)	視覚(n=15)	聴覚(n=18)	その他身体(n=33)	知的(n=299)	精神(n=52)	重複(n=24)	無回答(n=92)							
全体(n=532)	532	13	9	7	5	4	3	11	12	49	110	93	216	67	97
視覚(n=15)	15	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	2	5	10	1
聴覚(n=18)	18	1	1	-	-	-	-	-	-	2	4	3	5	4	3
その他身体(n=33)	33	-	1	-	1	-	-	1	1	2	6	8	10	16	4
知的(n=299)	299	5	3	-	-	1	1	4	3	26	67	52	122	40	50
精神(n=52)	52	3	1	2	1	-	-	2	2	4	15	5	20	12	5
重複(n=24)	24	-	-	2	1	1	1	-	1	2	3	8	14	1	3
無回答(n=92)	92	4	3	3	2	2	2	4	4	6	11	10	30	5	32

※障害種別は複数回答

図表 5. 障害者スポーツ選手としての目標（障害種別）

5) 今後のスポーツ活動について（行いたいこと・関わり方）

図表 6 は、今後のスポーツ活動についての希望をまとめたものである。現在の競技を続けたい（312 件,58.6%）、新たな競技や運動に取り組みたい（77 件,14.5%）である。選手引退後の障害者スポーツとの関わり方については、愛好者としてが最も多く（253 件,47.6%）、ボランティア（68 件,12.8%）や指導者（32 件,6.0%）として何らかの形でスポーツと関わりを持つことを希望するという回答が多かった。そこで障害種別に見たところ、精神障害のある参加者では現在の競技を続けたいが 29 件（55.8%）で全体の傾向よりも低く、反対に競技としては続けたくないが 11 件（21.2%）と全体の傾向よりもやや高いことが特徴として指摘された。現状は大会種目としての選択肢が少ないことが影響していると思われる。また、「もう競技も運動も続けたくない（16 件,3.0%）」や「かかわりたくない（74 件,13.9%）」は、昨年実施した福岡での地域調査（YMFS,2018）でも同様の傾向を示しており、運動における成功体験の少なさや自己肯定感が低い（松原,2014, 澤江,2017）ことが影響している可能性があり、よりアダプテッドの視点を持った運動機会を持てる環境の構築が課題として指摘される。



図表 6. 今後のスポーツ活動について 左:行いたいこと 右:引退後の関わり方 (障害種別)

6) 学齢期の体育授業について

図表7は、学齢期の学校体育について示したものである。知的障害と重複障害では小学校、中学校、高校と年齢が上がるにつれて通常の学級の在籍割合が低くなり、特別支援学校の在籍割合が高くなっている。これは従来の調査報告と同様の傾向である。

		小学校 (人)	中学校 (人)	高校 (人)	
障害種別 在籍 学校種	身体	通常の学級	22	21	13
		特別支援学級	6	4	-
		特別支援学校	17	21	27
	知的	通常の学級	58	38	9
		特別支援学級	115	114	-
		特別支援学校	48	73	200
	精神	通常の学級	38	33	27
		特別支援学級	5	9	-
		特別支援学校	1	1	13
重複	通常の学級	4	3	3	
	特別支援学級	6	4	-	
	特別支援学校	6	8	15	

図表 7. 障害種別在籍学校種

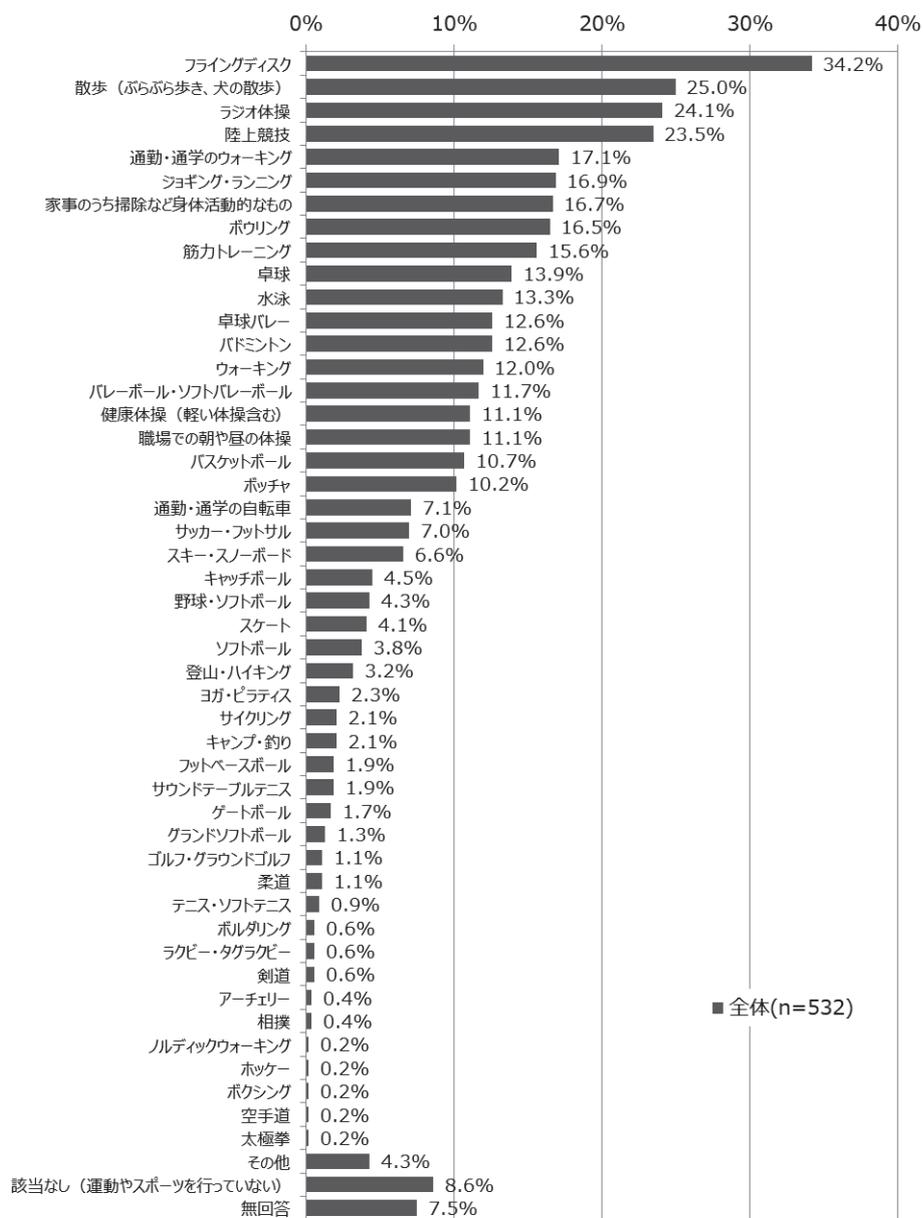
次に、障害種別に学校種別の体育実施状況を見ていく。図表8は、小学校、中学校、高校における在籍学校別の体育授業参加状況を示している。その結果、小学校では、ほぼ参加が通常の学級（107名,74.3%）、特別支援学級（82名,57.7%）、特別支援学校（52名,66.7%）であり、特別支援学級在籍の場合に、体育への参加度が低いことが示された。また、児童の一部に、不参加やほぼ見学、代替え授業という回答が示されており、最も必要な時期に十分な運動経験を得られていない事例があることが示された。中学校では通常の学級の在籍数が減り特別支援学校の在籍数が増える傾向にあるが、ほぼ参加が、通常の学級（78名,69.6%）、特別支援学級（93名,64.6%）、特別支援学校（83名,70.9%）であり、特別支援学級在籍の場合に、体育への参加度が低いことが示された。また、中学校でもほぼ見学、代替え授業や不参加という回答が示されている。高校ではほぼ参加が通常の学級（41名,68.3%）、特別支援学校（224名,75.9%）である。ここで特別支援学校での数値が75.9%であることに着目したい。従来の調査結果と比較しても低い。学齢期の体育授業との関わりは運動・スポーツへの意識や態度を涵養するものであり、特別支援学校における体育は、個別のニーズに合わせたアダプテッドがあれば参加できることから、特別支援学校という「ニーズに合わせた支援」の専門性が高い教育の場において、まずはアダプテッド体育の必要性を浸透させていく必要がある。

		通常の学級							
		上段実数 下段割合	ほぼ参加し た	できるものは 参加した	ほぼ見学	代替え授業	不参加	その他	無回答
小学校		144 100.0%	107 74.3%	22 15.3%	2 1.4%	4 2.8%	3 2.1%	-	6 4.2%
中学校		112 100.0%	78 69.6%	17 15.2%	5 4.5%	4 3.6%	2 1.8%	-	6 5.4%
高校		60 100.0%	41 68.3%	11 18.3%	2 3.3%	-	1 1.7%	-	5 8.3%
		特別支援学級							
		上段実数 下段割合	ほぼ参加し た	できるものは 参加した	ほぼ見学	代替え授業	不参加	その他	無回答
小学校		142 100.0%	82 57.7%	48 33.8%	2 1.4%	1 0.7%	3 2.1%	-	6 4.2%
中学校		144 100.0%	93 64.6%	40 27.8%	2 1.4%	2 1.4%	3 2.1%	-	4 2.8%
		特別支援学校							
		上段実数 下段割合	ほぼ参加し た	できるものは 参加した	ほぼ見学	代替え授業	不参加	その他	無回答
小学校		78 100.0%	52 66.7%	17 21.8%	-	-	-	-	9 11.5%
中学校		117 100.0%	83 70.9%	22 18.8%	1 0.9%	-	-	-	11 9.4%
高校		295 100.0%	224 75.9%	52 17.6%	2 0.7%	1 0.3%	3 1.0%	-	13 4.4%

図表 8. 在籍校別に見た体育実施状況

7) 1年間に実施した運動

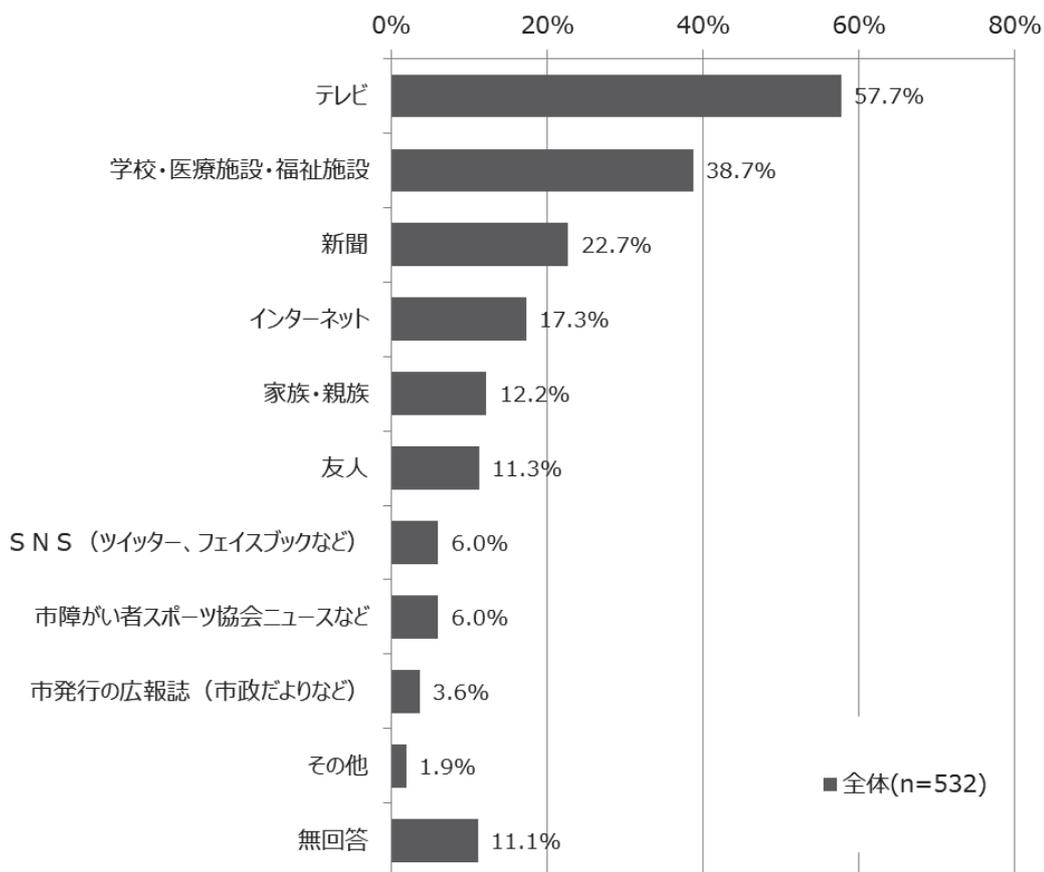
図表9は、1年間に健康を意識して実施したスポーツ・運動内容についての結果を示している。複数回答あり、1人あたり平均3.82種目を実施している。実施頻度の高い種目は、フライングディスク、散歩、ラジオ体操、陸上競技、通勤・通学のウォーキングの順となっており、個人や少人数で実施できるものが上位となっている。その中で、12位に卓球バレー（12.6%）が入っていることに注目したい。大会出場選手の10人に1人は卓球バレーを経験していることから、岩手県の特徴であると考えられる。



図表9. 1年間に実施した運動 (健康を意識して実施)

9) スポーツに関する情報入手先

図表 10 は、普段スポーツに関する情報をどのようにして入手しているかについての複数回答結果を示したものである。テレビが最も多く (57.7%)、次いで学校・医療施設・福祉施設 (38.7%) となっており、日常的に接点のある学校や施設が重要な情報拠点となっていることが示された。



図表 10. スポーツに関する情報入手先

10) 障害者スポーツの現状や課題 (自由記述)

障害者スポーツの現状や課題について自由記述で回答を求めたところ 116 件の回答が得られた。そこで内容ごとに類似するもので分類したところ、個人、指導者・支援者、施設・アクセス、機会、その他の 6 項目が生成された (図表 11)。個人とは目標や成功体験等の参加者自身に関する内容であり 34 件 (29%)、指導者・支援者に関する内容が 17 件 (15%)、施設・アクセスが 8 件(7%)、機会が 37 件 (32%)、その他 20 件 (17%) であった。いずれも貴重な意見であるため、詳細な分析は別途行うこととし、

本調査報告では特記事項のみ3点指摘する。まず、現状に対する肯定的な意見である。参加者自身の目標や成功体験から4人に1人が現状に対して肯定的な意見を自由記述に記載しており、現状に満足、継続参加したい、継続開催して欲しい、より高いレベルを目指したいという内容であった。一方で、障害種によって参加できる種目に制限があることへの不満や、参加したくても介助・支援者の問題で参加できないなど、スポーツのメリットを享受できている人とそうでない人との間に差が生じていることも示唆された。また、「出ると言われているから出ているだけ」という意見に代表されるように、当事者のスポーツに対する意識・動機付けのあり方についても課題がありそうだ。次に、スポーツ実施上の課題や障壁に関する内容である。そのうち施設面では、岩手県にはふれあいランド岩手をはじめとする障害者専用・優先のスポーツ施設はあるものの、本人の居住地によってはあまり利用できないこと、そのため居住地隣接で気軽にスポーツができる場所が欲しいという意見である。3点目はスポーツ参加への阻害因子として、人的資源不足（指導者、支援者、保護者への負担）、費用負担、情報不足が指摘され、健常者への理解・啓発、交流等の必要性を訴えるもの、学齢期終了後のスポーツ環境の構築や福祉施設等に指導者を派遣してスポーツを指導してくれるようなシステムの提案等、在住する地域での日常的なスポーツ環境を整えることを強く望む意見が挙げられていた。

項目	該当数（件）	具体例（一部抜粋）
個人	34	<ul style="list-style-type: none"> <li>・たのしいからこれからも大会に参加したい。</li> <li>・メダルが欲しい。</li> </ul>
指導者・支援者	17	<ul style="list-style-type: none"> <li>・障がい者スポーツ施設や競技場があっても、土・日に関わる指導者の確保が難しい。</li> <li>・競技参加時に介助を希望するが、引率職員の確保ができず、参加を断念しなければならないときもある。</li> </ul>
施設・アクセス	8	<ul style="list-style-type: none"> <li>・住んでいる市に障がい者スポーツの団体や障がい者が気軽にスポーツをする施設がない。</li> <li>・自由に気がねなく利用できる場所がない。つきそいを断る所も多い。</li> </ul>
機会	37	<ul style="list-style-type: none"> <li>・福祉施設等に指導者を派遣してスポーツを指導してくれるようなシステムがあればもっとスポーツに親しめるのになと思う。</li> <li>・学校卒業後は体を動かす機会がない。自分で行動できる人や理解ができるような人でないと、介助が必要なためスポーツをしたくてもなかなかむずかしいと思っている。</li> <li>・なかなか人数が集まらず練習ができない時もある。皆に知ってもらって、試合に出たい。</li> </ul>
その他	20	<ul style="list-style-type: none"> <li>・出ると言われているから出ているだけで、自主的に参加している人がどれほどいるのか</li> </ul>

図表 11. 大会参加選手が指摘する障害者スポーツの現状や課題

### 1-1-2 スポーツ教室受講者対象調査結果

本項では、盛岡市・ふれあいランド岩手で開催された障がい者卓球教室の受講者と盛岡市・盛岡峰南高等支援学校で開催された知的障がい者バスケットボール教室受講者を対象とした調査結果について報告する。

#### 1) 回答者の属性

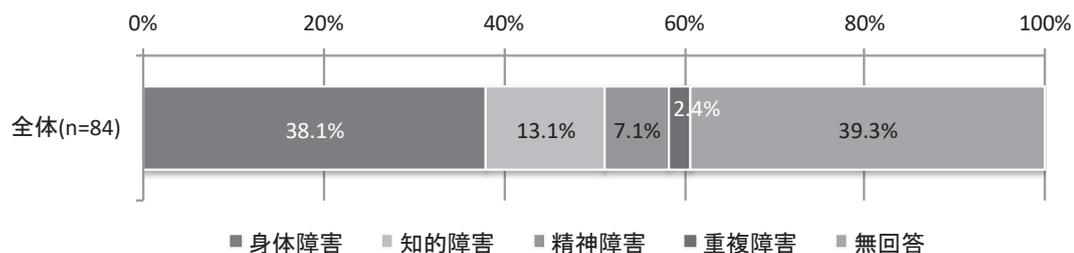
本調査は84名より回答を得た。回答者の属性を図表12に示す。性別では男性が40名(47.6%)、女性が22名(26.2%)、無回答22名(26.2%)であった。年齢層は20代から80代まで幅広いが、40代~70代の参加者が全体の半数以上を占めており、無職が多く、無回答(主に施設・作業所等の利用者)が多いのが特徴である。

属性		全体 (n=84)	
		件数	割合
性別	男性	40	(47.6%)
	女性	22	(26.2%)
	無回答	22	(26.2%)
年齢	10歳未満	-	-
	10代	-	-
	20代	7	(8.3%)
	30代	-	-
	40代	10	(11.9%)
	50代	11	(13.1%)
	60代	9	(10.7%)
	70代	14	(16.7%)
	80代	3	(3.6%)
無回答	30	(35.7%)	
職業	生徒・学生	-	-
	プロ選手(競技収入により生計を立てている)	-	-
	教員(公立・私立問わず)	-	-
	官公庁・自治体職員	-	-
	団体職員	2	(2.4%)
	病院職員	1	(1.2%)
	リハビリ施設職員	-	-
	福祉施設職員	5	(6.0%)
	スポーツクラブ職員	-	-
	一般企業の会社員	4	(4.8%)
	自営業	2	(2.4%)
	主婦・主夫	11	(13.1%)
	無職	26	(31.0%)
	その他	10	(11.9%)
無回答	23	(27.4%)	

図表 12. 回答者の属性

## 2) 障害の程度・種類

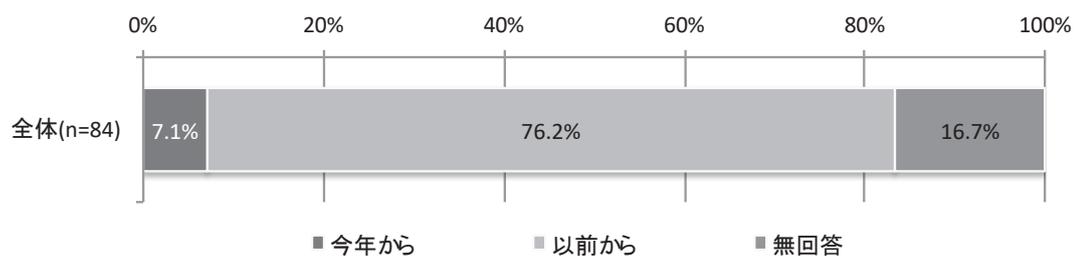
図表 13 は、障害の程度・種類について示したものである。身体障害 32 名 (38.1%)、知的障害 11 名 (13.1%)、精神障害 6 名 (7.1%)、重複障害 2 名 (2.4%)、無回答が 33 名 (39.3%)、うち中途障害者は 34 名 (40.5%) であった。



図表 13. 障害の程度・種類

## 3) スポーツ教室への参加歴

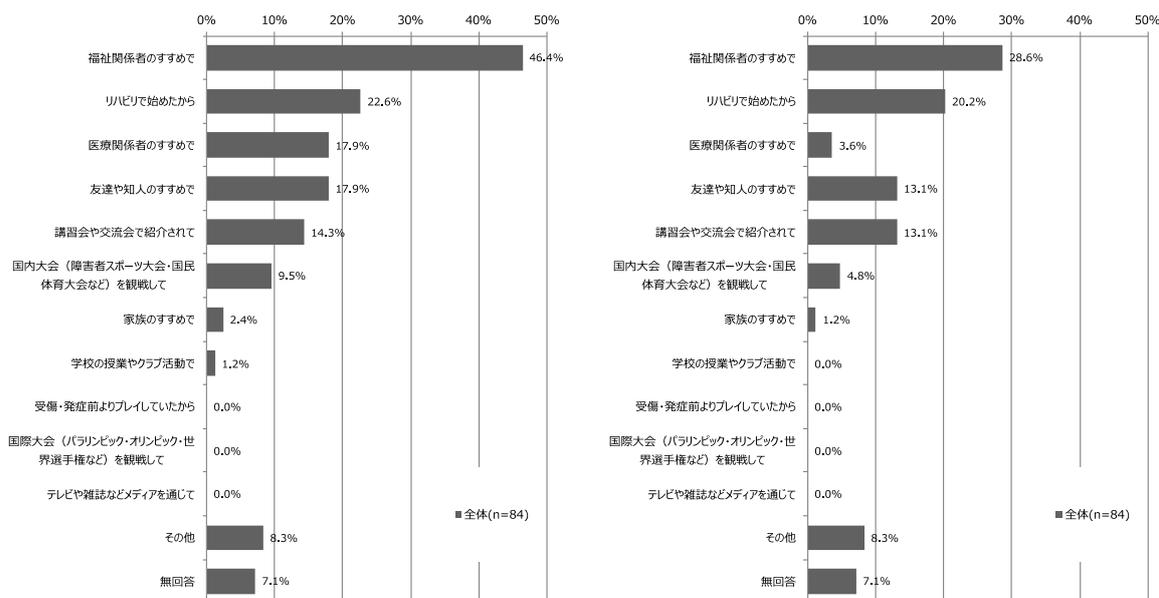
図表 14 はスポーツ教室への参加歴を示したものである。今年からが 6 名 (7.1%)、以前から参加しているが 64 名 (76.2%)、無回答 14 名 (16.7%) であり、平均 3.6 年であり、継続参加しているリピーターの多いことが示された。



図表 14. スポーツ教室への参加歴

#### 4) スポーツを始めたきっかけ

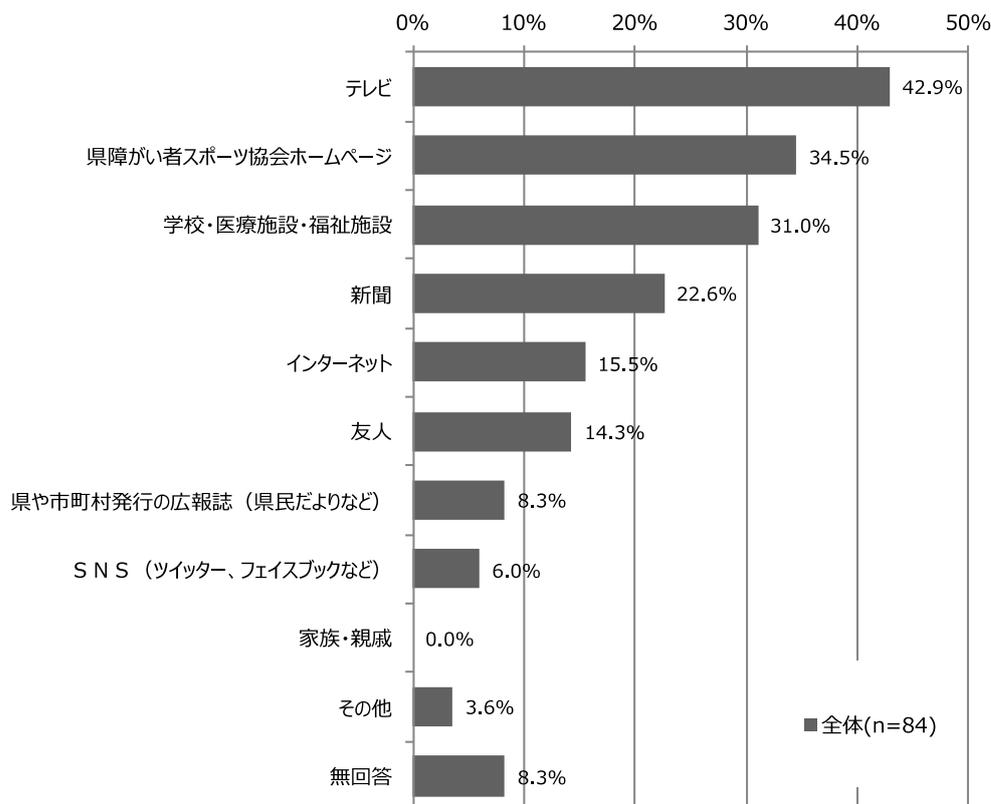
図表 15 は、スポーツを始めたきっかけについて示したものである。福祉関係者のすすめが最も多く、次いでリハビリで始めたから、医療関係者のすすめと友達や知人のすすめであった。その中で最も影響が強かったのも福祉関係者のすすめであった。過去に実施した地域調査結果とは異なり、医療関係者やコメディカルの影響が強いことが特徴であるが、対象とした教室の参加募集方法等が関連しているとも考えられる。



図表 15. スポーツを始めたきっかけ（左）と最も当てはまるきっかけ（右）

#### 5) 情報入手経路

図表 16 は、普段スポーツに関する情報をどのようにして入手しているかについての複数回答結果を示したものである。テレビが最も多く 36 件（42.9%）、次いで県の障がい者スポーツ協会ホームページ 29 件（34.5%）、学校・医療施設・福祉施設 26 件（31.0%）となっており、県の障がい者スポーツ協会や学校・医療施設・福祉施設がスポーツに関する情報入手経路として活用されていることが示された。特に岩手県障がい者スポーツ協会ホームページ（<https://www.iwate-adaptive.or.jp>）とそこに掲載される会報については、内容が充実しており、他の協会等においても参考になるものだろう。

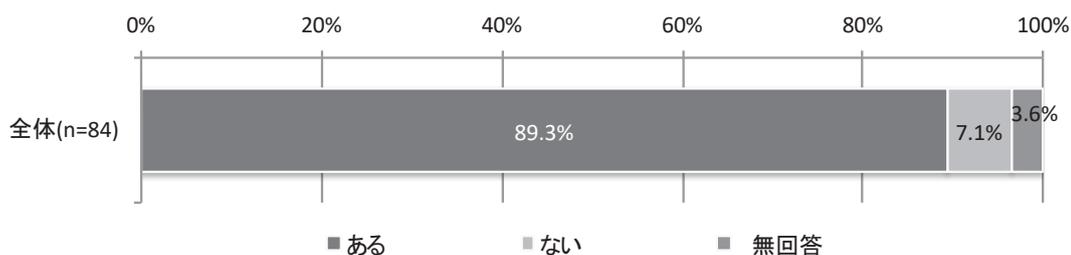


図表 16. 情報入手経路

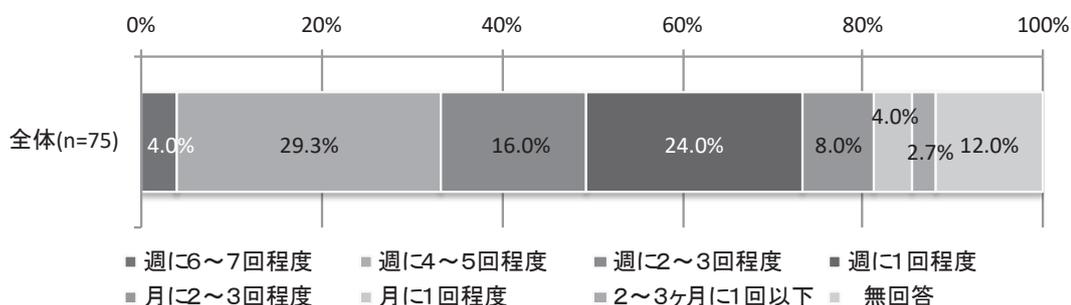
#### 6) 普段のスポーツ実施状況

図表 17-1～17-6 は、普段のスポーツ（身体を動かす）実施状況について示したものである。75名（89.3%）が機会はあると回答しており、その頻度は週あたり4～5回（22名,29.3%）が最も多く、次いで週あたり1回（18名,24.0%）、2～3回（12名,16.0%）となっていた。また、1回あたりの活動時間は1時間以内が最も多く（18名,24.0%）、次いで1時間から1時間半未満（17名,22.7%）、1時間半から2時間未満（9名,12.0%）であった。つまり週あたり1～5回の頻度で1回あたり約1時間程度のスポーツ（身体運動）を実施していることが推察された。この現状に対し、今のままでよいが54件（72.0%）で最も多く、機会を増やしたいが11件（14.7%）、時間を増やしたい8件（10.7%）、内容を変えたい3件（4.0%）であり、現状の活動に対する満足度が高いことが示された。

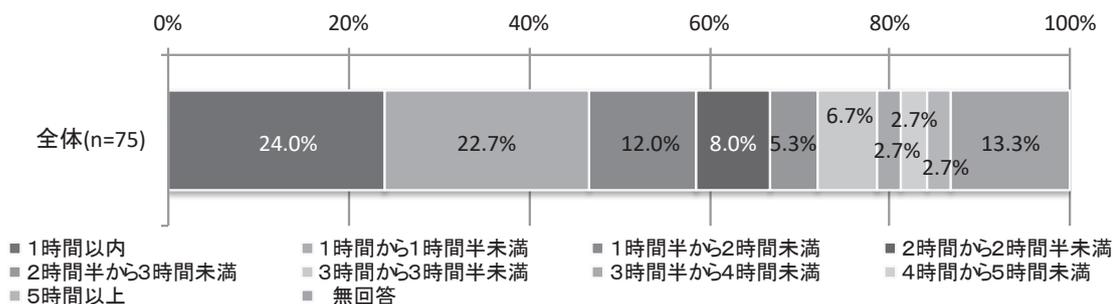
スポーツを行う場所は、障害者向け公共施設が最も多く（31名,41.3%）であり、次いで一般向け公共施設（19名,25.3%）であり、従来の調査では活用されていた学校施設という回答は0であった。また、誰とスポーツを行っているかについては、介護士や施設職員など福祉関係者（20名,26.7%）が最も多く、次いで理学療法士など医療関係者（16名,21.3%）、友人（13名,17.3%）であった。公認障がい者スポーツ指導員や父母、先生など学校関係者などの回答割合が低いことが特徴である。これらの結果から、障害者向け公共施設で、福祉関係者やコメディカルといった福祉環境で関わる人がスポーツ活動を支えている実態が推察される。調査対象のスポーツ教室は、卓球と車いすバスケットボールであったが、参加者居住地域は広範囲にわたっており、活動場所への移動時間が片道2時間を超える参加者も存在する。このように福祉的色彩が強いのは、学齢期終了後のスポーツ環境が学校（教育）から居住地域（福祉）へとうまく移行していることを反映した結果なのか、それとも参加者の年齢層が中高年であることに起因したかは今回の質問紙調査結果のみでは言及できない。



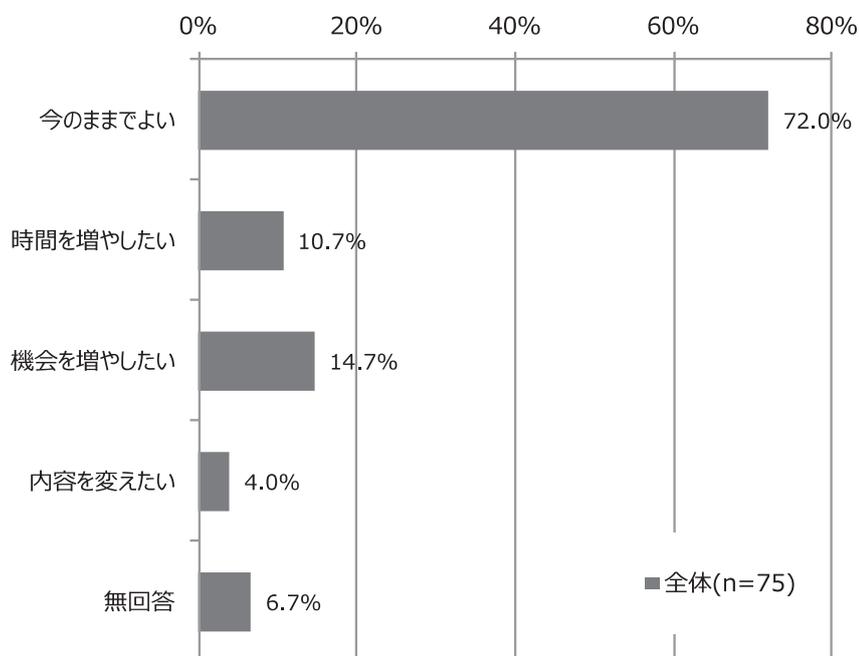
図表 17-1. 普段のスポーツ実施機会



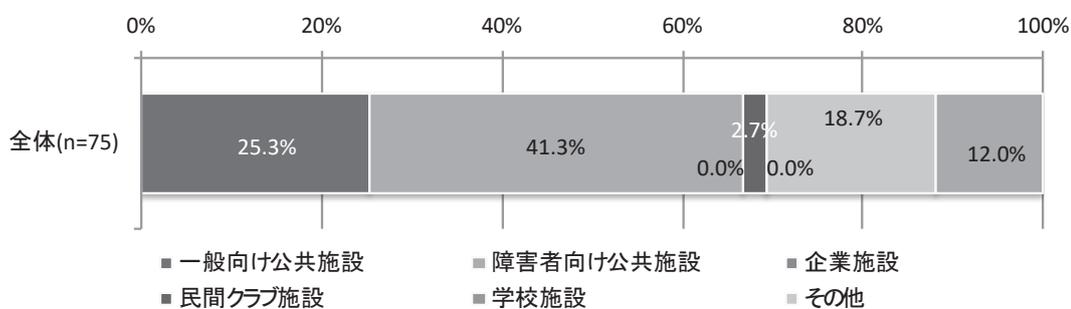
図表 17-2. 普段のスポーツ実施頻度



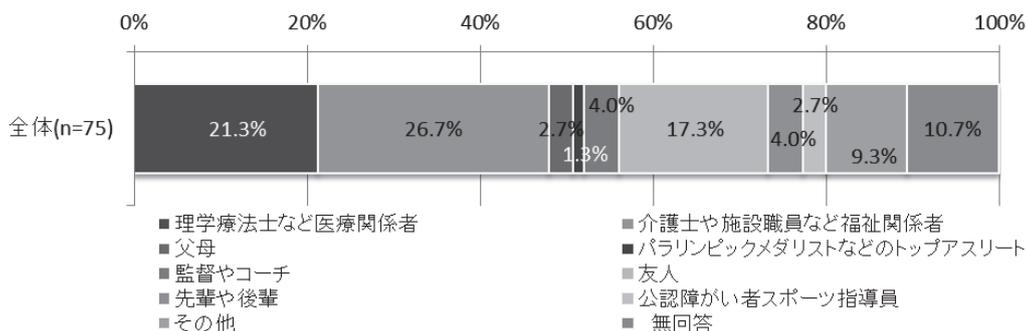
図表 17-3. 普段のスポーツ実施時間



図表 17-4. 普段のスポーツ実施内容



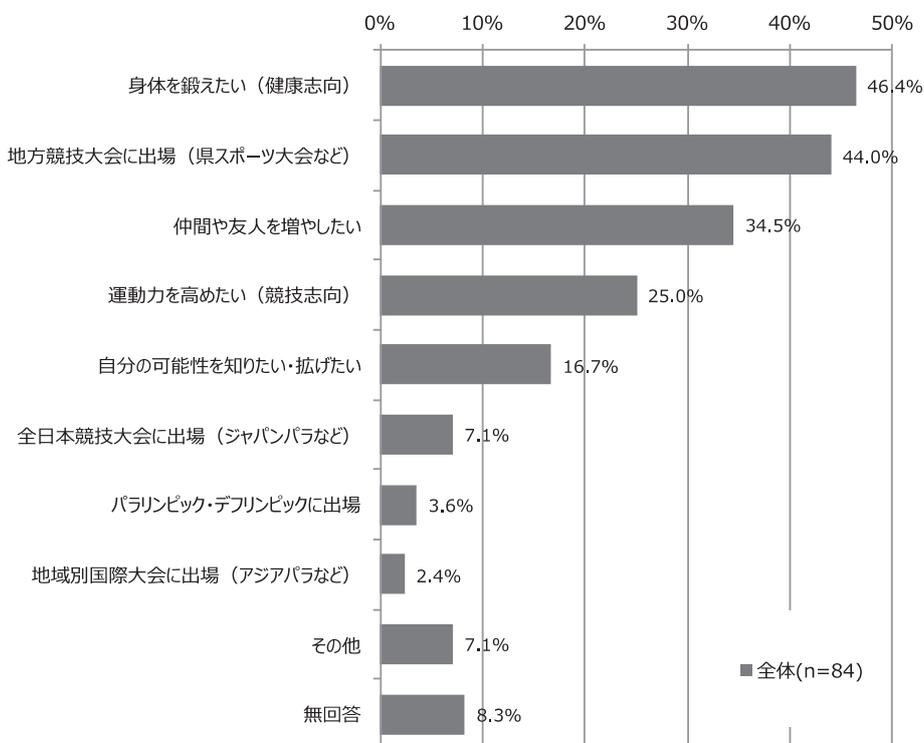
図表 17-5. 普段のスポーツ実施場所



図表 17-6. 普段のスポーツ実施相手

7) スポーツ実施上の目標

図表 18 は、スポーツをする上での目標について複数回答結果を示したものである。身体を鍛えたい（健康志向）という回答が最も多く 39 件（46.4%）であり、次いで地方競技大会に出場（県スポーツ大会など）37 件（44.0%）、仲間や友人を増やしたいが 29 件（34.5%）、運動力を高めたい（競技志向）21 件（25.0%）となった。健康志向と競技志向が混在していることが特徴的であり、継続するためには仲間の存在が、そして県大会等への出場がモチベーションとなっていることが推察される。



図表 18. スポーツ実施上の目標

## 8) 今後行いたいスポーツ

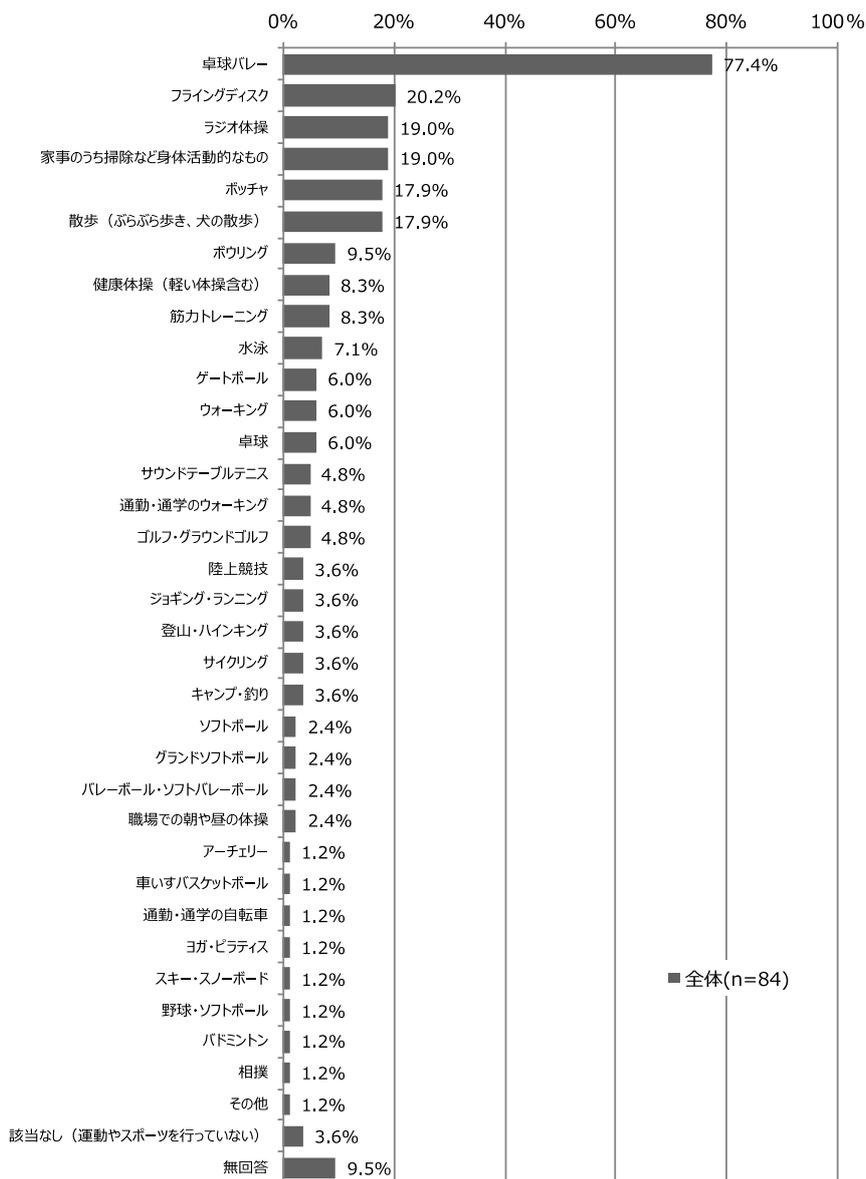
図表 19 は、今後行いたいスポーツについての自由記述結果をまとめたものである。レクリエーションとしては卓球バレーが、競技スポーツとしても、卓球バレーの希望が多いことが示された。次いで水泳やボウリングなどがあり、岩手の地域特性としてスキーも挙げられていた。

レクリエーションとして	件数	競技スポーツとして	件数
卓球バレー	4	卓球バレー	3
ボウリング	2	水泳	2
卓球	2	フライングディスク	1
サッカー	1	ボウリング	1
スルーネットピンポン	1	スキー	1
ビーチバスケットボール	1	スルーネットピンポン	1
フライングディスク	1	ジム	1
ブラインドテニス	1	その他	1
ポッチャゲーム	1		
相撲	1		
その他	2		

図表 19. 今後行いたいスポーツ

9) 1年間に実施した運動

図表 20 は、1年間に健康を意識して実施したスポーツ・運動内容についての結果を示している。複数回答あり、1人あたり平均 2.79 種目を実施している。実施頻度の高い種目は、卓球バレー、フライングディスク、ラジオ体操、家事のうち掃除など身体活動的なもの、ボッチャ、散歩の順となっており、卓球バレーの実施率が群を抜いている。



図表 20. 1年間に実施した運動 (健康を意識して実施)

### 1-1-3 指導者対象調査結果

本項では、岩手県の障害者スポーツの指導者を対象とした調査結果について報告する。

#### 1) 回答者の属性

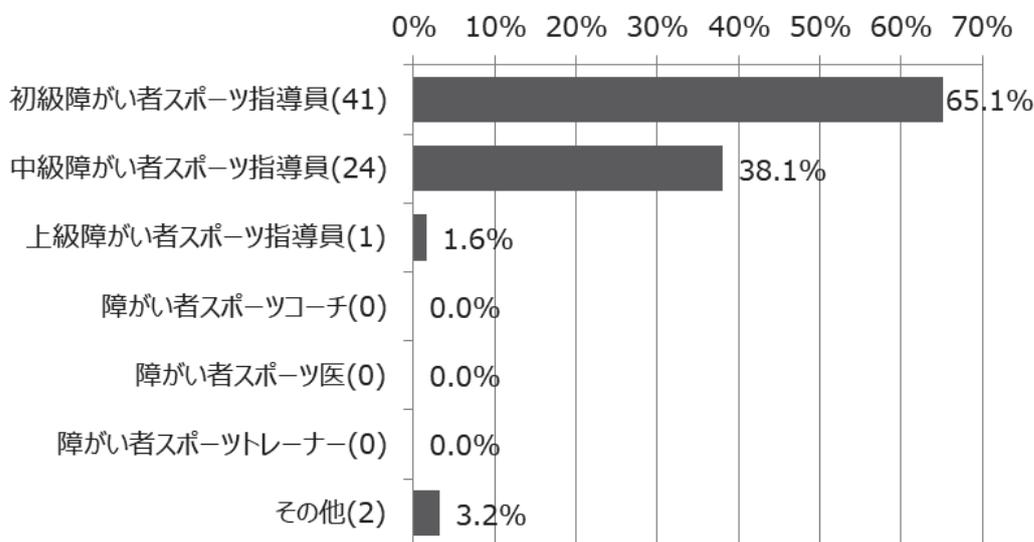
本調査は63名より回答を得た。回答者の属性を図表21に示す。性別では男性が43名(68.3%)、女性が20名(31.7%)であった。年齢層は20代から70代まで幅広いが、年齢層では40代と50代の指導者で全体の53.9%を占めていた。20代~30代も17名(27.0%)であることから、特に若い指導者が少ないというわけではなく、指導者育成や運動指導場面における年代間の好循環があると考えられる。職業としては、福祉施設職員が最も多く(17名,27.0%)、次いで教員(10名,15.9%)、病院職員(6名,9.5%)、自営業と一般企業の会社員がそれぞれ(5名,7.9%)となっており、学生や主婦・主夫という層が薄いのが特徴である。福祉関係者は、障害者のスポーツ活動拡大に向けた強力な理解者となる(日本障がい者スポーツ協会)ことから、障害者のスポーツ環境づくりにつながっていると考えられるが、継続して安定した指導者確保という視点からは、学生や主婦・主夫層の取り込みが課題であろう。

属性	全体(n=63)	件数	割合
性別	男性	43	68.3%
	女性	20	31.7%
年齢	20代	7	11.1%
	30代	10	15.9%
	40代	21	33.3%
	50代	13	20.6%
	60代	8	12.7%
	70代	4	6.3%
	80代	0	0.0%
職業	学生	2	3.2%
	プロ選手(競技収入により生計を立てている)	0	0.0%
	教員(公立・私立問わず)	10	15.9%
	官公庁・自治体職員	3	4.8%
	団体職員	4	6.3%
	病院職員	6	9.5%
	リハビリ施設職員	3	4.8%
	福祉施設職員	17	27.0%
	スポーツクラブ職員	2	3.2%
	一般企業の会社員	5	7.9%
	自営業	5	7.9%
	主婦・主夫	0	0.0%
	無職	2	3.2%
	その他	4	6.3%

図表 21. 回答者の属性

## 2) 障害者スポーツに関する資格

図表 22 は、障害者スポーツに関する資格についての複数回答結果を示したものである。初級障がい者スポーツ指導員が最も多く 41 件 (65.1%)、次いで中級障がい者スポーツ指導員の 24 件 (38.1%)、上級障がい者スポーツ指導員が 1 件 (1.6%) であった。障がい者スポーツ指導員には、生活圏内において障害のある人のスポーツ参加を推進する役割 (日本障がい者スポーツ協会) が期待されている。そこで、指導員がその専門性を活かして障害者専用・優先施設や生活圏内における公共スポーツ施設において、地域の指導者を統括する役割を果たしていければ、現在はあまり環境が整っていない地域においても、指導員を拠点とした障害のある人のスポーツ環境づくりが進むであろう。

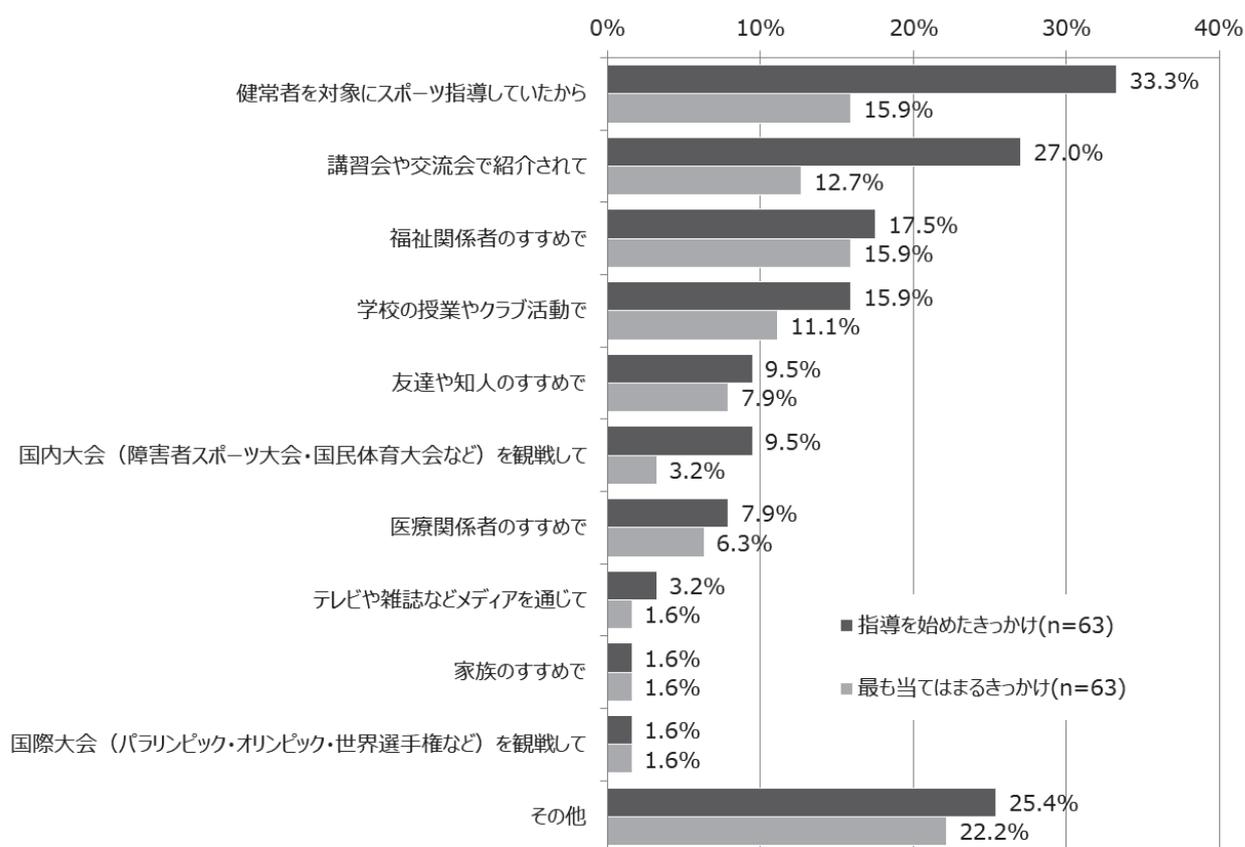


図表 22. 障害者スポーツに関する資格

## 3) 障害者スポーツ指導を始めたきっかけ

図表 23 は、障害者スポーツ指導を始めたきっかけについての複数回答結果を示したものである。最も多いのは健常者を対象にスポーツ指導していたから (33.3%) であり、次いで講習会や交流会で紹介されて (27.0%) となっている。そのうち最も影響が大きかったのは健常者を対象にスポーツ指導していたから (15.9%) と福祉関係者のすすめで (15.9%)、次いで講習会や交流会で紹介されて (12.7%) であった。過去に実施した YMFS の調査 (2014) では、競技性の高い障害者スポーツ選手への指導を始めたきっかけとして、健常者のスポーツ指導をしていたことが示されており、地域での障

害者スポーツ指導においても、スポーツ指導の専門性が障害者スポーツ指導への誘いになっていることが示された。しかしながら最も回答件数が多かったのは「その他」であった。そこでその内容を検討したところ、仕事をする上で必要であったことが最も多く、それ以外では自分自身や家族、知人など身近な存在が障害者である（となった）こと、もともと障害者のスポーツ指導に興味があったということが示された。つまり重要な他者は「身近な環境・障害者」であることから、未だ一部の特別な存在、活動に留まっている現状が示唆された。そのため、障害者のスポーツ活動が日常生活化するためには、スポーツをする障害者の姿を当たり前のように目にすることができる環境構築等、社会レベルでの施策が必要であると考えられる。



図表 23. 障害者スポーツ指導を始めたきっかけ

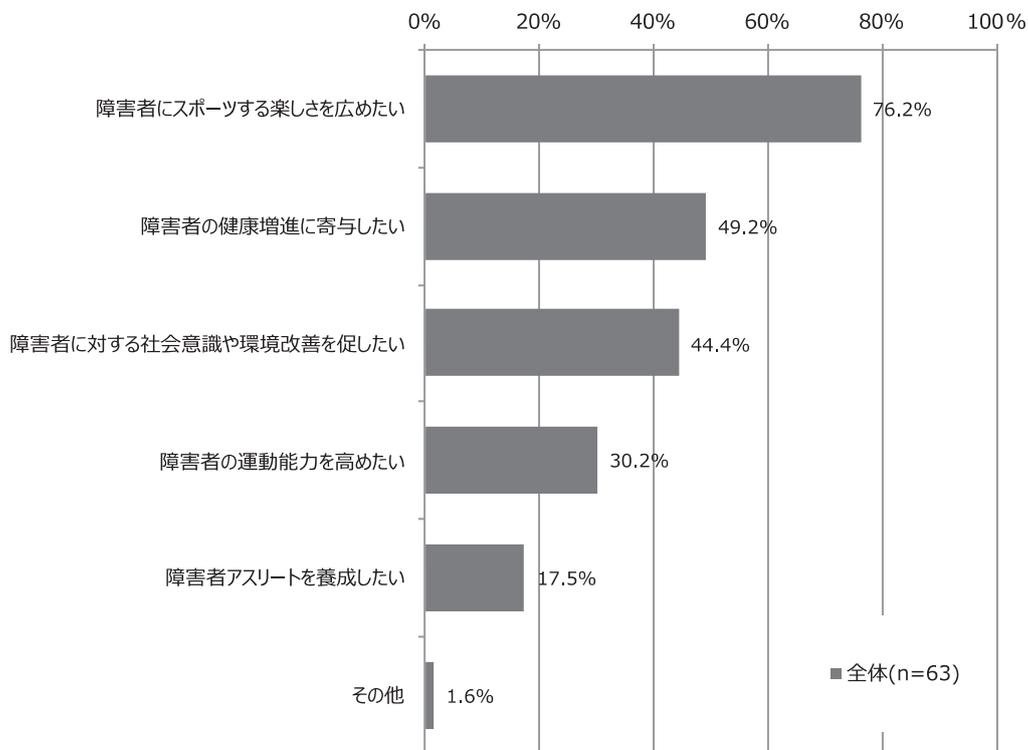
#### 4) 指導者としての活動状況（自由記述）

現在の活動状況については、45 件の回答があった。現在関わっているスポーツ指導や審判等の活動を継続すること、地域でのイベント活動への協力、勤務先（福祉施設や学校等）での指導など、現状維持を示唆する内容が多く見られた。また、全国大会に出

場するアスリート指導、競技性の高いスポーツ活動に携わること、上位資格取得へのステップアップ、新たに協会やNPOの設立を目指すなどを目標にするものも一定数存在している。これらのニーズを満たすためのステップアップ講習会や競技団体等の情報提供も必要であろう。

### 5) 障害者スポーツ指導をする上での目標

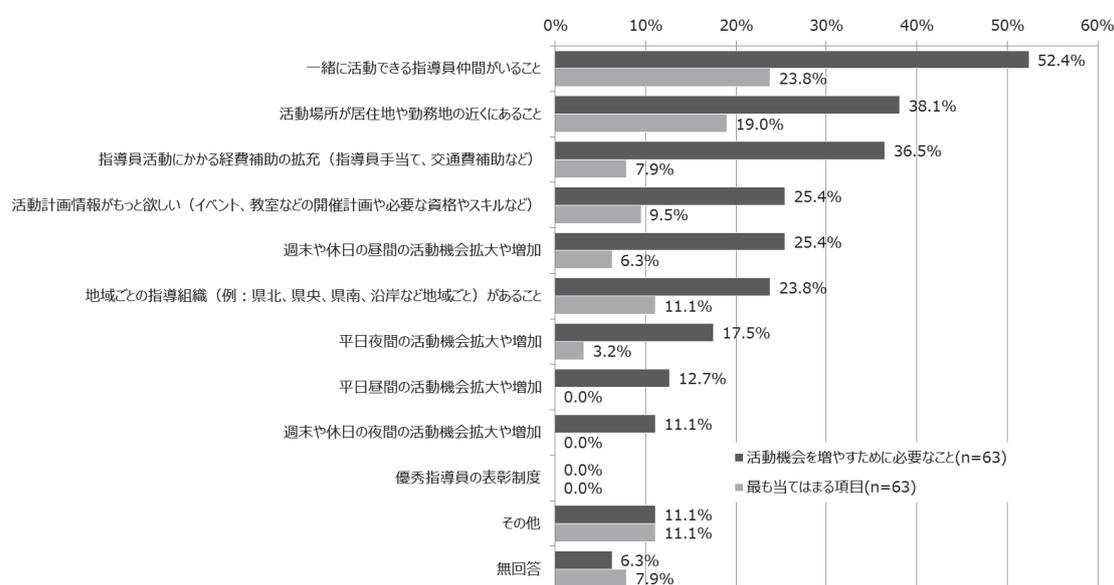
図表 24 は、障害者スポーツ指導をする上での目標について複数回答結果を示したものである。障害者にスポーツする楽しさを広めたい (76.2%)、障害者の健康増進に寄与したい (49.2%)、障害者の運動能力を高めたい (30.2%)、障害者アスリートを養成したい (17.5%) などの障害者スポーツ指導に関わる直接的な内容のみならず、障害者に対する社会意識や環境改善を促したい (44.4%) といった障害者を取巻く社会のあり方をも意識した目標を持っていることが示された。さらに、東京 2020 パラリンピックや全国大会に出場するアスリート指導、競技性の高いスポーツ活動に携わること、上位資格取得へのステップアップを目標にするものも一定数存在している。これらのニーズを満たすためのステップアップ講習会も岩手では開催されているようなので、資格を生かす指導実践の場や中央競技団体等の情報提供も必要であろう。



図表 24. 障害者スポーツ指導をする上での目標

## 6) 障がい者スポーツ指導員としての活動機会を増やすために必要なこと

図表 25 は、障がい者スポーツ指導員としての活動機会を増やすために必要なことについて複数回答結果を示したものである。一緒に活動できる指導員仲間がいること（52.4%）が最も多く、次いで活動場所が居住地や勤務先の近くにあること（38.1%）、指導員活動にかかる経費補助の拡充（36.5%）、活動計画情報がもっと欲しい（25.4%）と週末や休日の昼間の活動機会拡大や増加（25.4%）となっていた。この中で、最も当てはまるものとしても「一緒に活動できる指導員仲間がいること」があげられており、上位項目である仲間の存在、活動場所、費用、計画・スキルなどが活動機会を増やすために必要とされていることが示された。



図表 25. 障がい者スポーツ指導員としての活動機会を増やすために必要なこと

## 7) 障害者スポーツの現状や課題（自由記述）

障がい者スポーツ指導員としての活動機会を増やすために必要なことについて自由記述で回答を求めたところ 38 件の回答が得られ、内容ごとに類似するものでまとめたところ、時間的制約、専門的指導力、情報・仲間不足、組織・計画性、環境整備、予算の拡充の 6 項目が生成された（図表 26）。これらは、6) 障がい者スポーツ指導員としての活動機会を増やすために必要なことで上位に挙げられた内容を具体例として示すものであり、いずれも貴重な意見であるため、詳細な分析は別途行うこととしたい。本調査報告では特記事項のみ 3 点指摘する。まず、人的資源の確保に関することである

が、やりたくてもできないという時間的制約が障壁として存在する。指導が専門ではないため、まず自分の生活・役割を優先させなければならないことへの申し訳なさを感じている指導員も少なくない。また、活動への参加・継続には指導員仲間の存在と各指導者に与えられる役割が重要であることも示唆された。新しく活動に参加しようとする場合に、既に築かれているコミュニティに入っていけるのかという不安がある。その場合に、既存の指導員からの声かけや役割の割り当てなど自己が必要とされていることを実感できることが必要であり、活動継続のモチベーションとなる。2点目は予算に関することであるが、岩手県が広域であることから、イベントや指導に従事する場合にかかる移動時間・方法を含めた費用負担への補助の拡充も必要である。身近な環境での活動を開拓することとあわせて、それらの活動を支える活動資金への助成制度があるとよい。そして3点目は、計画・情報の周知方法である。イベントに関しては施設を予約するために年間計画に組み込まれているはずである。また、恒例開催される大会等についても同様に前年度には計画済みであろう。さらに地域レベルで開催されるものを含めた情報拠点を構築すればいいのではないだろうか。幸い、岩手県では岩手県スポーツ協会の傘下に障がい者スポーツ協会がある。そのメリットを生かし、情報をわかりやすい形で、県民に周知できる方法を検討して欲しい。前述したように、岩手県障がい者スポーツ協会のホームページのコンテンツは充実しているのでそこに県民を誘導したい。誰もがアクセスできる環境で目に留まり、情報検索ができれば、スポーツ庁が掲げる「する・みる・ささえる」どのレベルにおいても障害者スポーツへのアクセスが容易になるであろう。少なくとも現状での「知っている人が検索したら見つかる」情報提供に留まっているのはもったいない。

項目	該当数 (件)	具体例 (一部抜粋)
時間的制約	12	やりたいが、平日は仕事、週末は私事（子供のクラブ活動、部活動など）でなかなか手伝えることが出来ない。県央でのイベントも多く、他の地域から向かうとなると大変。
専門的指導力	2	専門指導者が少ない為、関わった指導者の求められる力量の程度も大きく、結果を求めるアスリートへどのような指導をすればよいかわからない。
情報・仲間不足	7	情報が少ないので、障がい者スポーツとのかかわりが少ない。仲間もいないので、どうしたら良いのか？ 活動している施設に行かないと情報が分からない、イベントが重なり、手伝える事が難しい。
組織・計画性	6	年間計画・長期計画が欲しい。直近の案内では日程調整が難しい。 種目、地域で派閥があり、入りこみにくくて活動しづらい。どうにかならないか。
環境整備	9	地域における集会所、公民館等で参加できる環境があるといい。
予算の拡充	2	障害者スポーツをしている小さなクラブや団体は活動資金が少ない為、活動日数が少ない。

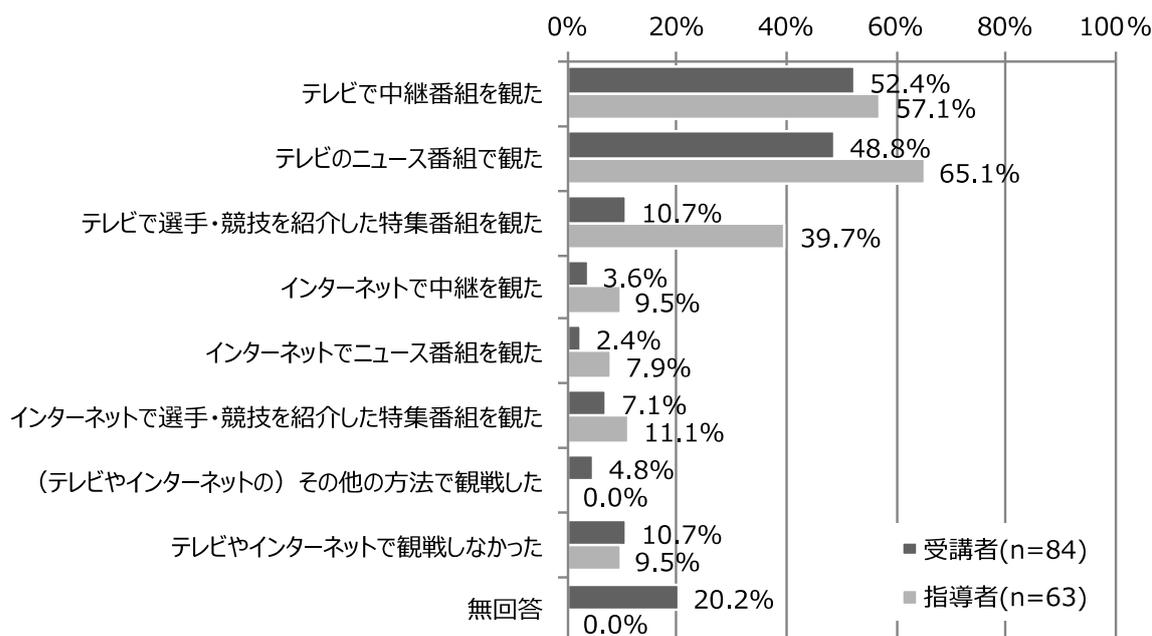
図表 26. 障害者スポーツの現状や課題

### 1-1-4 オリンピック・パラリンピックへの興味関心

オリンピック・パラリンピックへの興味関心について、スポーツ教室の受講者ならびに指導者の調査結果を比較していく。

#### 1) リオ 2016 パラリンピック観戦結果

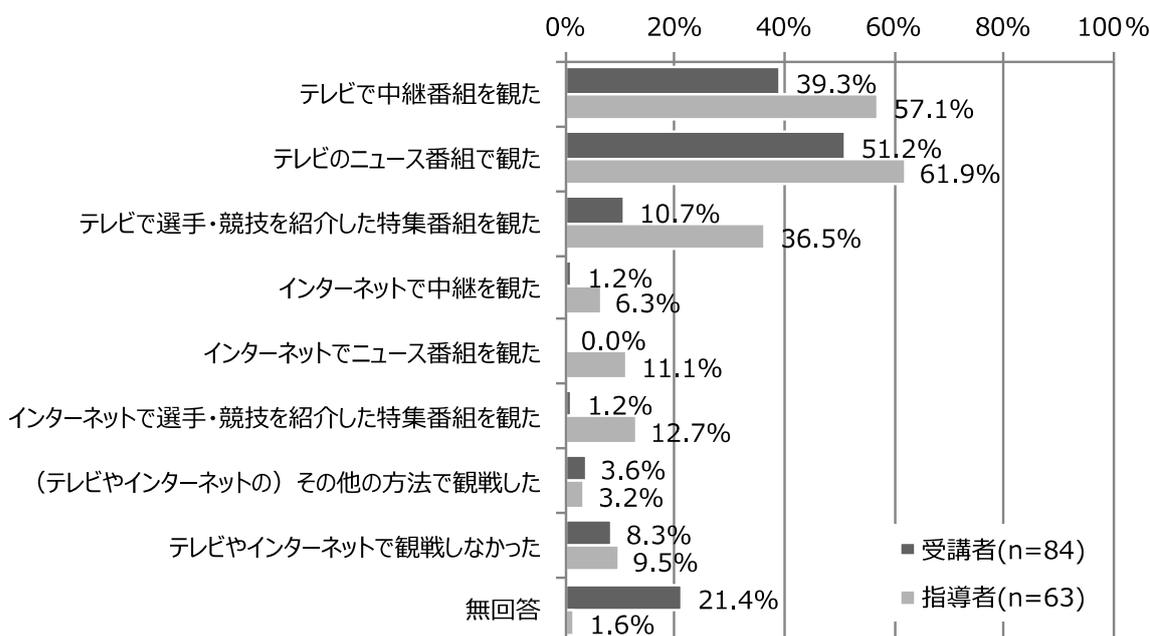
図表 27 は、リオ 2016 パラリンピック観戦結果についての複数回答結果を受講者、指導者別に示したものである。受講者、指導者ともに割合が高かったものは、テレビのニュース番組を観た、テレビで中継番組を観た、テレビで選手・競技を紹介した特集番組を観たとなっている。特に指導者は 65.1%がテレビのニュースを、57.1%が中継番組で観戦しており、受講者の 48.8%がニュースを、52.4%が中継番組を観たという数値とともに YMFS (2016) の調査結果よりもはるかに高い関心が示された。



図表 27. リオ 2016 パラリンピック観戦結果

## 2) 平昌 2018 パラリンピック観戦結果

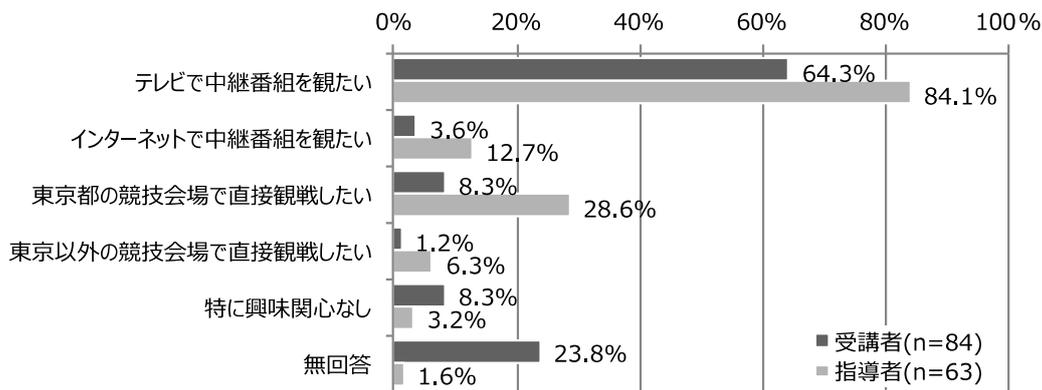
図表 28 は、平昌 2018 パラリンピック観戦結果についての複数回答結果を受講者、指導者別に示したものである。受講者、指導者ともに割合の高い順に、テレビのニュース番組を観た、テレビで中継番組を観た、テレビで選手・競技を紹介した特集番組を観たとなっている。特に指導者は 61.9%がテレビのニュースを、57.1%が中継番組で観戦しており、受講者の 51.2%がニュースを、39.3%が中継番組を観たという数値ともに YMFS (2018) の調査結果よりもはるかに高い関心が示された。



図表 28. 平昌 2018 パラリンピック観戦結果

## 3) 東京 2020 パラリンピックへの興味関心

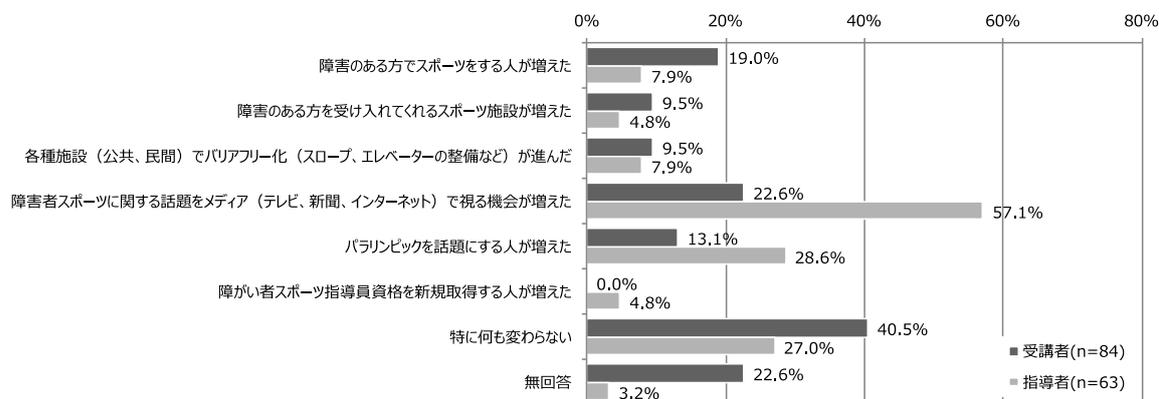
図表 29 は、東京 2020 パラリンピックへの興味関心についての複数回答結果を受講者、指導者別に示したものである。受講者、指導者ともにテレビで中継番組を観たいが最も多く、東京都の競技会場で直接観戦したいという回答割合は指導者で 28.6%、受講者は 8.3%に留まっている。また受講生では無回答の割合が 23.8%であることから、東京パラリンピックそのものが身近な存在ではないと捉えられていることが推察される。



図表 29. 東京 2020 パラリンピックへの興味関心

4) 東京 2020 パラリンピック開催決定後の環境変化

図表 30 は、東京 2020 パラリンピック開催決定後の環境変化についての複数回答結果を、受講者、指導者別に示したものである。受講者、指導者ともに障害者スポーツに関する話題をメディアで視る機会が増えたこと、パラリンピックを話題にする人が増えたことを指摘するが、さらに受講者は障害のある方でスポーツをする人が増えたことを変化として指摘している。一方で、特に何も変わらないとする回答が受講生の 40.5%、指導者では 27.0%と高いことが特筆される。また受講者の 22.6%が無回答であり、変化はごく一部であり、障害のある人たちが実感できる変化をもたらすまでには至っていない。東京パラリンピック 2020 は岩手県にとっては、物理的にも心理的にも距離があり、大会開催に関係なく、日常のスポーツ活動の充実がまずは優先なのであろう。スポーツ指導を始めたきっかけの項でも指摘したが、障害者のスポーツ活動が日常生活化するためには社会レベルでの施策が必要であると考えられる。



図表 30. 東京 2020 パラリンピック開催決定後の環境変化

(齊藤まゆみ)

## 1-2 フィールド調査結果

フィールド調査（視察）での気づき、参加者（障害当事者、保護者・介助者、関係者）、指導員、ボランティアスタッフなどとの会話から得られたものは以下のとおり。

### 1-2-1 スポーツ教室について

「県協会」が企画運営するスポーツ教室は、特定の種目や内容を反復継続するよりも、できるだけ様々なスポーツに挑戦できるようにプログラムされている。これは障害当事者に複数のスポーツを経験してもらいたいという意思に基づいたもの。障害当事者が特定種目において競技力を高め、全国大会や世界大会、パラリンピックを目指したいのであれば、それぞれの競技団体で活動するのが本来の姿であるが、現実的には大多数の障害当事者はパラリンピック出場を目指しているわけではなく、自分の可能性、生きがい、社会や人との交流を目的にスポーツに参画している実態がある。それらの現場実態を踏まえた中での、県協会の取り組みは適切であると思われた。

また、障害者スポーツの現場では障害当事者の保護者、介助者などが「●●というスポーツは、この人には困難では？」とチャレンジする前から断念し、結果的にスポーツ機会の提供に制約が出てしまうケースもあることから、障害当事者がこれまでやったことのないスポーツへの挑戦機会を積極的に提供する事業を通じて、障害当事者にとって一番近い位置に存在する支援者への理解拡大や気づきを期待しての活動となっている。

### 1-2-2 競技大会について

「第21回岩手県障がい者スポーツ大会」を視察した。本大会は約1600人の選手が参加する個人種目が中心の大会で、全スポ派遣選手選考会も兼ねている。岩手県では全スポ派遣選手選考において初出場となる人を原則優先としていることから、過去に全スポへ出場した経験のある選手にとって、そして全スポ派遣基準に満たない障害者スポーツ選手にとって、年に一度の県大会は非常に大きい意味を持っている。大会は競技力の高い選手とレクリエーション志向の選手が混在するため、競技レベルに差があるが、前述の通り、地域現場での障害者スポーツにおいて年に一度の大会開催は

様々なステークホルダーにとって極めて重要な意味をもつため、本大会運営関係者は大変な努力をされている。

大会の運営支援には岩手県行政関係者の他、JAなどの各種協力団体、応募してきた一般市民によるボランティアの多大な協力がある。特にボランティアは「ココパト（ココロをつなぐパートナーの略）」の愛称があり、ボランティア組織関係者として意識醸成を図るなどの取り組みを行っている。

大会参加者は県内各地から大型バスなどで会場入りしているが、盛岡市内の競技会場まで片道3時間かかるなど、面積が極めて広大な岩手県ならではの実情もあり、選手本人のみならず支援者にとっても身体負荷となっているが、それを踏まえてでも参加するだけの十分な価値がある大会であると感じた。開会式プログラムなどは2016岩手国体・全スポの開催経験が十分に活かされており、まさに大型スポーツ大会開催のレガシーを感じる。複数の参加選手に直接話を聞いたところ「この大会に出るのを楽しみに日頃から練習している」「仲間と一緒に大会に出られるのが嬉しい」「大会に出ることが良い思い出」などが中心であった。

### 1-2-3 普及啓発イベント（交流事業含む）について

岩手県では2016全スポ岩手大会の開催を契機として卓球バレーの普及に積極的に取り組んできた歴史がある。実際に県内各地の様々な障害者スポーツ現場で卓球バレーが盛んである。これは前述した岩手県内の各地域の実情や障害者スポーツ環境が置かれている課題の解決や対策に極めて効果的な要件を卓球バレーというスポーツが有していることが挙げられる。

#### 【報告者による考察】

東北地方は冬場の降雪量が多いこと（豪雪）は一般的であるため、通年での屋外スポーツ推進は難しく、特に障害者スポーツにおいては困難が伴うことが懸念される。

また、岩手県では急激な社会人口の高齢化が発生している。

岩手県庁発表資料（2019年10月1日時点）によると、県内人口平均では65歳以上の高齢者率は33.1%と3人に1人程度になり、これは過去2年間で地域実態調査を実施した他県の状況（静岡県：29.1%、2019年4月1日時点。福岡県：27.1%、2019年4月1日時点）と比較しても高い数値となっている。岩手県内の状

況を見ていくと県庁所在地の盛岡市（27.5%）など大都市圏は30%を下回るが、多くの地域では30%から40%台となっており、西和賀町では51.4%など高齢者が地域住民の過半数に達する自治体も出てきている。まさに岩手県の一部地域は高齢者社会を先取りしているとさえ言える。

今後、地域現場におけるスポーツ振興の視点において高齢者と障害者をそれぞれ独立して取り組むよりも、限られたスポーツ施設や機会を積極的に有効活用していくことが求められていく流れは加速すると推測される。このような地域状況では障害者スポーツの卓球バレーが有する“障害者も高齢者も一緒になって楽しめるユニバーサルな提供価値は非常に適している”ことを理解できた。

また、2011年3月に発生した東日本大震災を原因とする大きな津波は三陸海岸を中心とする沿岸地区の地域コミュニティに壊滅的被害をもたらし、令和元年（2019年）現在でも完全に回復しているとはまでは言えない。沿岸地区関係者が「まだまだ復興とは呼べず、ようやく復旧が進んできたのが現状」と話されたのが印象的であった。このように沿岸地区など被災地区では、コミュニティの再生が求められており、引きこもり対策、孤独死対策なども併せ、スポーツを通じた地域再生（誰もができる障害者スポーツ種目を活用したコミュニティ再生）策としての卓球バレーに着目したことは特筆すべきであろう。健常者と障害者、高齢者と高齢者以外など、様々な人と人の「絆」を強めるための障害者スポーツの有用性を岩手県の地域現場で度々目にした。

「宮古圏域障がい者スポーツ交流会」や「一関地方障がい者スポーツ交流会」など、障害者スポーツの交流事業が単独自治体のみで主催開催されるのではなく、「圏域」や「地方」という括りで複数の自治体が協力し合って障害者（と高齢者）にスポーツ機会を提供していることも岩手県の特徴であると思われる。宮古圏域障がい者スポーツ交流会では沿岸地区中央に位置する宮古市を中心に周辺の3自治体（岩泉町、山田町、田野畑村）が協力して開催していた。一関地方障がい者スポーツ交流会では、一関市に隣接する平泉町が協力し合って開催するなど、複数の自治体が規模や施設環境などを踏まえて協力してスポーツ機会の実現を達成するという企画力と実行力が伴っている。

さらに特筆すべき事項として隣接県（宮城県）との障害者スポーツ交流事業が挙げられる。もともとは2016年の岩手全スポ開催に向け、岩手県が東北地方の他県に対して卓球バレーの普及促進を展開したことで徐々に卓球バレーの普及が進んでいる。

宮城県気仙沼市も2011年東日本大震災時の津波で甚大な被害を受けているが、その気仙沼市には岩手県一関市同様に、単独自治体としての障がい者スポーツ協会が設立され活動している。それぞれ全国的にも珍しい政令指定都市でない単独自治体（市町村）での障がい者スポーツ協会を擁するが、この両者が協力し合って、障害者スポーツ交流事業を開催するようになり本年で2年目となっている。県境を跨いでも同じ志を持つもの同士が協力し合い、障害者スポーツの普及促進する取り組みが今後、国内に広がってほしいと強く感じた。

#### 1-2-4 フィールド調査まとめ

フィールド調査を通じて「生涯スポーツ」や「コミュニティー再生」を基軸としての様々な企画や取組みが積極的になされていることがわかった。岩手県における障害者スポーツ現場では、障害者に対するスポーツ振興を最優先とするのは当然ながら、もっと広く地域のコミュニティー全体にスポーツ振興していく必要性が確認できた。

(尾鍋文光)

### 1-3 まとめ

岩手県の障害者スポーツ環境や意識に関する調査を通して、以下のような現状と課題が示された。

#### 1 大会参加選手のスポーツ活動に対する意識

大会の参加選手は、男性が63.9%、女性が35.2%であり、この比率は、パラリンピアンを対象とした調査（YMFS,2013）、ジャパンパラ大会参加者を対象とした調査（YMFS,2015）、そして静岡（YMFS,2017）、福岡（YMFS,2018）と継続してきた地域における実態調査とも同様であることが示された。大会参加選手は10代から40代が多く平均年齢は33.6歳（SD17.5）であり、その多くは、施設利用者・就労予定者を含む無職（261名,49.1%）であり、次いで生徒・学生（160名,30.1%）であった。

スポーツを始めたきっかけは福祉関係者のすすめが最も多く、次いで学校の授業やクラブ活動、家族のすすめ、友達や知人のすすめとなっており、特に影響が強いものとして「福祉関係者」の存在が示された。障害者スポーツ選手としての目標は、県大会出場が最も多く、パラリンピックを頂点とする競技スポーツのピラミッド構造を志向するのではなく、身近で具体的な目標を持っており、スポーツを継続するモチベーションになっていた。一方でまた、競技引退後の障害者スポーツとの関わり方については、愛好者としてが最も多く、ボランティアや指導者として何らかの形でスポーツと関わりを持つことを希望するという回答が多いものの、続けたくないや関わりたくないが1割程度あることも他の地域調査と同様で特徴的であった。

学齢期の体育授業では、小・中学校の特別支援学級在籍時に参加度が低く、また特別支援学校においても一定の割合で体育に参加できていない状況が示された。学齢期の体育授業との関わり方はその後の運動・スポーツへの意識や態度を涵養するものであり、アダプテッド体育の視点を教育現場に浸透させることの必要性が再確認された。

#### 2 障害者のスポーツ実施状況

スポーツ教室の受講者を通して見えるスポーツ実施状況は、男性の割合が多く、40代～70代の中高年齢層で無職や施設・作業所等の利用者が、週あたり1～5回、1回あたり1時間程度、健康志向で、複数年にわたり活動しているというものであった。障害のある人がスポーツを始めるきっかけは、福祉関係者のすすめが最も多く、次いでリハビリで始めたから、医療関係者のすすめと友達や知人のすすめであった。その中で最

も影響が強かったのも福祉関係者のすすめであった。過去に実施した地域調査結果とは異なり、医療関係者やコメディカルの影響が強いことが特徴であり、現状の活動状況に満足しているものが多い。実施内容としては卓球バレーが群を抜いて高い実施率であることが示された。

### 3 障がい者スポーツ指導員の活動状況

障がい者スポーツ指導員は、男女比7:3で男性が多く、年齢層は20代から70代まで幅広いが、40代と50代の指導者が全体の半数以上を占めていた。20代~30代も27.0%であり、特に若い指導者が少ないというわけではなく、指導者育成や運動指導場面における年代間の好循環があると考えられる。職業としては、福祉施設職員が最も多く、次いで教員、病院職員、自営業、一般企業の会社員となっており、学生や主婦・主夫という層が薄いのが特徴である。資格としては初級もしくは中級の障がい者スポーツ指導員の資格を持ち、地域での障害者スポーツ教室、イベント協力などで、障害者スポーツの普及・振興と勤務先での指導を目的に活動している実態がうかがえた。スポーツ指導を始めたきっかけについては、健常者のスポーツ指導をしていたことが示されており、地域での障害者スポーツ指導においても、スポーツ指導の専門性が障害者スポーツ指導への誘いになっていることが示されたが、その他で具体的に示された「仕事をやる上で必要であった」ことに関わるようになった例も多い。あわせて、自分自身や家族、知人など身近な存在が障害者である(となった)ことなど「障害のある人が身近な存在」になることであった。現状と課題に関しては、目標を持って積極的に活動している指導員がいる一方で、活動したいが仕事や家庭の都合で時間的な制約があり、思うように参加できないことや、指導者仲間の存在が活動参加に大きく影響することも示された。

### 4 オリンピック・パラリンピックへの興味関心

オリンピック・パラリンピックへの興味関心については、スポーツ教室受講者・指導員ともにテレビを通しての視聴に対する意識が高いことが示されたが、東京2020大会についての直接観戦に関する意識は低く、東京都の競技会場で直接観戦したいという回答割合は指導者で28.6%、受講者は8.3%に留まっている。また受講生では無回答の割合が23.8%であることから、東京パラリンピックそのものに興味がなく身近な存在ではないと捉えられていることが推察される。また、東京2020パラリンピック開催決定後の環境変化については、受講者、指導者ともに障害者スポーツに関する話題をメディアで観る機会が増えたこと、パラリンピックを話題にする人が増えたこ

とを指摘している。スポーツをする障害者が増えたことを変化として捉える受講者がいる一方で、特に何も変わらないとする回答も受講生の40.5%、指導者では27.0%とそれよりも高いことが特徴である。岩手県にとっては、東京開催のパラリンピックとは物理的にも心理的にも距離があり、大会開催に関係なく、日常のスポーツ活動の充実がまずは優先されることのようなのである。

## 5 スポーツ環境の現状と課題

スポーツ環境の現状として、まず、スポーツ教室に参加する障害者からは現状に対する肯定的な意見が目立つことが特徴であった。現状の実施頻度や内容で満足している人が多かった。スポーツ大会の参加者からは、障害によって実施できるスポーツの選択肢が制限されることやより高いレベルを目指したいという意見も見られた。特に、スポーツ実参加への障壁は人的資源不足（指導者や支援者、一緒に活動する仲間）、費用負担、情報不足であり、健常者への理解・啓発、交流等の必要性を訴えるもの、在住する地域での日常的なスポーツ環境を整えることを強く望む意見が挙げられていた。そして、障がい者スポーツ指導員としての活動においても、目標を持って積極的に活動している指導員がいる一方で、活動したいが仕事や家庭の都合で時間的な制約等、自分の意思だけでは解決できない障壁とのジレンマがあること、活動継続・促進要因として指導者仲間の存在が大きいことも示された。

## 6 今後の展望

調査を実施した中で、岩手県では国体・全国障害者スポーツ大会の開催が、その後の障害者スポーツ推進に大きく影響していることが示された。人的資源、物的資源、社会制度を含めた環境が大会開催を契機として大きく変わり、特に県庁所在地盛岡市にある「ふれあいランド岩手：指定管理（社）岩手県社会福祉協議会」内に（一社）岩手県障がい者スポーツ協会が設置されたことが大きい。大会開催で地域の人々の意識変容が協会設立を後押ししたとも言えるが、障がい者スポーツ協会の設立を支えた人的資源と活動拠点となるスポーツ施設があることでその後の活動がスムーズに展開したようである。

国内第2位の面積を有する岩手県は、県央、県北、県南、沿岸の4地域で構成されるが、県庁所在地盛岡市の岩手県障がい者スポーツ協会が、様々な障害者スポーツ施策を担っている。また、ふれあいランド岩手は、2016年に開催された岩手国体・全国障害者スポーツ大会の会場でもあり、障害者専用施設ではないことから、一般利用者と共用

する中で相互理解につながっている。さらに、県南の一関市には（一社）一関市体育協会の傘下に一関市障がい者スポーツ協会がある。一関市体育協会が市内の体育施設を一括指定管理していることから、有機的な連携をしながら様々なイベント、スポーツ教室等を計画的に推進しており、会場の確保や幹旋、指導者の派遣、ボランティアの確保までを一元的に担っている。隣接する文化圏を同じとする都市とも相互利用ができることも特徴である。この一元化された制度は、これまでの調査では見られなかった事例であり、高齢化・過疎化が進む地方都市でのスポーツ振興モデルとして参考になるであろう。

（齊藤まゆみ）

## 第2章

### 障害者スポーツ選手のキャリア調査

本プロジェクトでは2013年にパラリンピアン、2015年にジャパンパラ（陸上競技と水泳）参加選手のアンケートによるキャリア調査を行った。パラリンピアン調査では中途障害者が7割を超えていたこと、これらの選手が受傷後スポーツを始めるまでに平均で10年以上かかっていたこと、練習は週4～5回実施している人が約4割と多く、公共の一般スポーツ施設で練習している人が約3割と多いこと、スポーツ実施にあたっては友人やトップ選手、監督やコーチの影響を受けている人が多いことなどが明らかになった。

ジャパンパラ参加選手に対するアンケート調査では先天的な障害者が52.3%と多く、スポーツを始めたきっかけとしては父母等を中心とした家族のすすめが3割以上と多かったこと、指導者の指導を受ける頻度は週に4～5回とする人が約2割と多かったこと、後天的な障害者で受傷後スポーツを始めるに際して受傷前のスポーツ経験がプラスに影響したという人が85.2%であったことなどが明らかになった。

これらの調査により、障害のあるスポーツ選手のキャリアの全体的な傾向を知ることができた。しかしながら一人ひとりの選手は年齢、性別はもとより、障害の種類や重さ、受傷時期、学校時代の体育の受講実態、時代的背景も様々でまさに多様な存在であり、どのような支援や施策があれば障害のある人のスポーツ実施に結びつくか具体的に示すのが難しいという課題があった。

そこで今年度は選手一人ひとりのこれまでの個人史、スポーツキャリアを面接調査により明らかにし、どのような環境、支援、制度、時代背景の中でスポーツを実施するようになったかを明らかにした。今年度は9名の選手にご協力をいただき、2019年3月から10月の期間に実施した。インタビュー時間はそれぞれ1時間30分程度であった。インタビュー実施場所は選手の都合を聞き面接可能な静かな部屋で行った。面接の最初に調査の目的、個人情報管理、調査参加が任意であり、途中でやめてもよく、その場合も何ら不利益が生じないことなどを説明し、同意の署名をしていただいたのちに実施した。

協力いただいた選手はいずれも男性で、先天的障害者2名、後天的障害者7名、全員肢体不自由であり、障害の要因は脊髄損傷、切断、骨形成不全などであった。年齢は21歳～62歳までで(平均44.4歳)あった。

調査はあらかじめ決めておいた質問項目に自由に答えてもらう半構造化インタビューによる。質問内容は基本的属性に関するもの、成績など競技に関する基本情報、障害発生からスポーツを開始するまでの経緯、スポーツ実施に影響した社会的状況、受傷前のスポーツ経験が受傷後のスポーツ経験に与えた影響、障害者スポーツ継続実施に関

する情報、スポーツの継続実施の社会的状況、今後の見通しなどである。

なお、本調査は日本福祉大学「人を対象とする研究」に関する倫理審査委員会の承認(申請番号 18-11)を受けて実施した。また調査は日本福祉大学スポーツ科学部の安藤佳代子助教と兒玉友助教の協力を得て実施した。

調査の結果から言えることは第一に、スポーツを始めるに際しては何らかの方法により障害者スポーツに関する情報を得ることができているということである。家族(親や配偶者)が障害者スポーツ関係者あるいはスポーツ関係者から障害者スポーツに関する情報を得ており、選手に情報を提供することが可能であったり、病院やリハビリテーション施設に障害者スポーツの情報を持っている医師、理学療法士や指導スタッフがいてそこから情報が得られたり、義肢装具士が障害者スポーツの情報を得ており、そこから情報を得られたりなどである。つまり、障害のある人に実際に対峙する身近で信頼できる人が障害者スポーツに関する情報を提供できる環境にあったということである。

2つめにその情報提供者は単に障害者スポーツの存在を知らせてだけでなく、そのスポーツを実施できる場所へのつなぎまで行っているという点である。情報提供者がリハビリテーション施設のスタッフなど、スポーツが実施できる場所のスタッフであれば、即時的にスポーツ実施につなげることができる。そうでない場合、情報提供者等がその競技をしている場所の情報もあわせ持っており、当該障害者を実施場所につなぐことでスポーツ実施が可能となると考えられる。もちろん当事者が自分で実施場所を探し、自らそこにつながるという場合も考えられる。

3つめにロールモデルの存在である。今回の調査からは2つのタイプのロールモデルが考えられる。1つはトップ選手やメディアを通じて配信されている情報(例えば漫画『リアル』など)である。これらにより、障害者スポーツや具体的な競技の存在を知り、スポーツをするイメージを描く契機となるものである。もう1つは、スポーツを実施している場所に同じような障害を持っている人がおり、その人が競技をやっているところを見て、自分がスポーツをやっている姿をイメージする場合である。スポーツ実施のイメージだけではなく、障害や健康に関わること、スポーツ実施のメリットやデメリットなどそれに関わる様々な情報も同時にもたらされていると考えられる。これらによりスポーツ実施の不安が解消され実施に向かうものと推察される。

4つめはスポーツ実施場所までの移動を可能とする要件が満たされていることである。スポーツ実施場所に支援を受けることなく移動できる場合は問題ないが、何らかの理由により移動を自律的に行うことが困難な場合はその支援が確保されていることが必要である。

5つめに、中途障害者の場合、受傷前のスポーツ経験の有無がスポーツ実施にプラスに影響している場合が多いということである。受傷前と同じ競技を行うかどうかは別として受傷前にスポーツ経験がある場合、スポーツ実施に対するハードルが低かったり、受傷前の仲間や指導者から障害者スポーツに関する情報を得たり、スポーツ実施に向けての精神的支援を受けること等が考えられる。

最後に、2020 東京パラリンピックの開催が多くの選手に影響を与えていることが明らかである。大会開催決定後に設けられた国や自治体の強化費を受けたり、目標となる大会として位置付けていたり、発掘事業に参加したり、それによって競技を変えたり、アスナビによるアスリート就職をしたり、競技協会強化担当として活動したりなどである。

(藤田紀昭)

仮名 Aさん

インタビュー実施日時 場所 2019年3月15日 10:00-11:30 ヤマハ発動機スポーツ振興財団

インタビュー対応者 日本福祉大学スポーツ科学部 藤田紀昭 安藤佳代子 兒玉友

個人基本情報	居住 東海地区 生年月日 1967年 性別 男 障害発生年齢 24歳 障害内容 頸髄損傷 リハビリ期間 5年
略歴	事故前 サラリーマン 1996年に結婚 2000年に子どもが生まれた。 現在、東京の会社に東海地区で在宅勤務。妻は看護師。
競技基本情報	競技 ツインバスケット、水泳(2010、2013 全スポ出場、2018 アジアパラ出場、背泳ぎ、自由形) 陸上(2015年～) クラス分け S2(水泳)、T51(陸上) 競技成績 アジアパラ、ジャパンパラ、日本選手権出場、日本記録保持者 競技開始年齢 ツインバスケット 27歳 水泳 37歳 県強化指定選手 陸上(47歳～)
障害発生から障害者スポーツ開始まで	経緯①：カートレース中の事故により頸髄損傷となった。事故後の手術時、リハビリ期間中にトラブルがあり療養・リハビリ期間が延びた。東海地区の病院→関東の病院→東海地区障害者リハビリセンター→国立リハビリテーションセンター リハビリ期間中の心の支えは東海地区病院看護師(のちに結婚)。病院を変わっても連絡取り合う。筋力はほとんどない状態。最初にやったのはツインバスケット。1999年まで実施したが、妻の妊娠がわかったこと(妻が帯同できなくなった)、褥瘡ができたこと、バスケのセンスがないと思ったことなどでいったん休止。 経緯②：スポーツを休止したことで病気をすることが多くなった。居住地近くに新しいスポーツ施設ができることになり、その立ち上げ時にバリアフリー等に関して意見を言った。それもあってスポーツ施設はバリアフリー。そのスポーツ施設にはプールがあった。2004年、パラリンピアン講演、実演を見て自分もやれそうと思った。水泳は子どもの頃から好きだった。そのパラリンピアン指導者がたまたま居住地近くにいることがわかり教えを乞うたが、障害が重いため最初断られた。が、結局指導してもらえることに。パラリンピアン影響もあり、自分としては最初から競技をしようと思って始めた。しかし気持ちとは裏腹に最初は浮くのがやっとで苦労した。それでも翌年大会に出場。

キャリア調査

	<p>陸上競技は 2015 年から。東海地区障害者リハビリセンターで知り合った指導者にアドバイスをもらい始めた。陸上を始めてから水泳の記録も伸びるようになった。</p> <p>始めた場所：①東海地区障害者センター。それまで障害者スポーツは考えたことがなかったが、東海地区障害者センターで多様なスポーツを経験。その中にツインバスケットのプログラムがあった。怪我をしてから 4 年目で始めた。そこにはツインバスケットのクラブもあり、入部した。仲間と一緒にやるのが楽しくツインバスケットを選んだ。いわゆるリハビリテーションセンターでスポーツを始めた。この施設がなければ普通の病院ではスポーツを体験できないと思う。その後国リハでもツインバスケットをした (K 先生)。</p> <p>始めた場所：②居住地近くのスポーツセンタープール。そこで障害者水泳指導者に教えてもらった。</p> <p>重要な他者：①ツインバスケットを教えてくれたのは東海地区障害者リハビリセンターのスポーツ指導員。</p> <p>重要な他者：②妻、パラリンピアン水泳選手、障害者水泳指導者、東海地区リハビリテーションセンターで知り合った指導員。</p>
<p>障害者スポーツ開始に影響を与えた社会的状況・環境・条件</p>	<p>① 1953 年から 2013 年 3 月までであった東海地区リハビリテーションセンター→スポーツとの出会い。この機関で十分なりハビリ期間をとれたことが大きい。また妻の介助がなくてはスポーツができなかったことから妻の存在が非常に大きい。</p> <p>② パラリンピック水泳金メダリストの講演がきっかけとなっており、パラリンピックの存在、パラリンピアンの活動が影響している。陸上開始にあたっては東海地区リハビリテーションセンターで知り合った指導者の存在も大きい。</p>
<p>受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・家庭環境もあり、子どもの頃から水泳は好きだった。</li> <li>・中学校、高校でソフトテニス。</li> <li>・水泳が好きだったことが影響している。好きでなければきっかけとなった講演も聞きに行っていない。</li> <li>・受傷前にカートをやっていたタイムを縮めることに対する姿勢等が影響。</li> </ul>
<p>障害者スポー</p>	<p>継続状況：②現在、週に 2 回練習。妻が介護可能な公休日などに実施。</p>

<p>ツ継続に関する状況</p>	<p>金銭的には助成があり国内の試合に出る程度であれば何とか継続できる。外出支援のヘルパーを申請したことがあるが当該市では認められなかった。介助してくれる人がいなければスポーツを続けることは難しい。プールの入退水はプールのスタッフにも手伝ってもらう。プールによっては手伝ってもらえないところもある。仕事はフレキシブルにやれるので競技をするのに影響はない。陸上競技 車いすマラソンをやっている。主な実施場所：①リハビリテーションセンター ②居住地近くのプール 重要な他者：①スポーツ実施時に帯同してくれる妻 ②練習時介護してくれる妻、子どもも手伝ってくれる。障害者水泳チーム(入退水時のサポート)</p>
<p>スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件</p>	<p>② 居住地近くにバリアフリー化されているプールがあること。そのため家族の介助も受けやすい。バリアフリー化には自らスポーツ施設の設置の委員となり意見を言えたことも影響している。 ② 県指定強化選手、県から助成をもらっている。県障水協、県水連の強化指定選手。パラリンピック日本開催が決定して以降各都道府県で強化選手への助成が始まっている。パラリンピック国内開催が選手のスポーツ継続に好影響を与えている。自ら制度の不備を指摘する等主体的に関わっていることも大きい。</p>
<p>今後のスポーツ実施</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生涯現役として水泳を続けていきたい(本人)。</li> <li>・スポーツをしていてくれた方が健康にもいいので続けてほしい(妻)。</li> </ul>
<p>まとめ</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・リハビリテーションセンターでスポーツを始めた。この施設がなければ普通の病院ではスポーツを体験できなかった。</li> <li>・受傷後ほぼ寝たきりだったのでリハビリ期間が長くとれないとスポーツはできなかった。</li> <li>・家族(妻)のサポートが難しくなったことでいったんスポーツを休止。</li> <li>・パラリンピアン講演・実演をきっかけに水泳を始める。そこにはバリアフリーのプール、障害者水泳指導者の存在があった。</li> <li>・2013年にパラリンピック開催決定後の助成制度がスポーツ継続に好影響。</li> <li>・スポーツ開始、継続とも家族とりわけ妻が介助、支援等できることが大きい。</li> </ul>

(藤田紀昭)

仮名 Bさん

インタビュー実施日時 場所 2019年3月15日 13:30-15:00 県福社会館  
 インタビュー対応者 日本福祉大学スポーツ科学部 藤田紀昭 安藤佳代子 兒玉友

個人基本情報	居住 東海地区 生年月日 1978年 性別 男 障害発生年齢 15歳(中学3年) 障害内容 単下肢切断 リハビリ期間
略歴	高校入学後病気のためすぐに中退。16歳から仕事を始め、その後現在まで同じ会社に勤め、現在取締役。
競技基本情報	競技 陸上競技100m クラス分け T64 競技成績 ベスト記録 11秒94 2012年ロンドン大会出場(100m、リレー) 競技開始年齢 25歳
障害発生から障害者スポーツ開始まで	経緯：15歳で骨肉腫を発症、手術により左下肢を切断。その後3年間(18歳まで)は入退院を繰り返す。歩いたり、走ったりするためのリハビリすら受けなかった。18歳で郷里に帰ってきてからは義足がコンプレックスとなり、あまり積極的な活動はしなかった。切断してから10年後、25歳の時、義足の作り替えの時に担当となった同じ年齢の(2003年世界陸上と一緒にテレビで観た)義肢装具士(実習生:義足陸上競技クラブの手伝いもしていた)に誘われ、陸上競技を始めた。義足の陸上競技クラブに入り10年間、週末を中心にそこに通う。クラブに入り、メンバーと接する中で義足へのコンプレックスがなくなっていった。25歳まで始められなかったのは障害者スポーツに関する「情報」を何も知らなかったから。 始めた場所：東京都総合障害者スポーツセンター、地元のスポーツ施設 重要な他者：義肢装具士、陸上競技クラブメンバー、2003年世界陸上、陸上競技を始めるまでは親、兄弟や友人が支えてくれた。仕事をやっていたことで病気のことを忘れる時間が持てた。
障害者スポーツ開始に影響を与えた社会的状況・環境・条件	受傷後陸上競技を始めるに際しては、陸上競技に詳しく、義足の陸上競技クラブを手伝っている義肢装具士がいたこと、義足の陸上競技クラブがあったこと、義足の発展があり、陸上競技ができるような義足が存在していたことなどが大きい。 義足の陸上競技クラブが障害者スポーツセンターで練習していたことか

	<p>ら、障害者スポーツセンターの存在も影響している。</p> <p>2018,2019 年は県から強化指定ということで助成金が出ている。</p>
<p>受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響</p>	<p>幼稚園からずっとスポーツをやっていた。小中と陸上競技(短距離、跳躍)、アイスホッケー、スキー、ソフトテニス、中2でインラインスケートこれらは父親の影響で始めた。父親がそうした環境を与えてくれた。こうした経験が受傷後、陸上競技を始めるときにはプラスに作用している。</p>
<p>障害者スポーツ継続に関する状況</p>	<p>継続状況：スポーツを始めてから心身ともに強くなった。メンタルも強くなったし、筋力もアップし、きれいな歩行ができ、転ばないようにもなった。スポーツをやるとプラスのことが多い。平日は5時、6時まで仕事をやり、その後練習やマッサージや鍼灸を受け毎日帰りは10時半とか11時。</p> <p>プロになるということも考えたが、年齢のことやセカンドキャリアのことを考え、今の生活となっている。現在、障害者の大会にも出るが地方の一般の大会や記録会などにも出ている。6～7年前にはそうした大会に障害が理由で出られないこともあった。以前は国内大会で勝てれば十分と思っていたが、北京パラリンピックのステージに立っている仲間を見て自分もあそこまで行きたいと思うようになった。現在、Sというオリンピックの方などもいるクラブに所属している。そこで様々なことを教えてもらっている。</p> <p>現在年間40～50校で授業をやっている。お話をして義足を触ってもらったりというような。</p> <p>主な実施場所：居住地近くの車で5分から10分のところにある陸上競技場。</p> <p>重要な他者：始めるとき影響を受けた同じ義肢装具士。同じ陸上競技を第一線でやっている仲間同士、刺激し合ったり、高め合ったり、情報交換してきた。また、妻がマッサージをしてくれたりして支援してくれた。</p>
<p>スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件</p>	<p>同じように義足で第一線で活躍している陸上競技選手がいることが刺激となっている。</p> <p>4年ごとの周期でパラがくるのが大きい。Sというクラブに所属していることもそうだし、現在動作分析などJIS関係者がしてくれている。</p>

今後のスポーツ実施	<p>第一線で活動するというのは2020年までだが、健常者の記録にどれだけ障害者が近づけるかということが自分の目標となっているところもあるので、特に引退とかは考えていない。</p> <p>まだまだ障害者スポーツは認知度も低いので自分が関わっていることで若い人が続いてくれればよいと考えている。そういう環境を作っていくのが自分の仕事かもしれない。若い人たちが不自由なくスポーツできるのがいいと感じている。</p>
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・受傷後、陸上競技を始めるにあたって影響を与えたものとして、義肢装具士、義足の陸上競技クラブ、障害者スポーツセンターの存在がある、陸上競技で使えるスポーツ用義足の発展などがある。とりわけ、義肢装具士と義足の陸上競技クラブの存在は大きい。</li> <li>・受傷後スポーツを始めるまでに10年の期間を擁しているが、障害者スポーツに関する情報がなかったことが影響している。</li> <li>・パラリンピック出場経験があるトップレベルの選手であり、スポーツ継続の要因として同じように義足を利用して陸上競技を行っている選手の存在が影響していた。</li> <li>・2020大会開催決定後は金銭的な補助やオリンピックのいる陸上競技クラブに所属する等の影響が見られる。</li> <li>・受傷前のスポーツ経験は受傷後スポーツを始める際にはプラスに作用していた。</li> </ul>

(藤田紀昭)

仮名 Cさん

インタビュー実施日時 場所 2019年8月19日13:00-14:30 県福社会館

インタビュー対応者 日本福祉大学スポーツ科学部 藤田紀昭 安藤佳代子

個人基本情報	居住 東海地区 生年月日 1956年 性別 男 障害発生年齢 25歳 障害内容 脊髄損傷 リハビリ期間 2年程度
略歴	事故前 サラリーマン (労災) 現在、車いすメーカーを定年退職し、そのままアルバイトで居住地エリアを主に担当している。
競技基本情報	競技 車いすバスケットボール、パラアイスホッケー約20年 クラス分け 車いすバスケットボール2.5 競技成績 2002年ソルトレークシティー大会5位、2006年トリノ大会5位、2010年バンクーバー大会銀メダル、2018年平昌大会出場 競技開始年齢 25歳
障害発生から障害者スポーツ開始まで	経緯：①通勤時の事故により脊髄損傷となった。受傷後、箱根国立療養所に1年半～2年入所。そこで、車いすバスケットボールを始める。その他、卓球、水泳なども経験した。その後、長野県の労災作業所に移動し、長野の車いすバスケットボールチームに入り本格的に競技を行った。5年ぐらい朝昼晩と練習を行っていたため、やりすぎで股関節を痛めてしまい、車いすバスケットボールは辞めることに。そして、結婚を機に現居住地へ。 経緯：②1998年長野大会の2年くらい前に、選手発掘事業に参加し、パラアイスホッケーを始める。サッカーのゴールキーパーの経験から、パラアイスホッケーのゴールキーパーを勧められたことがきっかけ。初めは東京チームで練習を行っていたが、長野チームのキーパーが空いたので長野チームに所属を変更して練習を行った。長野大会は出場が叶わなかったが、それ以降の4大会は出場した。練習は静岡から長野へ片道3時間かけて週末に通っていた。トリノ前には、シカゴに月1回指導を受けに行っていたことも。 始めた場所：①箱根国立療養所 (指導員のK先生) →長野チーム練習場 始めた場所：②発掘事業→東京チーム→長野チームの練習場 重要な他者：①箱根国立療養所のK先生 重要な他者：②選手同士、当時のコーチ・監督

<p>障害者スポーツ開始に影響を与えた社会的状況・環境・条件</p>	<p>① 箱根国立療養所にて K 先生から、車いすバスケットボールをやるようにレールをひかれた。周りが同じ障害の人ばかりだったので、その時にいろいろと覚えることができた。</p> <p>② 1998 年長野大会が決まり、もう一度挑戦したいと思った。</p>
<p>受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・サッカー少年で、就職してからも楽しみでサッカーを行っていた。</li> <li>・サッカー以外にも、社会人になって野球、ソフトボール、サーフィンなどを経験。</li> <li>・サッカーのゴールキーパーをしていた経験が、パラアイスホッケーのゴールキーパーにつながった。</li> <li>・チームスポーツを選択したのも、受傷前のスポーツが影響。</li> </ul>
<p>障害者スポーツ継続に関する状況</p>	<p>継続状況：</p> <p>① 運動が好きであること。</p> <p>② 毎週末（土曜日）に長野へ練習に通っていた。パラアイスホッケーは練習時間が早朝か夜中（朝 5 時や 6 時など）で若い方が継続するのが難しい時間帯にしか練習ができない。</p> <p>主な実施場所：②やまびこスケートの森アイスアリーナ（パラアイスホッケー強化拠点施設）</p> <p>重要な他者：妻、選手仲間、コーチ・監督</p>
<p>スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・途中からはパラアイスホッケーをなくしたくないという使命感のような感じで継続していた。協会の存続、種目がなくなってしまうのではないかという危機感から勝たないといけないという使命感が生まれていた。</li> <li>・金銭的な部分は協会からはサポートを受けてなく、自腹で遠征に行っていた。会社の理解があり、仕事もきっちり行っていたので、休みをとることも問題なく参加できていた。</li> <li>・労災であったことも継続する上での金銭的な部分は大きかった。</li> <li>・JPC のアスリート支援を 1 回受けたことがある。</li> <li>・国際大会に出場したら支援してもらえるが、普段の練習の交通費などを面倒みてもらいたいと思っていた。</li> <li>・若手が育ちにくいのは、意外とお金がかかる種目（ポジション）だから。</li> </ul>

<p>今後のスポーツ実施</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・現在、強化指定選手になっているが申し訳ない。</li> <li>・4年ごとに辞めると言っているが、継いでくれる若手がなかなかいないので、結局残ってしまう。</li> <li>・コーチは目指していない。</li> <li>・次世代の育成・普及に関われたらと考えている。名古屋チームが設立されるから何か応援してあげたいと思っている。</li> </ul>
<p>まとめ</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・箱根国立療養所で指導員に声を掛けられて車いすバスケットボールを始めた。そのきっかけをくれた指導者や周りの仲間がその後のスポーツ実施に大きく影響した。</li> <li>・車いすバスケットボールを練習しすぎて怪我をしてしまい、スポーツを中止することに。しかし、スポーツが好きであること、子ども時代からスポーツを行っていたことがプラスに作用し、長野大会の発掘をきっかけに他競技であるパラアイスホッケーを始める。</li> <li>・仕事と練習の両立を行いながら、練習や海外遠征などの費用は実費で対応していた。労災であったことも費用を準備する面で継続できる要因になった。</li> <li>・若手が育ちにくい競技環境もあり、平昌大会まで4大会を現役で出場。今後は若手育成や普及に関わりたい。</li> </ul>

(安藤佳代子)

仮名 Dさん

インタビュー実施日時 場所 2019年8月19日 15:00-16:30 県福社会館

インタビュー対応者 日本福祉大学スポーツ科学部 藤田紀昭

個人基本情報	<p>居住 東海地区 生年月日 1996年 性別 男</p> <p>障害発生年齢 0歳 障害内容 骨形成不全症 リハビリ期間 ー</p>
略歴	<p>同じ障害のある兄弟がいた。小学校は普通学校の特別支援学級、中学校は普通学校の普通学級に介助員を一名つける形で在席した。介助員は教室移動やトイレ介助、他の生徒との衝突の防止など日常の身の回りのことを支援してくれた。高校は普通学校、普通学級に介助員等つけずに在籍した。高校卒業後、大学理学部に進学し、今年3月に卒業し、公務員となったが、障害者アスリートの就職支援をしているつなひろワールドを利用して転職し、アスリート雇用してもらっている。</p>
競技基本情報	<p>競技 卓球 クラス分け 車いすの部 クラス5</p> <p>競技成績 インタビュー時世界ランキング 30位台 18 アジアパラ上位入賞</p> <p>競技開始年齢 11歳(小学校6年)</p>
障害発生から障害者スポーツ開始まで	<p>経緯：体育の授業は同じ障害のある弟と2人に介助員1人が付き、その3人でボール投げやゴルフのようなことをやったりしていた。運動会などは走る距離を短くするなど配慮をして参加した。高校の体育はずっと見学だった。部活では卓球をやっていた。卓球は小学校6年から始めた。母親の友人に障害のあるお子さんがいる人がいて、そのお子さんが障害者卓球クラブに通っていた。それで母に勧められて弟と一緒にその卓球クラブで始めた。体を動かすこと自体は好きなので卓球をやることも抵抗はなかった。このクラブには現在も通っている。小学校6年の時に小学生大会の障害者の部に初めて出た。その後、中学、高校、大学と卓球部に入った。</p> <p>始めた場所：市総合福社会館の多目的ホールのような場所。</p> <p>重要な他者：母親、障害児を持つ母親の友人、障害者卓球クラブの会長(指導者)</p>
障害者スポーツ開始に影響を与えた社会	<ul style="list-style-type: none"> <li>・通学していた小学校に肢体不自由の特別支援クラスができたのは自分が入学する時が初めて。親の働きかけなどがあったおかげ。</li> <li>・居住している市に障害者卓球クラブがあった。</li> </ul>

<p>的状況・環境・条件</p>	<p>・高校は8階建てだったがエレベーターや障害者用トイレもあった。</p>
<p>受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響</p>	<p>—</p>
<p>障害者スポーツ継続に関する状況</p>	<p>継続状況：中学校の時は障害のない生徒とともに卓球部に入った。接触のあるスポーツだと骨折のリスクがある。卓球なら安全だった。部活はしっかりした部で練習もしっかりできたことが今につながっている。顧問教諭は厳しい人だった。車いすだからと言って特別扱いするわけではなかった。この人は市の中体連の会長でもあり、中学校の大会に出ることができた。常に弟と一緒に切磋琢磨してきた。</p> <p>高校でも卓球部に入った。この頃から障害のない人の卓球との違いを理解し始めた。部活はそれほど厳しくなかったおかげで自由にできたので、弟と練習することが多くなった。中学校の時に障害者の卓球大会で車いす卓球の師匠と呼べる人と出会った。その後、月に一度近県にある障害者スポーツセンターに練習に行くようになった。</p> <p>大学時代は大学の体育館が他の部も利用しており骨折のリスクがあることから利用しにくい状況であったため、近隣の市のバリアフリー化された体育館で週5～6日弟と練習をした。大学1年の時に日本代表に選ばれ、初めて海外遠征に行った。2015年5月に弟が死去した。</p> <p>大学卒業後公務員となったが、仕事の関係で練習が週1、2回くらいしかできなくなった。また海外遠征等にも出にくい状況があった。そうしたことからアスナビとつなひろワールドを利用し2019年3月から現在の会社に転職、アスリート雇用してもらった。</p> <p>現在は障害者卓球協会のNT(上から2つ目のランク)として支援してもらっている。関東に行くとアスリート雇用してもらっている選手も多く、平日も時間調整して一緒に練習しやすい。</p> <p>障害の影響で骨折したり、ひびが入ったりということは多かった。</p> <p>主な実施場所：市総合福祉会館、中学校体育館、高校体育館、バリアフリー化された市立体育館(大学時代)、居住市の体育館、関東の障害者スポ</p>

	<p>ーツセンターなど</p> <p>重要な他者：弟、中学校の卓球部顧問、車いす卓球の師匠(A 県の在住)、練習相手としての父</p>
<p>スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・普通学校(中学校)に行くことができ、中学校の部活動に卓球部があったこと。</li> <li>・バリアフリー化された校舎の高校があったこと、そこに卓球部があったこと。</li> <li>・大学生時代はバリアフリー化された体育館が近隣市にあったこと。</li> <li>・障害者アスリートもアスナビの対象となっていたこと。</li> <li>・アスリート雇用してくれる企業があったこと。</li> <li>・企業スポンサー(父親の会社)や県からの助成金がもらえること。</li> <li>・卓球用品メーカーから用具を提供してもらっている(中学2年から)。</li> </ul>
<p>今後のスポーツ実施</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・2020が終わった後も現役を続けたい。</li> <li>・現在雇用してくれている会社も継続雇用してくれる予定。</li> <li>・これまでの経験を下の世代に伝えたい。そのためにももうしばらくは現役を続ける。</li> <li>・現役引退後は講演などを通じて経験を伝えたい。</li> </ul>
<p>まとめ</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・卓球を始めるに際しては母親の友人に子どもが障害者卓球クラブに行っている人がいたこと、居住している市に障害者卓球クラブがあったことが影響。</li> <li>・中、高校と普通学校に行き卓球部があったことで卓球を継続できた。</li> <li>・中学校卓球部顧問、障害者卓球クラブ会長、車いす卓球の師匠、弟、父親などが卓球継続の重要な他者といえる。</li> <li>・現在卓球を中心とした生活ができるのはアスナビやつなひろワールドが障害者アスリートも対象としたこと、アスリート雇用してくれる企業があったこと、企業スポンサーがついていることなどの影響がある。</li> <li>・弟の死去が卓球にかける思いを強くしている。</li> </ul>

(藤田紀昭)

仮名 Eさん

インタビュー実施日時 場所 2019年8月19日 17:00-18:30 県福社会館

インタビュー対応者 日本福祉大学スポーツ科学部 藤田紀昭 安藤佳代子

個人基本情報	居住 東海地区 生年月日 1976年 性別 男 障害発生年齢 0歳 障害内容 対麻痺 リハビリ期間
略歴	公務員（市職員） 2008年（30歳から現職勤務） 小学校から高校まで市内の普通学校に通う。小学生の時は杖なしで歩いていたが、成長に合わせてアキレス腱延長の手術や杖を使用する。病気が進行し車いすを使用するようになったのは5年くらい前から。
競技基本情報	競技 水泳（県スポ1回出場経験あり）、陸上競技、マラソン（2017年車いす駅伝出場、2018年-ジャパンパラ、関東パラ出場、2018年全スポ出場、大分国際車いすマラソン） クラス分け T34 競技成績 2019年関東パラ入賞、2019年ジャパンパラ入賞 競技開始年齢 40歳（2017年～）
障害発生から障害者スポーツ開始まで	経緯：①子どもの頃行ったスポーツは、父親とのキャッチボールとスイミングスクール（3歳～6歳くらいまで）。野球は好きだったので良く観ていた。スイミングスクールはリハビリを兼ねていた感じで通っていた。小学校低学年の頃は一緒に体育の授業に参加していたが、それ以降小中高の体育の授業や運動会も見学だった。高校ではあえて運動会を休んだりすることも。中学では、体育がやろうと思ってもできない内容なのに成績が悪くつけられていて、他の科目が良くても平均がそれで下がってしまい納得いかなかった。 高校卒業後、5年間企業勤務。1996年くらい（20歳）から体力づくりのため水泳を始めた。その後、転職をして資格を取得するために専門学校（夜間）に行きながら5年くらい企業で働く。専門学校に通っている当時は、毎日の生活が忙しくスポーツどころではなかった。 経緯：②状態が悪くなってきて車いすを使用するようになって、車いす競技を始めた。2017年に国内クラス分けを受けた。東京パラが決まり、リオ大会を観たりして競技をいくつか考えたものの1つに陸上があった。発掘事業（草薙）に参加して、2ヶ月後の2017年車いす駅伝で急遽欠場があったところに入って借り物の車いすで出場したことがきっかけ

	<p>け。静岡で自転車開催が決まり、大会を観に行った際に、初めはパラサイクリングをやりたいと思った。しかし、なかなか競技者がいなく、デモ機も1台しかないということで選択できなかった。陸上は県内に選手がいたこと、練習も一緒にできることなどから選択した。レーサーは、既に引退されている方のものを借りて始めた。自分のレーサーは作ってまだ2年くらい。</p> <p>始めた場所：①地域のスイミングスクール          始めた場所：②発掘事業→車いす駅伝大会          重要な他者：①父親の知り合い（父親を通じて）          重要な他者：②家族や県内の陸上選手（佐藤友祈選手など県内出身選手の活躍）</p>
<p>障害者スポーツ開始に影響を与えた社会的状況・環境・条件</p>	<p>① 20歳くらいから水泳を始めたきっかけはリハビリ目的。父親の知り合いから水泳を誘われた。今も時々泳いでいる。</p> <p>② 公務員となり生活が安定、子どももある程度大きくなってきて、ゆとりができた。丁度、東京パラが決まり、リオ大会をテレビで見てスイッチが入った。競技人口が少ないとか、話を聞くと、「これはやらない」と思った。発掘事業が大きなきっかけとなった。練習や駅伝の見学の際、大先輩（60代以上）の選手がとても元気でスポーツを行っている様子を見て、生涯スポーツとして良いと思ったことも含まれる。これまであまり障害者の方と付き合いがなかった。健常者の中でのいう意識が強かったが、状態が悪くなってきたこともあり考え方も変化していった。</p>
<p>受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響</p>	<p>スポーツはできなかったが、嫌いではなかった。やらなくても観に行くことが好きだった。学校時代はできなかったけれどもスポーツ自体には関心があった。普通学校に通っていたので、スポーツを実施する上では、特別支援学校の方が始めやすかもしれない（ノウハウがある）。実際に全スポに出場した際に特支教員が指導者やコーチとして多く参加していた。自分も特支に通っていたら、もっと早く競技を始めていたかもしれない。その問題としては、普通学校の先生が情報を知らないことが大きいのではないかと。</p>
<p>障害者スポーツ継続に関する</p>	<p>継続状況：          ・生活が安定したことがスポーツを行う、継続できることの要因の1つ。</p>

<p>る状況</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・毎週末に練習か大会（仲間がいることが大きい）20km～30 kmロード。</li> <li>・自宅では、ダンベルで筋トレ、ローラーで練習をすることも。</li> <li>・週2回ジムで筋トレ</li> </ul> <p>主な実施場所：②海沿いの堤防を練習に使用、トラック練習ができないのが問題。県パラ陸上協会が借りて押さえている日（月1）に練習。</p> <p>重要な他者：妻、子ども、選手仲間、監督、トレーナー</p>
<p>スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・現在、自己ベストを更新しているので競技が楽しい。</li> <li>・競技者の体が変わっていくことが楽しい。</li> <li>・練習仲間がいることで継続できている。発掘でカヌーやパラサイクリングをやりたいと思ったが、1人で練習することは難しい。</li> <li>・監督やトレーナーのサポート。</li> <li>・競技を始めて同僚や友人からの激励。</li> <li>・競技会などで休む場合の職場の理解。</li> <li>・競技を始めたことにより周囲の障害者スポーツへの関心度の変化。</li> </ul>
<p>今後のスポーツ実施</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・競技を継続して4年後出場を目指す。</li> <li>・仕事を辞めてまで競技に専念することはできないので、仕事と両立しながらどこまでできるか考えたい。</li> <li>・パラサイクリングのハンドサイクルを中古で提供を受けたので、パラトライアスロンも視野にいれている。来年くらいにはレースに出場したいが、海で泳ぐ水泳がプールとは違うので心配がある。もう1人仲間も購入した。</li> </ul>
<p>まとめ</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・スポーツを本格的に行うことはあまりなかったが、スポーツを観ることは幼児期から好きで、スポーツが嫌いではなかった。</li> <li>・成長に伴い、杖や車いすを使用するようになった。</li> <li>・車いすを使用するようになったことで、車いす競技ができると考え始めた。</li> <li>・仕事が安定し、子どもが大きくなり生活面でのゆとりができたこと、東京パラが決まりリオパラの映像を観たことがきっかけとなり競技を始める。同じ時期に発掘事業があり、それに参加したことも大きかった。</li> <li>・競技を選考するのに、地域での練習環境・仲間がいることが重要とな</li> </ul>

	<p>った。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>• 競技用具は引退選手のものを借りて始めた。初期費用が大きいことは始める際に大きな影響を与える。</li><li>• 競技経験が浅いが、自己ベストを更新することや体の変化が楽しさとなっている。4年後を目指したい。</li></ul>
--	-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

(安藤佳代子)

仮名 Fさん

インタビュー実施日時 場所 2019年8月14日 14:00-15:30 県総合福祉センター

インタビュー対応者 日本福祉大学スポーツ科学部 安藤佳代子 兒玉友

個人基本情報	居住 東海地区 生年月日 1976年 性別 男 障害発生年齢 28歳(2004年) 障害内容 脊髄損傷 リハビリ期間 6ヶ月
略歴	事故前 サラリーマン 工作中的事故により脊髄損傷 2001年に結婚 現在、東海地区で勤務(アスリート雇用ではないが練習が中心)。 妻はアスリートフードマイスター。
競技基本情報	競技 車いすバスケットボール(約1年)、車いすテニス(約5年)、車いすフェンシング(2018アジアパラ上位入賞) クラス分け B 競技成績 アジアパラで上位入賞 競技開始年齢 車いすバスケットボール 28歳～、車いすテニス 30歳～、車いすフェンシング 39歳～
障害発生から障害者スポーツ開始まで	経緯：仕事で荷物を運んでいる際の事故により脊髄損傷となった。約半年で退院し、妻の勧めで車いすバスケットボールを始めた。車いすバスケットボールは1～2年続けたが、接触スポーツは自分には合わない判断し、他の車いすのスポーツを探し、車いすテニスを始めた。車いすテニスは楽しく、大阪まで足を運んで練習に励んだ。しかし、細かいクラス分けがない車いすテニスは、脊髄損傷では勝てないこと、2020東京大会が決定したことがきっかけとなり、他の車いすスポーツを探すこととした。妻の友人が国際車いすフェンシング協会の事務局長だったことから車いすフェンシングを勧められ始めた。 始めた場所：車いすバスケットボールは県総合福祉センター。車いすテニスは四日市市障害者体育センターで、その後、鈴鹿スポーツガーデンや県総合福祉センターでも練習した。車いすフェンシングは、地元高校や京都などで練習を行っている。 重要な他者：妻、妻の友人(国際車いすフェンシング協会関係者)。
障害者スポーツ開始に影響を与えた社会	入院中は障害者スポーツのことは考えたことがなかったが、妻の勧めで始めた。事故前は、バレーボールをしていたため、妻はシッティングバレーボールを勧めようとしていたが、滋賀の日本代表選手から脊髄損傷

<p>的状況・環境・条件</p>	<p>の選手では日本代表を目指すことは難しいと言われ、他の種目を探した。一番に浮かんだのが、車いすバスケットボールを題材にした、漫画『リアル』であった。そのため、車いすバスケットボールを始めることとなった。その後、車いすテニスを始めたが、東京大会決定および妻の友人の勧めがきっかけとなり、車いすフェンシングを始めた。</p>
<p>受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもの頃からスポーツが好き。</li> <li>・サッカー、陸上、バレーボールをしていた。</li> <li>・事故前はバレーボールの社会人チームに所属。</li> <li>・妻はスポーツマン好き。妻が行動力のある人だったことも影響している。</li> </ul>
<p>障害者スポーツ継続に関する状況</p>	<p>継続状況：現在、練習が中心の生活ができている。会社はアスリート雇用で入社したわけではないが、月に2、3回行く程度で良い。専門学校の外部講師をしている。</p> <p>主な実施場所：近くの高校や近隣の大学で練習、京都や東京で合宿等を行っている。</p> <p>重要な他者：妻、練習相手（一般の選手に車いすに乗ってもらう）</p>
<p>スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件</p>	<p>練習を行える場（近くの高校や近隣の大学）があったこと。</p> <p>フェンシングは大きな機材を床に置くが、これまで体育館の利用で断られたことはない。</p> <p>パラリンピック日本開催が決定したことで、会社側のサポートが得られた。</p>
<p>今後のスポーツ実施</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・東京 2020 パラリンピックで金メダルを獲得したいと考えている。</li> <li>・いつ引退するかは考えていないが、生涯、何らかのスポーツは続けていく。</li> </ul>
<p>まとめ</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・妻の勧めでスポーツを始めた。通える場所に障害者スポーツを体験できる施設があった。</li> <li>・様々な障害者スポーツを体験したが、車いすフェンシングを始めた。きっかけは、2020 東京大会が決定したこと、妻の友人が国際車いすフェンシング協会関係者で車いすフェンシングを勧められたことであった。</li> <li>・妻のサポートをはじめ、練習を行える場があったこと、会社側のサポートがスポーツ継続に影響している。</li> </ul>

	<ul style="list-style-type: none"><li>・スポーツ開始、継続とも妻の勧めやサポート、環境が整っていることが大きい。</li></ul>
--	---------------------------------------------------------------------------------------

(兒玉友)

仮名 Gさん

インタビュー実施日時 場所 2019年9月9日 15:30-17:00 県総合福祉センター  
 インタビュー対応者 日本福祉大学スポーツ科学部 児玉友 安藤佳代子

個人基本情報	居住 東海地区 生年月日 1969年 性別 男 障害発生年齢 28歳 障害内容 左膝関節機能全廃 リハビリ期間 約3ヶ月
略歴	小学生の頃は野球、中学・高校ではバレーボールをしていた。 23歳で結婚し、就職後も社会人チームでバレーボールを続けていたが、28歳の時に膝の腫瘍が原因で人工関節置換。 知り合いに健常者アーチェリーに誘われ、アーチェリーを始めた。その後、障害者アーチェリーを知り、厚生労働大臣杯、アジアパラに出場。 現在は、障害者アーチェリー連盟の理事・強化担当。
競技基本情報	競技 アーチェリー クラス分け STクラス 競技成績 2010 アジアパラ（下位入賞）、2004 ジャパンパラ（上位入賞）2006 厚生労働大臣杯（優勝） 競技開始年齢 29歳
障害発生から障害者スポーツ開始まで	経緯：原因はわからないが、バレーボールの社会人クラブチームでアタックの練習中に膝を捻ってから調子が悪くなった。1年後に病院でレントゲンを撮った際に腫瘍が見つかり、人工関節置換術を行った。退院後、会社の知り合いに「アーチェリーを始めませんか」と誘いを受け、障害のない人たちのグループでアーチェリーを始めた。その後、パラリンピックにアーチェリーがあることを知った。個人競技は始めてだったが、打つ時は真剣、終わったら笑顔で会話するオン・オフの切り替えが面白いなと思い、やってみようと思った。地元アーチェリーチーム（健常者）が練習する工務店の倉庫で練習を行い、近隣の高校のアーチェリー部OBから指導を受けた。 始めた場所：地元の工務店の倉庫 重要な他者：会社の知り合い
障害者スポーツ開始に影響を与えた社会的状況・環境・	退院してすぐに、会社の知り合いに「アーチェリーを始めませんか」と誘いを受けたことがきっかけとなり、障害のない人たちのグループでアーチェリーを始めた。三重県でトップレベルの選手と一緒に練習をしていたことが、競技レベルの向上や意識に影響した。アーチェリーを始め

条件	<p>てから、パラリンピックにアーチェリーがあることを知った。2004年、34歳の時に民間から役所へ転職し、練習を十分に行える環境になった。身近に練習できる環境や指導者がいたことも影響している。</p>
受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響	<p>小学生の頃は野球、中学・高校、社会人ではバレーボールを行っており、スポーツが好きだったこと、退院してすぐのタイミングでアーチェリーに誘われ、体験する行動力、実際に体験して面白いと感じたことが影響している。</p>
障害者スポーツ継続に関する状況	<p>継続状況：2012年ロンドン大会以降、クラス分けが厳しくなり、自分の障害がクラス分けから外された。そのため、パラリンピックを目指すことができなくなった。現在は、一般のクラブと障害者のクラブに所属している。障害者アーチェリー連盟では、理事・強化を担当している。世界大会等に監督として帯同したり、年に数回行われる合宿に行く。国内で行われるイベントや体験会の準備や運営を行うこともある。家族は選手だった頃からずっと支えてくれている。</p> <p>主な実施場所：総合福祉センター、高校</p> <p>重要な他者：家族、クラブの仲間</p>
スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件	<p>アーチェリーを始めるにあたっては、周りの支援や環境、道具が重要である。</p> <p>身近にアーチェリーができる環境があったこと、家族が応援してくれたことは、選手を続けていく上でプラスに作用していた。</p> <p>継続するためには、サポートする周りのチームや人とのつながりが一番大切だと思う。アーチェリーの特性として、障害のある人もない人も一緒にできる。</p> <p>2012年ロンドン大会以降、クラス分けの見直しやクラスの統合が進み、パラリンピックを目指すことができなくなった。現在は、理事・強化を担当している。選手の頃から理事をしていたこと、2016年リオ大会の最終枠取りの大会の際に監督として帯同したことが影響している。</p>
今後のスポーツ実施	<ul style="list-style-type: none"> <li>・パラリンピックで監督として帯同。</li> <li>・一般のクラブと障害者のクラブに所属し、アーチェリーを継続。</li> </ul>
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・28歳の時に腫瘍が見つかり、人工関節置換術を行った。</li> <li>・退院後、会社の知り合いに「アーチェリーを始めませんか」と誘いを</li> </ul>

	<p>受け、障害のない人たちのグループでアーチェリーを始めた。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>• 地元アーチェリーチーム（健常者）が練習する工務店の倉庫で練習を行い、近隣の高校のアーチェリー部 OB から指導を受けた。</li><li>• 県でトップレベルの選手と一緒に練習をしていたことが、競技レベルの向上や意識に影響した。</li><li>• 身近にアーチェリーができる環境があったこと、家族が応援してくれたことは、選手を続けていく上でプラスに作用していた。</li><li>• 2012 年ロンドン大会以降、クラス分けの見直しやクラスの統合が進み、パラリンピックを目指すことができなくなった。</li><li>• 現在は、理事・強化を担当している。選手の頃から理事をしていたこと、2016 年リオ大会の最終枠取りの大会の際に監督として帯同したことが影響している。</li></ul>
--	---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

(兒玉友)

仮名 Hさん

インタビュー実施日時 場所 2019年10月21日 14:00-15:30 県総合福祉センター

インタビュー対応者 日本福祉大学スポーツ科学部 安藤佳代子

個人基本情報	居住 東海地区 生年月日 1969年 性別 男 障害発生年齢 36歳 障害内容 左上腕切断 リハビリ期間 3年程度
略歴	事故前 サラリーマン (労災) 受傷後、いくつかの仕事を経て、2016年からアスリート雇用。
競技基本情報	競技 ゴルフ、陸上 (砲丸投げ)、射撃、アーチェリー クラス分け 射撃 SH2→義手をつけてSH1のクラスで出場している 競技成績 2019年 Al Ain 2019 World Shooting Para Sport World Cup 50mP60MW-SH1 出場、2018年 第30回全日本障害者ライフル射撃競技選手権大会 上位入賞 競技開始年齢 36歳～ゴルフ、47歳～陸上、射撃、49歳～アーチェリー
障害発生から障害者スポーツ開始まで	経緯：①勤務時の事故により左上腕部から片腕を失う。受傷後3ヶ月後に、他の病院に転院。転院先の病院は看護師をしていた妹が探してきた。その病院にはスポーツ医学センターがあり、先生より体を動かした方が良いとスポーツを勧められた。T大学名誉教授のT先生が以前私がゴルフを行っていたことを知ったことから、片腕のゴルフを勧められ、T先生からF先生にできるようにトレーニングするよう指示、転院して1ヶ月後くらいからゴルフをやることになった。退院して、プロゴルファーの辻村暢大プロに指導を受けることになる。5月に受傷して、翌年の2月の終わりに障害者ゴルフ大会にエントリー。その際に別の片腕ゴルファーのレベルの高さを目の当たりにする。受傷して5年後くらいのこと、障害者ゴルフ協会のアメリカ遠征でゴルフ用義手を使っているアメリカ人と出会い、自分のゴルフ専用義手を製作してもらうことに。日本での義肢の調整は松本義肢へ依頼し、その後義手を使用していくつもの大会へ出場する。2009年くらいまでゴルフ競技へ集中していた（その後仕事復帰し仕事に専念する日々）。 経緯②他の病院のスポーツ医学センターK先生からの勧めにより、2016年長居陸上競技場での人材発掘事業に参加。ゴルフはパラリンピックの

	<p>種目になっていないので別の種目をしてはどうかと勧められたことがきっかけ。発掘事業で投擲を体験、時間が余ったのでその時に射撃を体験した。砲丸種目は地元中学生と一緒に練習し大会へ出場。発掘事業から1ヶ月後、日本障害者スポーツ射撃連盟に電話して競技をしたい意思を伝える。すぐに銃を所持するための試験を受けて1回で合格し許可証を取得。初期費用は80万円くらいかかった。海外の射撃選手は、アーチェリーも実施していることが多いため、3ヶ月前くらいからアーチェリーも始める。アーチェリーは1回大会へ出場した。</p> <p>始めた場所：①ゴルフ練習場・ゴルフ場            始めた場所：②発掘事業→県内の射撃場</p> <p>重要な他者：①他の病院のスポーツ医学センターF先生、T先生、妹（看護師）            重要な他者：②他の病院のスポーツ医学センターK先生、妻</p>
<p>障害者スポーツ開始に影響を与えた社会的状況・環境・条件</p>	<p>① 転院先がスポーツを専門にトレーニング・指導できる環境であった。            →良い指導者にすぐに巡り合うことができた。            →I氏の行動力が様々な種目を実施する大きな要因。</p> <p>② 東京パラリンピック開催により実施された、発掘事業に参加することが機会となった。</p>
<p>受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響</p>	<p>・小学校では特定の種目はせずに、様々なスポーツを経験。小学校3年生～中学校1年生まで空手。中学・高校とバレーボール部。バレーボールは両親の影響で選択した。両親の影響で、幼少期からスポーツは大好きであったこと、受傷前にゴルフを行っていたことが受傷後すぐにゴルフを勧められ（実施）することに。</p> <p>・母親の弟がクレイ射撃を行っていたことで、射撃は遠い競技ではなかった。</p>
<p>障害者スポーツ継続に関する状況</p>	<p>継続状況</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・労災で継続的な資金が得られている。</li> <li>・射撃は練習するためかなりの費用がかかる。</li> <li>・家族の支えがあったこと。</li> <li>・2017年から強化指定選手に選ばれ国際大会に出場。</li> </ul> <p>主な実施場所：②県内の射撃場</p> <p>重要な他者：妻、病院のスポーツ医学センターK先生</p>

スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件	<ul style="list-style-type: none"> <li>・労災であったことも継続する上での金銭的な部分は大きかった。</li> <li>・人との出会いとつながり（良い指導者に巡り合うことができたこと）。</li> </ul>
今後のスポーツ実施	<ul style="list-style-type: none"> <li>・パラリンピック出場が目標。</li> <li>・2018年フランスワールドカップで監督として参加した。選手でなくても監督として行くこともできればと思っている。</li> <li>・2020年東京大会以降がどうなるか不安（パラリンピックバブル）。</li> <li>・日本障害者スポーツ射撃連盟の存続ができるように努力したい</li> </ul>
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・家族がスポーツ一家であったことから、幼児期からスポーツに親しんでいた環境にあった。→体力レベルが高く、スポーツセンスの能力が備わる。</li> <li>・転院した病院にスポーツ医学センターや専門家が揃っていたことから、受傷後すぐにスポーツを行うことができたこと、専門家からの指導を現在も継続的に受けていることから、初めの転院先の選択がその後のスポーツ活動へ非常に大きな影響を及ぼしている。</li> <li>・I氏個人のバイタリティー、行動力がある。人とのつながりを重要にしている点や、専門家からの勧めなどを受け止め、即行動・実行する能力が備わっている。</li> <li>・2020年東京大会以降は、選手か監督としてパラリンピックに出場を目指す、それ以降の競技団体の運営がどうなるか心配している。</li> </ul>

(安藤佳代子)

仮名 Iさん

インタビュー実施日時 場所 2019年9月9日9:30-11:00 県町役場総合支所

インタビュー対応者 日本福祉大学スポーツ科学部 児玉友

個人基本情報	<p>居住 東海地区 生年月日 1971年 性別 男</p> <p>障害発生年齢 21歳 障害内容 脊髄損傷 リハビリ期間 2年</p>
略歴	<p>高校卒業後に県外に就職し、受傷後、現在の職場に就職</p> <p>車に同乗中の事故により脊髄損傷</p> <p>小学校低学年の頃から水泳を始め、高校総体や国体に出場</p> <p>障害発生後はリハビリとして水泳を始めた</p>
競技基本情報	<p>競技 水泳 クラス分け 運動機能障害S7</p> <p>競技成績 2000年パラリンピックシドニー大会（下位入賞）、2004年パラリンピックアテネ大会（下位入賞）</p> <p>競技開始年齢 23歳頃（小学校低学年の頃から水泳を始めている）</p>
障害発生から障害者スポーツ開始まで	<p>経緯：21歳の時、車に同乗中の事故により脊髄損傷。リハビリ期間は約2年。退院後、体力をつけるためのリハビリを目的とした水泳を始めた。その頃、アトランタパラリンピックが行われており、パラ水泳の選手の活躍をたまたまテレビで観たこと、友人ら（水泳仲間）からの勧めで、シドニーパラリンピックを目指すことにした。近県で理学療法士をしている後輩からの障害者スポーツに関する情報をきっかけに、地域ブロック障害者水泳大会に出場し、その後ジャパンパラ等へ出場した。</p> <p>始めた場所：地元のスイミングクラブ（父親が所属している水泳協会が運営）</p> <p>重要な他者：水泳仲間（友人）</p>
障害者スポーツ開始に影響を与えた社会的状況・環境・条件	<p>アトランタパラリンピックでパラ水泳の選手の活躍を友人ら（水泳仲間）と観てパラ水泳を勧められたこと、理学療法士をしている友人から障害者スポーツに関する情報提供を受けたことがパラ水泳を始めるきっかけとなっている。</p> <p>地域ブロック障害者水泳大会では、障害のある選手らの前向きに明るく水泳に取り組む姿をみて刺激を受けた。障害を受け入れるきっかけとなった。</p> <p>地元で父親が所属している水泳協会が運営するスイミングクラブがあり、父親も指導に関わっていたため、身近に練習できる環境があった。</p>

<p>受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響</p>	<p>小学校低学年の頃から父親の影響で水泳を始め、高校総体や国体に出場している。リハビリとしての運動を考えた際に水泳を選択したことは、これまでの水泳経験が影響している。また、近くに父親が所属している水泳協会が運営するスイミングクラブがあったこともプラスに作用している。</p>
<p>障害者スポーツ継続に関する状況</p>	<p>継続状況：現在は週4～5日、父親が所属している水泳協会が運営するスイミングクラブで、子どもたちに水泳指導をしつつ自分の練習を行っている。2年ほど前にオープンした健康センターのプールを利用している。このプールはバリアフリー仕様のプールだが、以前利用していたプールは階段が多く、杖で移動していた。また、去年から県からの助成金を受けている。</p> <p>障害のある中学生が水泳部に入ってきて、地域ブロック障害者水泳大会に誘った。その中学生は現在は大学へ進学しているが、大会に出る際は応援に行く。全国障害者スポーツ大会への出場経験がある。</p> <p>子どもや甥っ子が水泳をしており、甥っ子がインカレに出場するため応援に行った。頑張っている姿をみると負けられないと思う。</p> <p>主な実施場所：父親が所属している水泳協会が運営するスイミングクラブ</p> <p>重要な他者：受傷前から一緒に水泳をしてきた友人、仲間、先輩後輩。家族の支えも大きい。</p>
<p>スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件</p>	<p>水泳仲間をはじめ、子どもや甥っ子が水泳で頑張っている姿をみると負けられないと思う。</p> <p>2年程前に新しくプールができ、地元で日本選手権が開催され、2020年東京大会開催決定の影響も大きい。</p>
<p>今後のスポーツ実施</p>	<p>2020年東京大会に向けて取り組むこと。一般の大会も含め、引き続きコーチとして選手として水泳を継続する予定である。</p> <p>続けやすく、来て楽しいと思う環境が大切だと思う。そして、周りから「速くなった」「泳げるようになった」など嬉しいと感じる、前向きに考えられるような環境も重要だと感じている。</p>
<p>まとめ</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・小学校低学年の頃から水泳を始め、高校総体や国体に出場していた。</li> <li>・受傷後、水泳を始めるにあたっては、1996年アトランタ大会でパラ</li> </ul>

	<p>水泳の選手の活躍を友人ら（水泳仲間）と見てパラ水泳を勧められたことがきっかけとなった。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>• 理学療法士をしている友人からの障害者スポーツ等に関する情報提供をきっかけに、パラ水泳大会に出場。</li><li>• 近くに父親が所属している水泳協会が運営するスイミングクラブがあり、継続しやすい環境であった。</li><li>• 水泳仲間をはじめ、子どもや甥っ子が水泳で頑張っている姿をみると負けられないと思う。</li><li>• 2年程前に新しくプールができ、地元で日本選手権が開催され、2020年東京大会開催決定の影響も大きい。</li><li>• 受傷前のスポーツ経験は受傷後スポーツを始める際にはプラスに作用していた。</li></ul>
--	--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

(兒玉友)

## 第3章

### 大学の先進的取り組み調査

### 【インタビュー概要】

日時：2019(令和元)年8月1日

場所：石川県障害者スポーツ協会内会議室

回答者：金沢星稜大学人間科学部スポーツ学科 井上明浩 教授

聞き手：河西正博（同志社大学スポーツ健康科学部）

尾鍋文光（公益財団法人ヤマハ発動機スポーツ振興財団）

### 【取り組みの概要】

人間科学部スポーツ学科は2007年度に設立され、中学校教諭・高等学校教諭（保健体育）免許が取得可能であり、2014年度からは特別支援学校教諭免許の取得も可能になっている。また、初級・中級障がい者スポーツ指導員資格が取得可能となっている。

障害者スポーツに関わる授業として、アダプテッド・スポーツ論、アダプテッド・スポーツ演習（実技科目）、障がい児・者の運動指導法演習が開講されている。また、以上の科目に加えて、特徴的な取り組みとして、フィールド基礎演習、スポーツフィールド演習といった科目が開講されており、スペシャルオリンピックス日本・石川（以下、SON・石川）の地区競技会企画運営や地域のマラソン大会の障害者ランナーのサポート等を実習授業の一環として行っている。

#### 1. 障害者スポーツに関わる授業ならびに課外活動について

障害者スポーツに関わる科目については下記の4科目が開講されている(表1参照)。

**表1 スポーツ学科における障害者スポーツ関連授業一覧（筆者作成）**

1年次～：ボランティア概論

2年次～：アダプテッド・スポーツ論

3年次～：アダプテッド・スポーツ演習、障がい児・者の運動指導法演習（高齢者を含む）

上記の講義、実技、指導法の授業に加えて、特色ある授業として「フィールド基礎演習」「スポーツフィールド演習」が開講されている。

フィールド基礎演習は2年次必修の通年科目となっており、学科教員の専門領域に関わる学外プロジェクトが30件程度設定されており、学生はそのうち5つを選択してプロジェクトの企画立案、運営補助等を行っている。井上教授のプロジェクトでは

SON・石川の石川地区競技会の企画運営を行っている（表2参照）。参加学生は月に1回のスポーツプログラム委員会に出席し、9月の競技会本番の運営をする形となっている。また、履修学生には競技会運営のみならず、SON・石川の練習会への参加を促しており、ボウリングや陸上、水泳、卓球等のプログラムに有志が参加をしている。

**表2 フィールド基礎演習（井上教授クラス）概要（井上教授提供資料を一部改変・抜粋）**

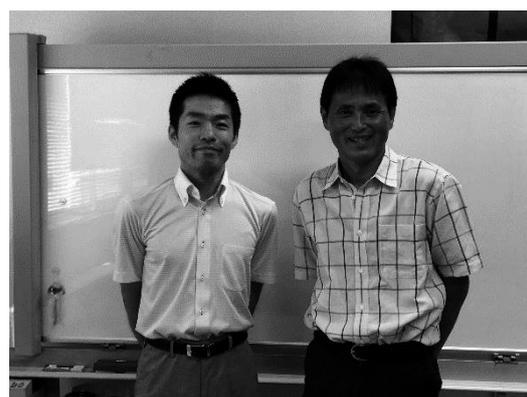
プロジェクトのねらい	障害者と健常者が障害の有無や年齢、性別を問わず一緒にスポーツ活動や競技会に参加することを通して、学生自身の多様性の現認やその享受を図り、もってコミュニケーション能力を高めることで、体験的にインクルーシブスポーツを学ぶ。
募集定員	20名
活動・学習内容	<p>【事前学習】SO 概要・知的障害の特性と支援法（講義） SON・石川スポーツプログラム参加</p> <p>【プロジェクト当日】競技会受付・誘導・案内・競技運営の業務遂行</p> <p>【事後学習会】大会終了後、反省会を実施</p>

スポーツフィールド演習は3年次必修の通年科目となっており、4年次の卒業研究に向けて各教員の専門領域において演習ならびに各種フィールドワークを実施している。井上教授のクラスでは、SON・石川のプログラムサポート、石川県内のマラソン大会の障害者ランナーのサポート等を行っている（表3参照）。

表 3 スポーツフィールド演習（井上教授クラス）概要（井上教授提供資料を一部改変・抜粋）

<p>演習のねらい</p>	<p>地域スポーツ現場のアダプテッドスポーツ実践から表象される様々な諸現象を哲学、社会学あるいは教育学的に分析、考察、検討する。スポーツフィールドの活動を通して、それらに関する文献・資料や調査から、自身の観察や分析、考察、検討する力を高める。</p>
<p>主な活動 *フィールドワークのみ抜粋</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・加賀温泉郷マラソンアダプテッドサポート企画運営</li> <li>・SON・石川ヤングアスリートプログラムサポート</li> <li>・能登半島すずウルトラマラソンエイドステーション企画運営</li> <li>・金沢マラソン障害者ランナーサポート</li> </ul>

以上の正課授業での取り組みに加えて、石川県障害者スポーツ指導者協議会や、石川県障害者スポーツ協会加盟競技団体等からの依頼により、ボッチャ、カローリング、シッティングバレーボール、障害者サッカー等の練習会・イベント等に学生が積極的にボランティア参加をしている。また、SON・石川との連携の中で、3年ほど前から、ヤングアスリートプログラム（2～7歳頃の子どもたちを対象とした、スポーツを基本とした「運動遊び」のプログラム）のウォーミングアップを担当するなど、前述の授業内の活動に留まらず、各種フィールドでアダプテッド・スポーツに関心をもつ学生たちが積極的に活動をしている。



## 【インタビュー概要】

日時：2019(令和元)年7月15日

場所：大阪体育大学P棟アダプテッド・スポーツ実験室

回答者：大阪体育大学教育学部教育学科 植木章三 教授（学部長）

大阪体育大学教育学部教育学科 曾根裕二 准教授

聞き手：河西正博（同志社大学スポーツ健康科学部）

尾鍋文光（公益財団法人ヤマハ発動機スポーツ振興財団）

## 【取り組みの概要】

教育学部は2015年度に開設され、小学校教育コース（定員70名）と保健体育教育コース（定員55名）の2コースに分かれている。小学校教育コースでは、小学校教諭に加えて、中学校教諭・高等学校教諭（保健体育）もしくは特別支援学校教諭免許の取得が可能になっており、保健体育教育コースでは、中学校教諭・高等学校教諭（保健体育）に加えて、特別支援学校教諭免許の取得が可能になっている。また、2019年度入学生より初級・中級障がい者スポーツ指導員資格が取得可能となっている。

障害者スポーツに関わる授業として、講義・実技・指導法に加え「アダプテッド・スポーツ実習」が展開されており、担当教員3名の専門領域（子ども・障害児・高齢者）において、子どもの運動教室や特別支援学校の生徒を対象とした運動プログラム、高齢者の介護予防プログラムのサポートを行っている。

正課外の活動として、アダプテッド・スポーツ同好会が組織されており、車椅子ハンドボールやボッチャ等に取り組むと同時に、学外での障害者スポーツ関連のイベント等のサポート活動も行っている。

### 1. 障害者スポーツに関わる授業について

障害者スポーツに関わる科目については下記の4科目が開講されている(表4参照)。2019年度入学生から新カリキュラムが導入され、アダプテッド・スポーツ指導法が追加となり、障がい者スポーツ指導員初級・中級の資格取得認定校となっている。

**表 4 教育学部における障害者スポーツ関連授業一覧（筆者作成）**

<p>1年次～：アダプテッド・スポーツ論（2018年度以前は2年次以降に履修可）</p> <p>3年次～：アダプテッド・スポーツ実技、アダプテッド・スポーツ実習 アダプテッド・スポーツ指導法（2021年度から開講）</p>
---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

上記の講義、実技、指導法の授業に加えて、特色ある授業として「アダプテッド・スポーツ実習」が展開されている。「アダプテッド・スポーツ」を広義のものとして捉えて、学部学生の多くが教職を目指す中で、教員として関わる学齢期の運動、スポーツのみならず、生涯スポーツとして幼児や高齢者（高齢障害者）等の取り組みを専門領域としている教員が実習先を確保し実践を行っている。現在は3名の教員が担当しており、子ども、障害児、高齢者を対象とした各種プログラムに学生が実習参加しており、ガイダンス・振り返りを除く全13回の実習に取り組んでいる。3つのうち1つのカテゴリーのみに参加するのではなく、他の2つのカテゴリーにも1回は出席する形となっており、より生涯を通じたスポーツ活動を意識できるような取り組みとなっている。

子ども運動教室については、幼児から小学生までの子どもを対象とし、「運動が好きな子ども、苦手な子どもや障害のある子どもとが一緒になって遊び楽しめる」（大阪体育大学HPより転載）をコンセプトに2012年にスタートしており、1年間に2期を基本に、1期あたり全10回、毎週木曜日に約1時間、約60人の子どもたちが様々な趣向をこらしたレクリエーションや運動に取り組んでいる。

障害児を対象としたプログラムは、「わくわくアダプテッド・スポーツクラブ」という名称で、特別支援学校に通学する障害児を対象に大学内で月に1・2回程度実施されており、履修学生や関連ゼミの学生が活動をリードしている。

高齢者の領域では、大阪府忠岡町地域包括支援センターが主催する「お元いきいき教室」内で、担当教員が講話とスポーツ指導を実施しており、履修学生が補助を行っている。プログラムに関しては、集団体操や筋力トレーニングだけではなく、ニュースポーツ等も取り入れられ、楽しんで運動できるよう工夫がなされている。

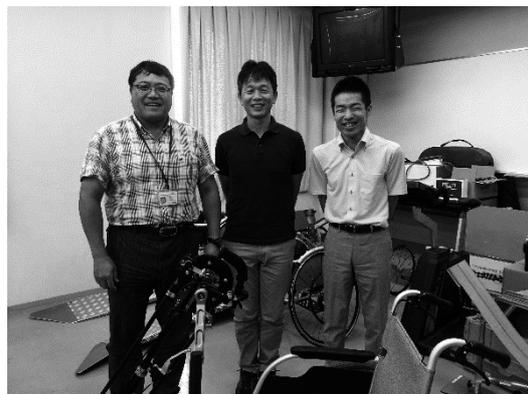
## 2. 障害者スポーツに関わる正課外活動について

学内に「アダプテッド・スポーツ同好会」というサークルが組織されており、毎週木曜日に大学体育館でボッチャや車椅子ハンドボール等の実践を行っており、2019年度は、日本車椅子ハンドボール競技大会、近畿リーグ戦やボッチャの大学選手権、日本財団主催のパラスポーツ運動会等に出場している。



アダプテッド・スポーツ同好会の活動の様相（同好会 Facebook ページより転載）

また、「教育出前講座プロジェクト」が展開されており、教育学部の教員が学校の教育実践研究を支援する地域貢献の取り組みとして、各学校の校内研究や研修会での指導助言や各種講座を提供している。最近では、小中学校での「パラ教育」と関連する依頼が増加しており、ボッチャ等の実技、アダプテッド・スポーツに関わる講義を実施している。



（河西正博）

## 第4章

### シンポジウム抄録集

## シンポジウム 2020「障害者スポーツ競技団体の課題と展望」を開催しました



ヤマハ発動機スポーツ振興財団は、2月2日（日）東京・御茶ノ水ソラシティカンファレンスセンターにてシンポジウム 2020「障害者スポーツ競技団体の課題と展望」を開催しました。本シンポジウムは、当財団が2012年より取り組んでいる「障害者スポーツを取巻く環境調査」結果報告の一環として実施したものです。

障害者スポーツをテーマとしたシンポジウムは、2014年の「日本のパラリンピック選手強化の現状と課題」（神戸と東京の2会場で開催）、2015年「パラリンピック選手発掘・育成・強化システムの現状と今後の方向性について」、2016年「障害者スポーツ選手発掘・育成・強化システムのモデル構築に向けて」、そして2017年の「障害者スポーツのテレビ放送における社会発信の変化」に続いて6回目の開催。本年夏のパラリンピック開催に伴い、障害者スポーツを取巻く環境が大きく変化する中、2018年度に取り組んだ「障害者スポーツ競技団体の実態調査」の結果を踏まえ、パラリンピック種目になっている競技、そうでない競技の実態や今後の課題、展望について、来場者の皆さんとともに考えました。

当日は当財団障害者スポーツ・プロジェクトを代表して小淵和也氏（公益財団法人笹川スポーツ財団 スポーツ政策研究所 政策ディレクター）が調査研究結果と課題を報告。あわせて、パラリンピック競技団体として日本身体障がい者水泳連盟の櫻井誠一氏と日

本車いすフェンシング協会の小松眞一氏、パラリンピック競技以外の団体として日本アンパティサッカー協会の杉野正幸氏がそれぞれの団体の概要や現状の課題などについて発表されました。

また小淵氏をコーディネーターに、パネルディスカッション「障害者スポーツ競技団体の課題と展望」を実施。小淵氏からの主旨説明に続き、中森邦男氏（公益財団法人日本障がい者スポーツ協会 日本パラリンピック委員会 参事）より協会加盟団体におけるパラリンピック競技の団体と、パラリンピック競技以外の団体の現状から「事業内容も資金面でもパラリンピック競技団体に対する支援は他の競技団体と比べて圧倒的に多い」との問題提起をいただいたのち、パラリンピック競技団体の代表として先の櫻井氏、小松氏、パラリンピック競技以外の団体の代表として杉野氏がパネリストとして「東京2020 パラ開催決定後の変化について」と「東京2020 パラ終了後の展開」の2つのテーマに沿って活発に意見を交換しました。

最後に当財団障害者スポーツ・プロジェクトのプロジェクトリーダーである藤田紀昭氏（日本福祉大学スポーツ科学部教授）より「東京2020パラリンピック開催決定を受け、障害者スポーツがもっと良くなるのではないかと夢を描いた。しかしパラリンピック競技の強化に関する環境は大きく変わったが、それ以外のことはほとんど変わっていないのが現実ではないか。皆さんそれぞれの立場で障害者スポーツ競技団体の支援について考えてもらえたら幸甚。これからも調査を続けていくのでご支援を」との挨拶にてシンポジウム2020を終了しました。



## >>調査結果報告

小淵 和也氏（公益財団法人笹川スポーツ財団 スポーツ政策研究所 政策ディレクター）

### 【調査の概要】

パラリンピック競技種目の団体（以下「パラ団体」とパラリンピック競技種目以外の団体（以下、「パラ以外団体」）を対象に「組織形態と事務局運営体制」「組織の構成と運営」「実施している事業内容」「2020年以降の運営体制」などの項目を調査しました。



### 【分析結果からわかったこと】

法人格の取得や職員の雇用、事務局体制などは「パラ団体」の方が充実しており、「パラ以外団体」と相当の差があるのが現状です。一方で、パラリンピック以降の運営や人員の配置については、「パラ団体」が縮小・削減傾向なのに対し、「パラ以外団体」は拡大・増員の意向を示しています。つまり 2013 年にパラリンピックの開催決定以降、「パラ団体」は、数も注目度も予算もグンと上がり、2020 年をピークと捉えているのに対し、「パラ以外団体」は、逆にパラリンピックの追い風が、障害者スポーツ全体に波及することを期待し、2020 年を飛躍のきっかけと考えていることが見えてきました。

### 【2020年以降】

2020 年が終わった時に「パラ団体」の縮小をどれだけ抑えられるか、急激に下がってしまったら、なんのためのパラリンピックだったのかとなりかねません。多少の減少は仕方ないまでも、現状を維持できるか、「パラ団体」と「パラ以外団体」がパラリンピック以降どう動いていくか、今後も注目していきたいところです。

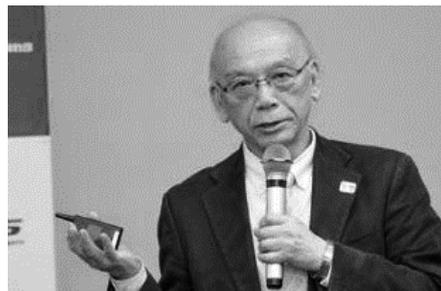
## >>参加競技団体の紹介

**櫻井 誠一氏（一般社団法人日本身体障がい者水泳連盟 常務理事・技術委員長 / 日本パラリンピック委員会 運営委員副委員長）**

### ☆日本身体障がい者水泳連盟について

#### 【概要】

1964年東京パラリンピックの後、全国身体障害者スポーツ大会が開催されるようになりましたが、生涯に1度しか参加できない大会のため、「毎年泳ぎたい」「大会を行いたい」という水泳愛好家が集まって1984年に日本身体障がい者水泳連盟を発足し独自の大会を開催。その後、強化指定選手制度や大会開催数や公認大会を増やすなどの活動を続けてきました。



#### 【拠点】

拠点は神戸に事務機能、日本財団パラリンピックサポートセンター（パラサポ）内に東京オフィス、そしてナショナルトレーニングセンター（NTC）近くに強化拠点とNTC・イーストにコーチング室と分散しており、課題です。

#### 【ルール】

パラリンピックの水泳競技は、国際水泳連盟の健常者ルールに、障害に配慮した泳法というものを加味し、障害の程度に合わせた形で世界パラ水泳連盟のルールが作られています。

#### 【事業構造】

事業構造は、「パラ水泳普及、社会貢献等の実施」「強化・育成・発掘、国際展開の充実」「自立可能な戦略的経営」の3つの大きな柱からなります。

#### 【会員数】

我々の会員数は701名です。最近注目度が高くなり、入会希望も増えています。高齢化社会ですが、10代の会員が増えており、2020年だけでなく2024年、2028年の大会にも期待が持てる構造です。

#### 【財務】

財務関係は、協賛企業を募る活動の成果もあって、2013年から助成金収入と協賛金収入が増えています。しかし経常費用も増えており、結局、経常収支は変わっていない構造で、ある意味厳しいところではあります。

**杉野 正幸氏（特定非営利活動法人日本アンプティサッカー協会 副理事長 / 元日本代表監督）**

☆日本アンプティサッカー協会について

**【概要】**

アンプティサッカーは、主に病気や事故で足を失った人たちが、クラッチと呼ばれる松葉杖を使いながら体を支えてボールを前に蹴り、腕を失った人たちが腕一本でゴールを守るサッカーです。



2009年12月に協会設立。日本障がい者スポーツ協会と日本障がい者サッカー連盟、そして世界アンプティサッカー連盟に加盟しています。9チームが登録しており、登録選手数は104人。年代別では、30代から40代を中心に8歳から80歳まで。性別では10代・20代・30代に1人ずつ女性の選手がいます。また19人がゴールキーパーで、残りの85人がフィールドプレイヤーです。

年間の活動は、5月にレオピン杯 Copa Amputee という全国大会と11月に日本アンプティサッカー選手権を開催。その間にリーグ戦・交流戦を行っています。

世界でアンプティサッカーを導入している国は全部で47カ国。地雷や内戦などで負傷した人たちが気軽に、また安価で始められる競技であることから、アフリカにチームが多い。クラッチと呼ばれる松葉杖は、一对8,000円くらいなので、競技人口は増えていくと思います。

**【課題】**

課題は3つ。まず「普及」。競技人口が少なく、活動機会や試合数も少なく、我々の情報発信も行き届いていません。次に「強化」。活動費が少ないので選手層が薄く、パートナー企業から資金を得ても選手に行き渡らず、代表選手ほどお金がかかります。そして「組織」。組織運営に専任スタッフがいません。すべてボランティアで人数が少なく、非常に最低限のことしかできない。1人あたりの負担が大きいという問題を抱えています。

これら課題の根本は、アンプティサッカーの認知度の低さです。そこで協会設立10周年記念事業として、海外から代表チームを呼んで日本初の国際大会を開催し、アンプティサッカーの魅力を訴求していきたいと考えております。大会は2021年2月に開催予定です。

**小松 眞一氏（NPO 法人日本車いすフェンシング協会 理事長 / 公益財団法人東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会 車いすフェンシング競技チーム スポーツマネージャー）**

☆車いすフェンシングの特徴および2020 東京に向けての活動について

**【概要】**

車いすフェンシングは、腕の長さに合わせて対戦者間の距離を調節し、ピストと呼ばれる装置に110°の角度で車いすを固定して上半身のみで行います。車いすを固定し、全く逃げられない状況で攻撃したり防御したり、一瞬の駆け引きが面白い競技です。



1964年東京パラリンピックに団体で出場しましたが、それ以後活動はなく、1994年に京都の障害者スポーツセンターで開催した車いすフェンシング教室をベースに1998年日本車いすフェンシング協会が設立。2000年シドニー、2004年のアテネ、2008年北京に選手を派遣。東京2020決定以降、環境が非常に変わりました。2017年には京都の練習会場がNTCに認可され、2018年12月には日本で初めてのワールドカップを京都で開催。

**【選手育成・発掘】**

選手の育成に関しては、パラリンピックに向けて、香港からゴールドメダリストを指導者として呼んだり、2017年以降、ヨーロッパ中心に行われているワールドカップに転戦しています。今後は各地でイベント、デモンストレーション、体験会を開催し、選手の発掘を考えています。

**【パラリンピック】**

パラリンピックの出場枠は、車いすフェンシングを行っている国が現在50カ国と選手人口も増え、非常に厳しい状況です。東京大会の出場メンバーは5月31日の発表までわかりません。また東京パラリンピックでは、国際車いすフェンシング協会が役員、技術委員会メンバー、審判を派遣。日本車いすフェンシング協会としては大会の運営をサポートします。

**【今後について】**

今後は京都の拠点とNTC・イーストの東西2カ所で強化していきたいと思っています。もう1つは、指導者、コーチを育てること。それから競技ボランティアの養成です。選手の車いすをピストに固定するボランティアが欠かせません。東京パラリンピックでも競技ボランティアが非常に重要ですので、練習会・講習会を開催しています。さらに

今後は健常者もできるシッティングフェンシングを目指し、車いすフェンシングを広めていきたいと思っています。

## >> パネルディスカッション

### 小淵 和也氏より パネルディスカッションの主旨について

パラリンピックのレガシーの側面で見ると、1964年東京パラリンピックでは、大会後に日本身体障害者スポーツ協会が設立され、全国身体障がい者スポーツ大会が開催されるようになりました。1998年長野パラリンピックでは、日本身体障がい者スポーツ協会が、3障害すべてのスポーツ振興を統括する組織として、身体を取って日本障がい者スポーツ協会に変わりました。2001年には、全国知的障害者スポーツ大会と統合し、全国障害者スポーツ大会が開催されるようになりました。



障害者スポーツの種がまかれて育ち始めたというのが64年。またそれまで障害者のスポーツはリハビリという視点で見られることが多かったのですが、スポーツとして見られるようになってきたのが98年以降です。新聞の紙面でも社会面からスポーツ面に移行してきたというのもこの時期。そして迎えた2020年。どんなパラダイムシフトが起こるか、起こっている最中なのか、そんな中での議論です。

今日は、2020年東京パラリンピックを契機にパラリンピック競技団体とパラリンピック競技以外の団体が、それぞれ抱える課題や描く将来像について、会場の皆さんと一緒に進めていきたいと思っています。「パラ団体」と「パラ以外団体」、それぞれの団体の方がご登壇されるのが今日のシンポジウムの特徴と思っています。

## 中森 邦男氏（公益財団法人日本障がい者スポーツ協会 日本パラリンピック委員会 参事）

### 『各競技団体の現状と課題について（人員・予算・強化の視点より）』

一般のスポーツ団体でいうと日本オリンピック委員会、日本スポーツ協会、日本レクリエーション協会の3つに分けているものを1つにまとめて、日本障がい者スポーツ協会（JPSA）としてやっています。ですので JPSA の中には、79 の競技団体がありますが、その中に日本パラリンピック委員会（JPC）に加盟している 51 団体と、そうでない 28 団体があり、JPC に加盟しているけれども、パラリンピック競技種目ではないデフリンピックなどの団体も半数近くの 22 団体あります。



既に小淵さんから報告がありましたので、概要に留めますが、法人格の取得状況としては、JPC に加盟していない「パラ以外団体」は、半数が法人格がないのに対し、JPC によるガバナンス研修の成果もあって JPC 加盟の団体は、1 団体を除き全てが法人格を取得。事務所形態では、「パラ団体」は約半数がパラサポの中に事務所を構えています。ただしこれは 2022 年 3 月までの期限つきです。また有給職員の状況は、「パラ団体」の平均 5.1 人に対し、「パラ以外団体」では 9 割にあたる 22 団体が有給職員ゼロです。

強化費は、「パラ団体」では専任スタッフや優秀なアスリートへの補助金も含め、1 団体平均 4,259 万円であるのに対し、JPC に加盟していない「パラ以外団体」は 0 円と「パラ団体」が圧倒的に多いということになります。

また「専任スタッフ等の設置」や「医科学サポート」「ハイパフォーマンス事業」など、JPC や日本スポーツ振興センター、日本財団、JOC がやっている強化を中心とした事業についても「パラ団体」は全て行っているのに対し、「パラ以外団体」はほとんどありません。金銭的にも事業面でも「パラ団体」に対する支援は「パラ以外団体」と比べて圧倒的に多い状況です。

JPSA のオフィシャルパートナーは、現在 33 社。その中で担当部署名に「東京 2020 推進」などの名前がついている部署が、4 割近くあります。東京 2020 が終わったら他の部署に移管するかもしれませんが、おそらく事業は縮小、我々のところに入ってくるお金も少なくなると予想しています。

## ディスカッションテーマ 1

### 東京 2020 パラ開催決定後の変化

日本身体障がい者水泳連盟・櫻井氏：

『行政の管轄が変わったことによるメリット、一方で新たな課題が』

日本のスポーツ・リハビリ・トップアスリートの構造から見ると、1964年の東京大会以降の変化として、まず、文部科学省が中心になり、小体連・中体連・高体連・インカレ・国体を頂点とした、スポーツというよりも体育、訓練という形でハイパフォーマンスを追い求める



ジャンルができ上がっていきました。一方、障害者は、厚生労働省管轄下で、リハビリから生涯スポーツ、社会に出ようという方向に進みました。

それが 2013 年から一変。これまで厚生労働省が担当していた障害者スポーツが文部科学省に変更。ボランティア組織だった我々の競技団体がプロ組織に変わらざるを得なくなったのです。

管轄が変わったことでパラリンピックを目指し、ハイパフォーマンスを実現したい障害者アスリートには、メリットがたくさん生まれました。でも裾野を見た時に県民大会・市民大会と言いながら、そこに障害者は参加できていません。またハイパフォーマンスを追求すれば、プロの意識になってきますから、お金がかかります。しかしボランティア団体はお金がない。かといって再び組織をボランティアに戻したら、ハイパフォーマンスは求められない。この現実を解決せずして、次のステップというのがなかなか見えないんですね。ハイパフォーマンス構造を目指すのか生涯スポーツなのか、組織はボランティアなのかプロなのか、そういう構図の歪みが全てにわたって出てきている感じがします。

日本アンパティサッカー協会・杉野氏：

『日本サッカー協会との連携が進んだこと、そしてサポート企業が出てきた』

東京オリンピック・パラリンピックが決定して以降、我々を取巻く環境で大きく変わった点は 2 つ。まず 1 つは、これまで日本サッカー協会との間にあった大きな壁が取り払われ、障害者サッカー 7 団体で構成する日本障がい者サッカー連盟が 2016 年に設立され、日本サッカー協会との連携を図っているということです。

もう 1 つは、これまでは年に 2 回の大きな大会にしか、企業からの支援を受けられ

なかったのですが、パラリンピック開催決定以降は、年間を通じて我々の活動をサポートしてくださる企業が出てきました。

一方、ネガティブな面もあります。新しくこの競技に関わってくれる選手が増えていますが、それ以上にパラリンピックに出場したいとパラリンピック競技に転籍する選手が非常に多いのです。結局、登録選手数の推移として2015年から74人、76人、95人、99人、そして2019年に104人と大幅には増えていかなかったという関係があります。

日本車いすフェンシング協会・小松氏：

『練習環境が非常に良くなり、選手もコーチも増加』

京都の練習会場が2015年秋から365日使えるようになったことが、パラリンピックに向けての大きな変化です。それまでは月に2回あるいは月に1回のペースで、10年ほど練習というか、とにかく維持していた状況でした。それがパラリンピック決定以降、当協会としても京都市や京都市教育委員会にいろいろ頼んだところ、廃校を借りることができ、いっぺんに練習環境が変わりました。

それと同時にJPCの選手発掘事業や東京都障害者スポーツ協会の発掘事業などがありまして、人員が増えてきました。2015年までは全国に選手2人、コーチが1人しかいないという状況でしたが、2017年には選手が20人、コーチが3人になりました。2019年にはワールドカップに出場するような強化選手が12人と選手層もコーチ陣も厚くなってきました。練習環境自体は非常に良くなってきたというのが、本当に嬉しいことです。

## ディスカッションテーマ2

### 東京2020パラ終了後の展開

日本身体障がい者水泳連盟・櫻井氏：

『2020年以降の活動資金確保のためにも競技力向上は重要』

国際競技連盟が異なるので、その傘下にある日本水泳連盟と我々とは、なかなか統合できないと思われます。

財務構造では、2016年から協賛企業と助成金が増えて



事業を展開。一方で費用もそれだけかかっており、収支はそれほど変わっていない構造です。メダルを取れば助成金は安定して増えますが、メダルが取れなければ減る。勝てるか勝てないかで評価が分かれる。そういう厳しい世界に今、入っているということが1つあります。

また協賛金収入は、2020年のパラリンピックまでという契約が結構あるんです。企業の場合、窓口がどこか、特別にできたオリンピック・パラリンピック室なのか、マーケティングをやる広報なのか、社会貢献のCSRなのか。どこのセクションが窓口かによって、協賛金額がどう変化するか読まなければならないんです。ほとんどがマーケティングかオリンピック・パラリンピック室が窓口なので、協賛金確保のためには選手の活躍、価値が重要です。やはり勝たなければ協賛金も減るという発想で物事を見なければなりません。そのためには競技力を向上させなければなりません。かたや次世代の育成のためには普及も欠かせない。普及には各県・市レベルで健常者に混じって基礎から色んなトレーニングや運動をする機会を作らなければ、次世代を担う選手は出てこないという結論に至っています。

日本車いすフェンシング協会・小松氏：

#### 『練習環境の確保とコーチ育成が普及への鍵』

車いすフェンシングの今後は、2020年の後NTC・イーストが練習会場になるのですが、強化選手しか入れないので育成やこれからやってみようという選手がパフォーマンスできず、練習環境をどうするか、現状では練習環境がないのが現実です。

NTC・イーストには日本フェンシング協会の道場と車いすフェンシングの道場が一緒に共存しております。同時に事務所も同じスペースの中にあるので、東京2020が終わってからは、事務所機能はそこで対応できるのではないかと考えています。

財源的な問題と人員の配置の問題。それから生活基盤もあるので、コーチをどうしていくか、全く何も見えていない状況なので、今後考えていかなければなりません。

練習拠点は京都と東京の2つあるのですが、来年の春になると京都の練習会場はNTCの看板を外すと言われており、スポーツ庁に買っていただいたピスト、それから審判機は全部NTC・イーストに持っていくよう言われています。車いすフェンシングは、固定する道具・ピストがないとできないので、2020以降、全国に普及していくにあたり、この点に今後の問題があるかなと考えています。

日本アンプティサッカー協会・杉野氏：

『世界と連携してアンプティサッカーの知名度を向上させていく』

パラリンピックの競技化に向け 2020 年大会はもちろん 2024 年大会についてもエントリーはしたのですが、残念ながら正式採用化は見送られてしまいました。

2020 東京パラリンピック開催決定以降、メディアに取り上げていただく回数が年々増えています。それを追い風に日本初の国際大会を誘致してアンプティサッカーの認知度を向上させようと考えております。ただ認知向上のために開催する世界大会が 1 回きりになってしまうのでは意味がありません。そういう状況を避けるため、この大会を契機としアンプティサッカーをやっている 47 カ国と共闘してパラリンピックの競技化に向けた動きにつなげていきたい。

世界的には大陸間で定期的に大会が行われているのですが、日本が含まれるアジアだけは大陸間の大会が行われていないのです。ですので我々としては 10 周年記念のイベントを契機にまずはアジアアンプティサッカー連盟を組織化し、アジア大会の実現につなげていくような動きにして行きたいと思っております。

パネルディスカッションを終えて

公益財団法人笹川スポーツ財団・小淵氏

本パネルディスカッションでは、調査結果だけでは読み解けない実際の現場の声を聞いてみたく、パラリンピック競技団体（以下、パラ団体）とパラリンピック競技以外の団体（パラ以外団体）の担当者にそれぞれご登壇いただいた。テーマは、東京 2020 パラ大会の開催が決定してからの団体の変化と東京 2020 パラ大会終了後の組織運営の方向性の 2 点に絞った。調査結果同様、パラ団体とパラ以外団体では、東京 2020 パラリンピック大会に対する捉え方は異なっていたが、実態はより複雑で難解なものであることを改めて感じる機会となった。

東京 2020 パラ大会の開催決定後の動きに関していえば、トップアスリートが競技に打ち込むための支援、練習環境の整備、行政支援、団体登録者数の増加、選手層や指導者層の充実などポジティブな面が多く見られた一方で、障害者スポーツの普及を進めるうえで欠かせないボランティアに対しての要求の高度化、2020 年を日本代表選手として迎えたいアスリートのパラリンピック競技への転籍など、別の一面を伺うことができた。

後半は、2021 年以降の団体運営について競技力向上、普及啓発の観点から今後の方

向性について語っていただいた。行政支援、企業スポンサーの減少、メディアの注目度の低下など、東京 2020 パラ大会終了を機にネガティブな要因がどうしても先行してしまうなか、冷静に現状を把握して事業を進めていこうとする姿勢が印象的であった。まずは前提条件として結果を出したうえで、企業からの協賛金支援に向けた交渉、結果を出した選手を取り上げてもらうためのメディアとの出演交渉など、決して充分とは言えないスタッフ数で、競技力向上と普及の両面にアプローチしなければならないジレンマは、全ての競技団体に通ずる課題であろう。対策として、普及地域をアジア圏にまで拡大したり、普及対象に障害のない人を含めるなど、これまでとは異なる工夫をしながら、普及と競技力向上を同時に進めようとする取り組みは非常に興味深いものであった。

本パネルディスカッションにおいて、様々な要因が複雑に絡み合っている競技団体の現状の一端を共有することができたかと思う。残念ながら、各競技団体が抱える課題や不安について、適切な処方箋をすぐに提示することは難しいが、参加してくださった方、報告書を見てくださった方と問題意識を共有し、今後の対策に向けた意見交換を進めていければと思う。

#### 藤田 紀昭氏(日本福祉大学スポーツ科学部教授/ヤマハ発動機スポーツ振興財団障害者スポーツ・プロジェクト プロジェクトリーダー)

7年前、東京パラリンピックが決まった時、私たちはなんとなく障害者スポーツがすごく良くなるのではないか、バラ色の夢を描いていた気がします。しかし、誤解を恐れずに言えば、パラリンピック競技の強化に関する環境は大きく変わったけれども、それ以外のこ



とは競技団体のあり方も含めてそんなに変わってないのが現実です。ここが変わっていないとパラリンピックのレガシーというのではないかと考えています。ですから競技団体自身も変わらなければなりません。パラリンピックの開催が決定して以降、目の前の事務処理に手一杯で、これからのことを考える余裕はなかったのではないかと思います。でも日本を代表する競技団体として、各競技の普及と強化に責任を持ち、ビジョンを持って、そのビジョンを実現するためにしっかりと計画を立てて進んでいく、そういうことが必要ではないかと感じました。現状を踏まえた上で、それぞれの立場からできる形で競技団体を支えていく、ということを考えていただければ、私たちの調査が生きてくるのではないのでしょうか。

## 第5章

### チャレンジ！ユニ★スポ（体験会ケーススタディ）

## 【企画概要】

当財団はこれまで「障害者スポーツを取巻く社会的課題」の調査研究事業を通じて広く社会に対し、環境改善につながる有益な情報を発信してきた。これら活動の中で、障害者スポーツの1つであるボッチャが、障害者向けに生まれた競技であると同時に幅広い年齢層や性差、運動能力、障害の有無に関わらず、誰もが他者との交流、多様性の理解など、今後、社会が求める共生社会実現に向けたスポーツ活用策としての有用性をもつことに着目した。昨今、東京2020パラリンピック開催に向けた社会的ムーブメントの高まりを受け、全国各地でボッチャ体験会が開催される状況である。しかしながら、当財団は本来、「スポーツ振興を通じたより良い社会の実現に寄与すること」が事業趣旨である団体であることから、単に障害者スポーツ普及策としてのボッチャ体験会に留まることなく、以下の項目を同時に有するケーススタディとして活動コンセプトを立案した。

ボッチャ体験会に加え、

- ① 障害者スポーツに関する知識の提供（学習機会）
- ② スポーツが苦手な人に対するスポーツの有用性、価値への理解浸透、意識変革
- ③ スポーツ普及を通じた障害者への理解促進、偏見などの減少
- ④ 社会的価値の醸成（学術的価値）

を有することを目指した。

その結果、これまでの調査研究事業を通じた関係のある公益財団法人静岡県障害者スポーツ協会（以下、「県協会」）、筑波大学体育系 准教授 齊藤まゆみ氏の協力や指導を受け、「チャレンジ！ユニ★スポ」を企画した（以下、「ユニスポ」）。

ユニスポのネーミングは「ユニバーサル・スポーツ」の略として、今回の事業が「ボッチャを障害者スポーツとして前面に出すのではなく、誰もが仲良く、相互理解、多様性を理解し合えるユニバーサルな価値を有するスポーツとして活用する」ことを基軸とした点にある。

また、当財団は基軸となる3事業全てに「チャレンジ」の名称を使用していることから、チャレンジとユニスポをあわせた事業名としている。

ユニスポ実施にあたり、当財団と県協会の共同主催によるコラボレーション事業として、以下の内容とした。

まずは募集対象者として「当財団所在地の静岡県内の特別支援学級を有する小中学校に通う児童・生徒（障害者、健常者の区別なく参加可能）、教員」とした。これは常日頃、学校現場において障害者と共生する環境下にいる子どもたちや教員を対象とすることで、より現実味を持って、自分事としての体験機会となることを期待したものである。公募の結果、最終的に県内各地の募集対象となった小・中学校から全 15 校、約 1200 名の児童・生徒および教員が参加する大規模なものになった。

また、前述の①と④を満たすために、ユニスポ実施校に対して、体験会参加に先立ち、I'm POSSIBLE による事前学習の実施、さらには本事業に参加する児童・生徒の「障害者」や「障害者スポーツ」に対する意識変容を時系列で把握するアンケート調査を全 3 回実施した（1 回目：事前学習前、2 回目：事前学習を受講後に参加する体験会直後、3 回目：体験会参加後、2～3 ヶ月経過時）。

今回の活動はケーススタディであったが最終的に約 1200 名の参加者を得、学術的調査（意識変容調査）も同時に行うことができた。本企画の実現にあたり、ご尽力いただいた静岡県、県協会、静岡県障害者スポーツ指導者協議会および指導員の皆様、齊藤先生を初めとする当財団障害者スポーツ・プロジェクトメンバー、そして、本活動趣旨をご理解いただき様々な協力をいただいた静岡県内の学校関係者の皆様にお礼申し上げます。

【活動結果】

	日程	学校名	参加者数		
			児童生徒 (うち障害児)	教員	合計
1	9月18日(水)	浜松市立浜名小学校	106(4)	3	109
2	10月24日(木)	浜松市立上島小学校	162(12)	7	169
3	10月25日(金)	掛川市立中小学校	21(0)	1	22
4	10月29日(火)	静岡市立大里東小学校	39(4)	3	42
5	10月31日(木)	磐田市立大藤小学校	33(1)	1	34
6	11月5日(火)	浜松市立双葉小学校	30(6)	4	34
7	11月7日(木)	小山町立成美小学校	60(0)	2	62
8	11月11日(月)	静岡市立南藁科小学校	127(0)	6	133
9	11月13日(水)	磐田市立竜洋西小学校	96(1)	3	99
10	11月14日(木)	小山町立須走小学校	39(3)	3	42
11	11月21日(木)	浜松市立犬居小学校	18(1)	3	21
12	12月2日(月)	菊川市立小笠南小学校	106(3)	3	109
13	12月5日(木)	磐田市立磐田西小学校	87(2)	3	90
14	12月6日(金)	函南町立東中学校	128(1)	8	136
15	12月10日(火)	静岡市立清水袖師小学校	83(5)	4	87
合計			1135(43)	54	1189

【活動の様子】





### 【参加した児童・生徒の声】

(小学生のコメントより)

- ボッチャはケガをした人でもできるとわかりました。
- 体の不自由な人が楽しめるように工夫なども分かって良かったです。
- 障害者向けスポーツと聞いて、難しいのかなと思っていたけど、みんなで盛り上がりたり、協力しあえたりできて良かったです。
- 初めてやったのでボールを投げる力加減が難しかったです。簡単だと思っていたけど、やってみたら難しかったです。やっていると慣れてきて障害者とも一緒にやれるスポーツだと思いました。
- スポーツが苦手で、できるかな、って思ってやったらできて、楽しくなりました。その訳は、始めはスポーツが出来なくて不安だったからです。もう一回みんなでやってみたいです。
- やってみるととても楽しく簡単で「だれでもできる」という意味がわかってきました。
- 最初は簡単だと思ったけど、やってみるとジャックボール（的玉）に近づけるのは難しかったです。

- 3年生から6年生までみんなで楽しめたので良かったです。差があまりなくできるスポーツということがわかりました。みんなでできるスポーツで楽しかったので、家族や兄弟みんなでやりたい。
- 大人でもお年寄りでも、障害のある人でも楽しめることに感動しました。そして、障害のある人の手助けをしてみようかな、とも思いました。
- 一番印象に残ったことは、協力です。ボッチャはみんなで協力をして、そして何才でもいいことにびっくりしました。他の競技にもチャレンジしてみたいです。

(中学生のコメントより)

- 最初は難しそうだし運動が苦手な私には絶対無理だろうな、と思っていましたが、全然そんなことはなくて実際やってみると運動ができる、できないは関係なくて、上手くできると楽しいし達成感みたいなのがありました。一緒にやったチームの人に褒められてすごく嬉しかったです。いつのまにかあまり話すことのない人と話せたり、試合を見るのも楽しかったです。こうしてみるとボッチャはいろんな人と繋がれるスポーツなんだなあ、と実感しました。また、障害のある人と繋がるためのスポーツだと思いました。
- 最後の一球まで何が起こるか分からないスリルがあるスポーツで、わくわくがとまりませんでした。全ての大人が上手なわけでもないし、運動の得意な人が絶対に上手なわけでもない、みんなが平等にできるのがとてもよかったです。
- 最初は「ただボールを投げて白い球に近づければいい」と思っていたボッチャも、今では「このボールをどうやって近づけるか」と考え、「どうやったら点がとれるか」と悩みます。ボッチャは立派な“スポーツ”なのだとわかりました。ボッチャの選手たちは、こんな難しいスポーツを、日本を背負ってやっているのかと思うと尊敬せずにはいられませんでした。
- 特に心に残っているのは、先生方と生徒がボッチャの対戦をして生徒チームが勝ったことです。年齢の差も性別もスポーツが得意不得意なども関係なく誰でも楽しめるスポーツだということ、けがや病気などで生きる希望を失っていた人たちなどの生きがいになれるボッチャはすごいなと思いました。
- 色んなチームと試合をして、それぞれのチームの作戦を次のチームとの試合で用いたり、チームの仲間の応援をしたり、みんなで協力して勝てたときはうれしいし、負けたときは悔しい。学年の絆を深めるとてもいい機会となりました。今回の「ユニスポ」のボッチャを通じて、他のユニスポもやってみたいと思いました。また、オリンピック

クだけでなくパラリンピックも全力で応援しようと思いました。

- ・心に残っているのは、男女の壁です。普段、ほとんどの人が男女で会話をしています。ですが、ボッチャを体験させていただいたときは、普段の様子とは違っていました。男女の壁が全然なかったのです。互いにアドバイスをかけていたり、励ましあったり、どうすればいいか聞いたり・・・私はそれを見てびっくりしました。ボッチャは私たちのような子供たちを始め、いろんな人たちが楽しく遊べるものだと知りました。
- ・みんなでボールを転がして、説明で言っていた通り本当に「どんな人でも」楽しめていてすごかったです。年齢も運動神経も関係なくて、自分自身が本当に楽しめました。今まで、パラリンピック競技など自分には全く関係ない事だと思っていましたが、ボッチャ体験を通してパラリンピックを身近に感じる事ができました。
- ・私は体が不自由な人といっしょにスポーツをするにはルールを工夫したりと、難しいと思っていました。けれどボッチャの体験で考え方が変わりました。中学生と大人が戦ったり、手が不自由な人ともいっしょに楽しめたり、ボッチャは誰とでも楽しめるスポーツだということを実際に体験して知ることができました。そしてボッチャのように誰でも楽しめるスポーツを「ユニバーサル・スポーツ」というと学びました。他にもどんなものがあるのか探してみたいです。ユニバーサル・スポーツがもっと広く知られ、みんなでいっしょにスポーツができるような社会になってほしいです。
- ・日本ではまだ障害を持っている人たちへの偏見があります。心のどこかで私とこの人はちがう、と思ってしまうのでしょうか。しかし、ボッチャは例え車いすの人とでも体を動かせない人とでも平等に勝負ができる、というのに感激しました。バリアフリーという言葉がありますが、まさに壁がなくなるスポーツだなと思いました。運動が嫌いな私でも楽しくやれることが嬉しくなりました。

#### 【今後に向けて】

今回、本事業に参加してくれた児童・生徒から回収した意識変容調査結果を分析してまとめ、次年度に社会発信していく予定である。また、ケーススタディとして取り組んだ事業であったが、実際の活動現場では今回のユニスポが多くの子どもたち、教員、障がい者スポーツ指導員から当初の想像を大きく上回る高い評価や事業継続希望の声をいただいております。今後は継続に向け、実施に不可欠な協力者の皆様と協議を行っていく予定である。

(尾鍋文光)

## あとがき

---

公益財団法人日本障がい者スポーツ協会  
日本パラリンピック委員会 参事  
中森邦男

ヤマハ発動機スポーツ振興財団の「障害者スポーツ・プロジェクト」は、2012年より継続して「障害者スポーツを取巻く社会的課題」について、10を超える視点から取り組みを行ってきました。パラアスリートを中心としたスポーツ環境（学校、施設、指導者、医科学サポート）、競技団体、スポンサー企業やメディアなどの実態把握は、東京2020パラリンピック決定以前、決定から開催まで、そして開催後の変化を検証する貴重な多くの資料となります。

1989年に創設された国際パラリンピック委員会は、当初から「Athletes Centered Organization」を謳い、アスリートを中心に置いています。様々な障害のあるアスリートたちが創意工夫をこらして限界に挑むパラリンピックは、誰もが個性や能力を発揮し活躍できる公正な機会が与えられています。アスリートが見せる、困難なことがあってもあきらめずに限界に挑戦し続ける姿は、見る者に驚きや感動を与え、元気や勇気を生み出すなど、特に子どもたちにとっては素晴らしい刺激となります。

東京パラリンピックが近づくにつれ、日本政府、地方公共団体、学校、企業、テレビや新聞など多くの機関、組織やメディアがパラリンピックを取り上げ、パラリンピックの理解やサポートが大いに進み、そして、その先にある誰もが喜び、活躍できる共生社会の実現に触れています。

日本障がい者スポーツ協会は東京2020パラリンピックを成功させるために、全競技会場を満員の観客で満たし、その中で日本代表選手が大活躍できるよう、諸々の取り組みを実施しています。東京パラリンピックを観たり、触れ合ったり、経験した人が障害者の理解、特に障害のある人の可能性の理解を通して、年齢、性別、人種や宗教の違いなど多様な人々の相互理解が進み、それぞれが豊かに活躍できる社会の実現を目指していけるよう願っています。

付録  
各調査 調査票

いわてけんない しょうがいしゃす ぽ - つ かんきょう いしき かん ちょうさ れいわがんねん がつ  
**岩手県内の障害者スポーツ環境や意識に関する調査** (令和元年6月)

- 回答の所要時間は、10分程度です。鉛筆もしくは黒・青のボールペンを使用してください。
- 回答は任意です。最初のページから順番に回答してください。
- 全体をとりまとめ統計的処理します。回答者情報は特定されず、皆様に不利益を及ぼしません。
- 「障害」の表記は団体名など固有名詞を除き、各種法令の表現に合わせ漢字表記としています。

**7月14日(日)** までに返信用封筒に入れて投函ください。(切手不要です。)

**【調査実施機関】** 主 催：公益財団法人ヤマハ発動機スポーツ振興財団

協 力：岩手県障がい者スポーツ協会

調査委託：株式会社 サーベイリサーチセンター

**【問合せ先】** 株式会社 サーベイリサーチセンター 調査事務局 担当：鈴木

TEL: 03-3802-6775(月～金曜日、9時～17時) <http://www.surece.co.jp/>

問1. 普段スポーツ(身体を動かす)する機会がありますか。( 1.ある 2.ない )

問2. 上記<問1>で普段スポーツする機会が“ある”と答えた方のみ、ご回答ください。

(2-1). ご本人は、どれくらいの頻度でスポーツを行っていますか。(○は1つ)

- |             |             |
|-------------|-------------|
| 1. 週に6～7回程度 | 5. 月に2～3回程度 |
| 2. 週に4～5回程度 | 6. 月に1回程度   |
| 3. 週に2～3回程度 | 7. 年に数回程度   |
| 4. 週に1回程度   |             |

(2-2). ご本人は、1回あたりどれくらいの時間、スポーツを行っていますか。(○は1つ)

- |                |                |
|----------------|----------------|
| 1. 1時間以内       | 6. 3時間から3時間半未満 |
| 2. 1時間から1時間半未満 | 7. 3時間半から4時間未満 |
| 3. 1時間半から2時間未満 | 8. 4時間以上5時間未満  |
| 4. 2時間から2時間半未満 | 9. 5時間以上       |
| 5. 2時間半から3時間未満 |                |

問3. アンケート記入者は？ 1. 選手本人 2. 選手の介助者(家族など) 3. 関係者(競技、施設、学校など)

問4. あなたの性別と年齢をお知らせください。 1. 男 2. 女 \_\_\_\_\_ 歳

問5. あなたのお住まいは？ (在 住 市 町 \_\_\_\_\_)

問6. あなたは結婚していますか。(どちらかに○) 1. 既婚(している) 2. 未婚(していない)

問7. あなたの職業をお知らせください。(○は1つ)

- |                          |                        |
|--------------------------|------------------------|
| 1. 生徒・学生                 | 8. 福祉施設職員              |
| 2. プロ選手(競技収入により生計を立てている) | 9. スポーツクラブ職員           |
| 3. 教員(公立・私立問わず)          | 10. 一般企業の会社員           |
| 4. 官公庁・自治体職員             | 11. 自営業                |
| 5. 団体職員                  | 12. 主婦・主夫              |
| 6. 病院職員                  | 13. 無職(施設利用者・就労予定者を含む) |
| 7. リハビリ施設職員              | 14. その他(具体的に _____)    |

問8. 障害の受傷・発症についておかがいします。(○は1つ)

\* 中途障害の場合は、何歳ごろ受傷・発症したかお知らせください。

1. 先天性障害 2. 中途障害 ⇒ \_\_\_\_\_ 歳 \_\_\_\_\_ 月ごろ受傷・発症

問9. 障害の程度について、身体障害者手帳の等級を記入し、該当する等級全てに○をつけてください。

知的障害の方は手帳名称と等級を、精神障害の方は手帳有無と等級をご記入ください。

身体障害	種	級								
1. 視覚障害			1級	2級	3級	4級	5級	6級		
2. 聴覚又は平衡機能障害				2級	3級	4級	5級	6級		
3. 音声機能、言語機能又はそしゃく機能障害					3級	4級				
4. 肢体不自由										
4-1. 上肢			1級	2級	3級	4級	5級	6級	7級	
4-2. 下肢			1級	2級	3級	4級	5級	6級	7級	
4-3. 体幹			1級	2級	3級		5級			
4-4. 乳幼児期以前の非進行性の脳病変による運動機能障害①上肢機能			1級	2級	3級	4級	5級	6級	7級	
4-5. 乳幼児期以前の非進行性の脳病変による運動機能障害②移動機能			1級	2級	3級	4級	5級	6級	7級	
5. 内部障害			1級	2級	3級	4級				
知的障害			てちょうめいしやう (手帳名称)				とうきやう (等級)			
精神障害			せいしんしやうがいは ほけん ふくし てちやう 精神障害者保健福祉手帳				とうきやう (等級) ※ありの場合			
			あり		なし					

問10. 第21回岩手県障がい者スポーツ大会の出場予定競技をお知らせください。(番号に○を、いくつでも)

1. フライングディスク 2. 陸上競技 3. ボウリング 4. 卓球 5. 水泳 6. アーチェリー

問11. 本日出場する競技を始めたきっかけは何ですか。(○はいくつでも)

- |                      |                                      |
|----------------------|--------------------------------------|
| 1. 学校の授業やクラブ活動で      | 8. 国際大会(パラリンピック・オリンピック・世界選手権など)を観戦して |
| 2. 医療関係者のすすめで        | 9. 国内大会(障害者スポーツ大会・国民体育大会など)を観戦して     |
| 3. 福祉関係者のすすめで        | 10. 講習会や交流会で紹介されて                    |
| 4. 家族のすすめで           | 11. テレビや雑誌などメディアを通じて                 |
| 5. 友達や知人のすすめで        | 12. その他( )                           |
| 6. リハビリで始めたから        |                                      |
| 7. 受傷・発症前よりプレイしていたから |                                      |

(11-1)上記回答で最もあてはまる番号をひとつお知らせください。

番号⇒

問12. あなたの障害者スポーツ選手としての目標をお知らせください。(○はいくつでも)

- |                          |                      |
|--------------------------|----------------------|
| 1. パラリンピック・デフリンピックメダリスト  | 9. 全国障害者スポーツ大会メダリスト  |
| 2. パラリンピック・デフリンピック出場     | 10. 全国障害者スポーツ大会出場    |
| 3. 世界選手権(障害別世界大会など)メダリスト | 11. 県障がい者スポーツ大会メダリスト |
| 4. 世界選手権(障害別世界大会など)出場    | 12. 県障がい者スポーツ大会出場    |
| 5. 地域別国際大会(アジアパラなど)メダリスト | 13. その他(具体的に)        |
| 6. 地域別国際大会(アジアパラなど)出場    |                      |
| 7. ジャパンパラ大会メダリスト         |                      |
| 8. ジャパンパラ大会出場            |                      |

問13. 今後、行いたい競技や運動は何ですか。(○はひとつ)

1. 現在の競技を続けたい

2. 新たな競技や運動に取り組みたい(具体的にいくつでも)

( )

3. 競技としては続けたくない。趣味や健康維持のための運動として続けたい。

4. もう競技も運動も続けたくない。

問14. 選手引退後の障害者スポーツとのかかわり方の希望についてお知らせください。(○はいくつでも)

1. 指導者として 2. ボランティアとして 3. 愛好者として 4. かかわりたくない

5. その他(具体的に)

問15.学校の体育の授業についてお知らせください。(進学されていない方は未記入で結構です)  
 中途障害の方は、受傷・発症後のことについてお知らせください。

	がっこうしゅべつ 学校種別 (いずれかに○)	がっこうたいいく 学校体育とのかかわり方 (○はそれぞれ1つ)
しょうがっこう 小学校	1. 通常の学級 2. 特別支援学級 3. 特別支援学校	1. ほぼ参加した 2. できるものは参加した 3. ほぼ見学 4. 代替え授業を受けた 5. 不参加 6. その他 ( )
ちゅうがっこう 中学校	1. 通常の学級 2. 特別支援学級 3. 特別支援学校	1. ほぼ参加した 2. できるものは参加した 3. ほぼ見学 4. 代替え授業を受けた 5. 不参加 6. その他 ( )
こうこう 高校	1. 通常の学級 2. 特別支援学校	1. ほぼ参加した 2. できるものは参加した 3. ほぼ見学 4. 代替え授業を受けた 5. 不参加 6. その他 ( )
だいがく 大学		1. ほぼ参加した 2. できるものは参加した 3. ほぼ見学 4. 代替え授業を受けた 5. 不参加 6. その他 ( )

問16. 昨年度中('18年4月～'19年3月)にスポーツやウォーキング等の健康を意識した運動を行いましたか？ あてはまるものすべてを選び、数字に○を付けてください。(いくつでも可)

1. フライングディスク 2. アーチェリー 3. フットベースボール 4. ボッチャ 5. 陸上競技  
 6. 水泳 7. ボウリング 8. サウンドテーブルテニス 9. バスケットボール 10. 車いすバスケットボール  
 11. ソフトボール 12. グラウンドソフトボール 13. バレーボール・ソフトバレーボール 14. 卓球/バレー  
 15. サッカー・フットサル 16. 車いすテニス 17. ゲートボール 18. 散歩(ぶらぶら歩き、犬の散歩)  
 19. 通勤・通学のウォーキング 20. 通勤・通学の自転車 21. ラジオ体操 22. 健康体操(軽い体操含む)  
 23. 家事のうち掃除など身体活動的なもの 24. 職場での朝や昼の体操 25. ウォーキング  
 26. ジョギング・ランニング 27. 筋力トレーニング 28. ヨガ・ラピティス 29. ノルディックウォーキング  
 30. 登山・ハイキング 31. サイクリング 32. キャンプ・釣り 33. ゴルフ・グラウンドゴルフ  
 34. ボルダリング 35. スキー・スノーボード 36. スケート 37. キャッチボール 38. 野球・ソフトボール  
 39. 卓球 40. テニス・ソフトテニス 41. バドミントン 42. ラグビー・タグラグビー 43. ホッケー  
 44. ボクシング 45. レスリング 46. 柔道 47. 剣道 48. 相撲 49. 弓道 50. なぎなた 51. 空手道  
 52. 太極拳 53. サーフィン・ウインドサーフィン 54. その他 ( )  
 55. 該当なし(運動やスポーツを行っていない。)

問17. 普段、スポーツに関する情報をどこから得ていますか。(〇はいくつでも)

1. テレビ	6. 友人
2. 新聞	7. 学校・医療施設・福祉施設
3. インターネット	8. 市発行の広報誌(市政だよりなど)
4. SNS( ツイッター、フェイスブックなど)	9. 市障がい者スポーツ協会ニュースなど
5. 家族・親族	10. その他

問18. スポーツ経験について記入例に従い、種目をお知らせください。(未進学の方は未記入で結構です)

※高校や大学に進学されていない方は、  
 該当年齢時のスポーツ経験についてご記入ください。  
 ※それぞれ中心的に取り組んでいた種目について  
 ご記入ください。  
 ※実施していない場合は空欄で結構です。

【記入例】

※中途障害の方は、受傷時期に〇を記入してください。	体育の授業で好きだった種目	学校の部活動	スポーツクラブや少年団など	趣味で行っていたスポーツ
小学校入学以前(0~5歳ごろ)			体操	サッカー
小学校(6~12歳ごろ)		水泳	剣道	サッカー
中学校(13~15歳ごろ)	〇 陸上競技			
高校(16~18歳ごろ)	陸上競技			
大学(18~22歳ごろ)	陸上競技			
20歳代(23~29歳ごろ)			陸上競技	
30歳代(30~39歳ごろ)				

※中途障害の方は、受傷・発症時期に〇を記入してください。	体育の授業で好きだった種目	学校の部活動	スポーツクラブや少年団など	趣味で行っていたスポーツ
入学以前(0~5歳)				
小学校(6~12歳)				
中学校(13~15歳)				
高校(16~18歳)				
大学(18~22歳)				
20歳代(23~29歳)				
30歳代(30~39歳)				
40歳代(40~49歳)				
50歳代(50~59歳)				
60歳代(60~69歳)				

問19. 障害者スポーツの現状や課題など、ご自由にお書きください。

---



---



---



---

いわてけんない しょう しゃ かんきょう いしき かん ちょうさ  
岩手県内の障がい者スポーツ環境や意識に関する調査  
(各種スポーツ教室参加者用)

ねん がつ  
2019年7月  
しんこうざいだん  
公益財団法人ヤマハ発動機スポーツ振興財団

きにゅうじょう ねが  
ご記入上のお願い

- かいとう しょうじかん ぶんていど  
回答の所要時間は、10分程度です。
- えんぴつ くろ あお しょう  
鉛筆もしくは黒・青のボールペンを使用してください。
- さいしょ じゆんばん かいとう  
最初のページから順番に回答してください。
- かいとう ばんごう かこ がいとう すうじ もじ きにゅう  
回答はあてはまる番号を○で囲んだり、該当する数字や文字を記入してください。
- とうけいてきしより かいとうしゃじようほう とくてい みなさま ふりえき およ  
統計的処理しますので回答者情報は特定されず、皆様に不利益を及ぼすことはありません。  
この調査において、回答は任意です。
- ちょうさひょうない しょうがい ひょうき だんたいめい こゆうめいし のぞ かくしゅうれい ひょうげん あ かんじ  
調査票内の「障害」の表記は、団体名などの固有名詞を除き、各種法令の表現に合わせて漢字での  
ひょうき  
表記としております。
- きにゅう  
記入いただきましたアンケートは **10月31日(木)** までと同封の返信用封筒に入れて投函ください。  
(切手は不要です)

ちょうさじっしきかん  
【調査実施機関】

しゅ さい こうえきざいだんほうじん はつどうき しんこうざいだん  
主 催：公益財団法人ヤマハ発動機スポーツ振興財団

きょう りよく いわてけんしょう しゃ きょうかい  
協 力：岩手県障がい者スポーツ協会

ちょうさいたく かぶしきがいしゃ  
調査委託：株式会社 サーベイリサーチセンター

ちょうさ ふめい てん か き れんらく  
調査について不明な点などがございましたら、下記までご連絡ください。

といあわ きき  
【問合せ先】

かぶしきがいしゃ ちょうさじむきょく たんとう すずき  
株式会社 サーベイリサーチセンター 調査事務局 担当：鈴木

とうきょうとあらかわくにしにっぽり  
〒116-8581 東京都荒川区西日暮里2-40-10

つき きんようび じ じ  
TEL：03-3802-6775 (月～金曜日、9時～17時)

こうえきざいだんほうじん はつどうき しんこうざいだん たんとう おなべ  
公益財団法人ヤマハ発動機スポーツ振興財団 担当：尾鍋

しずおかけんいわたししんがい  
〒438-8501 静岡県磐田市新貝2500

つき きんようび じ じ  
TEL：0538-32-9827 (月～金曜日、9時～17時)

問1.このアンケート記入者はどなたですか？ 1.受講生（ご本人） 2.保護者 3.介助者/付添い者

問2.ご本人の性別と年齢をお知らせください。 1. 男 2. 女 （ 歳）

問3.ご本人のお住まいは？ (市区町村)

問4.ご本人の職業をお知らせください。(〇は1つ)

- |                          |                |
|--------------------------|----------------|
| 1. 生徒・学生                 | 8. 福祉施設職員      |
| 2. プロ選手(競技収入により生計を立てている) | 9. スポーツクラブ職員   |
| 3. 教員(公立・私立問わず)          | 10. 一般企業の会社員   |
| 4. 官公庁・自治体職員             | 11. 自営業        |
| 5. 団体職員                  | 12. 主婦・主夫      |
| 6. 病院職員                  | 13. 無職         |
| 7. リハビリ施設職員              | 14. その他(具体的に ) |

問5.ご本人は結婚していますか。(どちらかに〇) 1. 既婚 2. 未婚

問6.障害の受傷・発症についておうかがいします。(〇は1つ)

\*中途障害の場合は、何歳ごろ受傷・発症したかお知らせください。

1. 先天性障害	2. 中途障害 ⇒	<input type="text"/> <input type="text"/> 歳	<input type="text"/> <input type="text"/> ヶ月ごろ受傷・発症
----------	-----------	---------------------------------------------	-----------------------------------------------------

問7. 障害の程度をお知らせください。あてはまる障害者手帳の等級をお知らせください。

知的障害の方は手帳名称と等級を、精神障害の方は手帳有無と等級をご記入ください。

身体障害	種	等級						
1. 視覚障害		1級	2級	3級	4級	5級	6級	
2. 聴覚又は平衡機能障害			2級	3級	4級	5級	6級	
3. 音声機能、言語機能又はそしゃく機能障害				3級	4級			
4. 肢体不自由								
4-1. 上肢		1級	2級	3級	4級	5級	6級	7級
4-2. 下肢		1級	2級	3級	4級	5級	6級	7級
4-3. 体幹		1級	2級	3級		5級		
4-4. 乳幼児期以前の非進行性の脳病変による運動機能障害①上肢機能		1級	2級	3級	4級	5級	6級	7級
4-5. 乳幼児期以前の非進行性の脳病変による運動機能障害②移動機能		1級	2級	3級	4級	5級	6級	7級
5. 内部障害		1級	2級	3級	4級			
知的障害		(手帳名称)				(等級)		
精神障害		精神障害者保健福祉手帳				(等級) ※ありの場合		
		あり		なし				

問8. 本日参加したスポーツ教室名は？ ( )

問9. 本日参加したスポーツ教室歴をお知らせください。(どちらかに○)

1. 今年から初めて参加 (2019年から)      2. 以前から参加 ( )年目)

問10. スポーツを始めたきっかけは何ですか。(○はいくつでも)

- |                      |                                      |
|----------------------|--------------------------------------|
| 1. 学校の授業やクラブ活動で      | 8. 国際大会(パラリンピック・オリンピック・世界選手権など)を観戦して |
| 2. 医療関係者のすすめで        | 9. 国内大会(障害者スポーツ大会・国民体育大会など)を観戦して     |
| 3. 福祉関係者のすすめで        | 10. 講習会や交流会で紹介されて                    |
| 4. 家族のすすめで           | 11. テレビや雑誌などメディアを通じて                 |
| 5. 友達や知人のすすめで        | 12. その他 ( )                          |
| 6. リハビリで始めたから        |                                      |
| 7. 受傷・発症前よりプレイしていたから |                                      |

(10-1) 上記回答で最もあてはまる番号をひとつお知らせください。 番号⇒

問11. 普段、スポーツに関する情報をどこから得ていますか。(○はいくつでも)

- |                          |                         |
|--------------------------|-------------------------|
| 1. テレビ                   | 6. 友人                   |
| 2. 新聞                    | 7. 学校・医療施設・福祉施設         |
| 3. インターネット               | 8. 県や市町村発行の広報誌(県民だよりなど) |
| 4. SNS( ツイッター、フェイスブックなど) | 9. 県障がい者スポーツ協会ホームページ    |
| 5. 家族・親族                 | 10. その他 ( )             |

問12. 普段スポーツ(身体を動かす)する機会がありますか。( 1. ある      2. ない )

※この質問で“ない”と答えた方は、問14までお進みください。

問13. 上記の <問13>で、普段スポーツする機会が“ある”と答えた方のみ、ご回答ください。

(13-1). ご本人はどれくらいの頻度でスポーツを行っていますか。(○は1つ)

- |             |               |
|-------------|---------------|
| 1. 週に6~7回程度 | 5. 月に2~3回程度   |
| 2. 週に4~5回程度 | 6. 月に1回程度     |
| 3. 週に2~3回程度 | 7. 2~3ヶ月に1回以下 |
| 4. 週に1回程度   |               |

(13-2). ご本人は1日あたりどれくらいの時間、スポーツを行っていますか。(○は1つ)

(13-3). ご本人は普段のスポーツについてどのように考えていますか。(〇はいくつでも。具体的に)

1. 今のままでよい
2. 時間を増やしたい→ 1回 ( ) 時間程度
3. 機会を増やしたい→ 週に ( ) 回程度
4. 内容を変えたい (例：サッカーをしたい、近所で行いたい、スポーツクラブに通いたいなど  
→ (具体的に: ( ) )

(13-4). ご本人は主にどこでスポーツを行っていますか。(〇は1つ)

- |                                                                                                      |                                                                                                   |
|------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 一般向け公共施設</li> <li>2. 障害者向け公共施設</li> <li>3. 企業施設</li> </ol> | <ol style="list-style-type: none"> <li>4. 民間クラブ施設</li> <li>5. 学校施設</li> <li>6. その他 ( )</li> </ol> |
|------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------|

(13-5). ご本人は主にだれとスポーツを行っていますか。(〇は1つ)

- |                                                                                                                                                                                         |                                                                                                                                                                                           |
|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 医師</li> <li>2. 理学療法士など医療関係者</li> <li>3. 介護士や施設職員など福祉関係者</li> <li>4. 父母</li> <li>5. 兄弟姉妹</li> <li>6. 夫・妻(配偶者)</li> <li>7. 先生など学校関係者</li> </ol> | <ol style="list-style-type: none"> <li>8. パラリンピックメダリストなどのトップアスリート</li> <li>9. 監督やコーチ</li> <li>10. 友人</li> <li>11. 先輩や後輩</li> <li>12. 公認障がい者スポーツ指導員</li> <li>13. その他(具体的に ( ) )</li> </ol> |
|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

問14. スポーツをする上でのご本人の目標をお知らせください。(〇はいくつでも)

- |                                                                                                                                                      |                                                                                                                                                                                                          |
|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 身体を鍛えたい (健康志向)</li> <li>2. 運動力を高めたい (競技志向)</li> <li>3. 仲間や友人を増やしたい</li> <li>4. 自分の可能性を知りたい・広げたい</li> </ol> | <ol style="list-style-type: none"> <li>5. 地方競技大会に出場 (県スポーツ大会など)</li> <li>6. 全日本競技大会に出場 (ジャパンパラなど)</li> <li>7. 地域別国際大会に出場 (アジアパラなど)</li> <li>8. パラリンピック・デフリンピックに出場</li> <li>9. その他 (具体的に ( ) )</li> </ol> |
|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

問15. 今後、行いたいスポーツは何ですか。自由にお書きください。ない場合は「なし」とご記入ください。

<15-1健康推進、レクリエーションとして>

- ・
- ・

<15-2 競技スポーツとして>

- ・
- ・

問16. リオ2016パラリンピックをテレビやインターネットで観戦しましたか。(〇はいくつでも)

- |                          |                              |
|--------------------------|------------------------------|
| 1. テレビで中継番組を観た           | 6. インターネットで選手・競技を紹介した特集番組を観た |
| 2. テレビのニュース番組を観た         | 7. (テレビやインターネットの) その他の方法で観た。 |
| 3. テレビで選手・競技を紹介した特集番組を観た | 8. テレビやインターネットで観戦しなかった       |
| 4. インターネットで中継を観た         |                              |
| 5. インターネットでニュース番組を観た     |                              |

問17. ピョンチャン2018パラリンピックをテレビやインターネットで観戦しましたか。(〇はいくつでも)

- |                          |                              |
|--------------------------|------------------------------|
| 1. テレビで中継番組を観た           | 6. インターネットで選手・競技を紹介した特集番組を観た |
| 2. テレビのニュース番組を観た         | 7. (テレビやインターネットの) その他の方法で観た。 |
| 3. テレビで選手・競技を紹介した特集番組を観た | 8. テレビやインターネットで観戦しなかった       |
| 4. インターネットで中継を観た         |                              |
| 5. インターネットでニュース番組を観た     |                              |

問18. 東京2020パラリンピックについてお答えください。(〇はいくつでも)

1. テレビで中継番組を観たい (特に観たい競技名: \_\_\_\_\_)
2. インターネットで中継番組を観たい (特に観たい競技名: \_\_\_\_\_)
3. 東京都の競技会場で直接観戦したい (特に観たい競技名: \_\_\_\_\_)
4. 東京以外の競技会場で直接観戦したい (特に観たい競技名: \_\_\_\_\_)
5. 特に興味関心なし

問19. 東京2020パラリンピック開催決定後、身の周りで何か変化がありましたか? (〇はいくつでも)

1. 障害のある方でスポーツする人が増えた
2. 障害のある方を受け入れてくれるスポーツ施設が増えた
3. 各種施設(公共、民間)でバリアフリー化(スロープ、エレベーターの整備など)が進んだ
4. 障害者スポーツに関する話題をメディア(テレビ、新聞、インターネット)で見る機会が増えた
5. パラリンピックを話題にする人が増えた
6. 特になにも変わらない

問 20. 障害者スポーツの現状や課題等、ご自由にお書きください。問16. 昨年度中(‘18年4月～’19年3月)にスポーツやウォーキング等の健康を意識した運動を行いましたか？  
 あてはまるものすべてを選び、数字に○を付けてください。(いくつでも可)

1. フライングディスク 2. アーチェリー 3. フットベースボール 4. ボッチャ 5. 陸上競技
6. 水泳 7. ボウリング 8. サウンドテーブルテニス 9. バスケットボール 10. 車いすバスケットボール
11. ソフトボール 12. グラウンドソフトボール 13. バレーボール・ソフトバレーボール 14. 卓球バレー
15. サッカー・フットサル 16. 車いすテニス 17. ゲートボール 18. 散歩(ぶらぶら歩き、犬の散歩)
19. 通勤・通学のウォーキング 20. 通勤・通学の自転車 21. ラジオ体操 22. 健康体操(軽い体操含む)
23. 家事のうち掃除など身体活動的なもの 24. 職場での朝や昼の体操 25. ウォーキング
26. ジョギング・ランニング 27. 筋力トレーニング 28. ヨガ・ラピティス 29. ノルディックウォーキング
30. 登山・ハイキング 31. サイクリング 32. キャンプ・釣り 33. ゴルフ・グラウンドゴルフ
34. ボルダリング 35. スキー・スノーボード 36. スケート 37. キャッチボール 38. 野球・ソフトボール
39. 卓球 40. テニス・ソフトテニス 41. バドミントン 42. ラグビー・タグラグビー 43. ホッケー
44. ボクシング 45. レスリング 46. 柔道 47. 剣道 48. 相撲 49. 弓道 50. なぎなた 51. 空手道
52. 太極拳 53. サーフィン・ウインドサーフィン 54. その他( )
55. 該当なし(運動やスポーツを行っていない。)

# 岩手県内の障害者スポーツ環境や意識に関する調査 (障がい者スポーツ指導員用)

2019年6月  
公益財団法人ヤマハ発動機スポーツ振興財団

## ご記入上のお願い

- 回答の所要時間は、10分程度です。
- 鉛筆もしくは黒・青のボールペンを使用してください。
- 最初のページから順番に回答してください。
- 回答は質問文に従って、あてはまる番号を○で囲んでください。または、該当する数字や文字を記入してください。
- 回答内容は全体をとりまとめ、統計的処理いたします。回答者の情報は特定されず、皆様に不利益を及ぼすことはありません。また、この調査において、回答は任意です。
- 調査票内の「障害」の表記は、団体名などの固有名詞を除き、各種法令の表現に合わせて漢字での表記とさせていただきます。
- 記入していただきました調査票は **8月30日(金)** までに返信用封筒に入れて投函ください。

(切手は不要です)

### 【調査実施機関】

主 催：公益財団法人ヤマハ発動機スポーツ振興財団  
協 力：岩手県障がい者スポーツ協会 / 岩手県障がい者スポーツ指導者協議会  
調査委託：株式会社 サーベイリサーチセンター

調査票の回収・データ入力については、当財団の委託先である株式会社サーベイリサーチセンターが担当しております。調査の実施について、不明な点などがございましたら、下記までご連絡ください。

### 【問合せ先】

株式会社 サーベイリサーチセンター 調査事務局 担当：鈴木  
〒116-8581 東京都荒川区西日暮里2-40-10  
TEL：03-3802-6775 (月～金曜日、9時～17時)  
URL：<http://www.surece.co.jp/>

### 【調査主催機関】

公益財団法人ヤマハ発動機スポーツ振興財団 担当：尾鍋  
〒438-8501 静岡県磐田市新貝 2500  
TEL：0538-32-9827 (月～金曜日、9時～17時)  
URL：<http://ymfs.jp>

問0.この調査に回答するのは何回目でしょうか？ (いずれかに○)

初めて	2回目以降
-----	-------

問 1.あなたの性別をお知らせください。 1. 男 2. 女 3.こたえたくない

問 2.あなたの年齢をお知らせください。 \_\_\_\_\_ 歳

問 3.あなたの主な活動地区は？ (〇はいくつでも) 1. 県北地区 2. 県央地区 3. 県南地区 4. 沿岸地区

問 4.あなたのお住まいは？ 在住市区町村

問 5.あなたの職業をお知らせください。(〇は1つ)

- |                          |                |
|--------------------------|----------------|
| 1. 学生                    | 8. 福祉施設職員      |
| 2. プロ選手(競技収入により生計を立てている) | 9. スポーツクラブ職員   |
| 3. 教員(公立・私立問わず)          | 10. 一般企業の会社員   |
| 4. 官公庁・自治体職員             | 11. 自営業        |
| 5. 団体職員                  | 12. 主婦・主夫      |
| 6. 病院職員                  | 13. 無職         |
| 7. リハビリ施設職員              | 14. その他(具体的に ) |

問 6.あなたの障害者スポーツに関する資格をお知らせください。(〇はいくつでも)

- 1.初級障がい者スポーツ指導員 2.中級障がい者スポーツ指導員 3.上級障がい者スポーツ指導員  
4.障がい者スポーツコーチ 5.障がい者スポーツ医 6.障がい者スポーツトレーナー  
7.その他 ( )

問 7. 障害者スポーツ指導を始めたきっかけは何ですか。(〇はいくつでも)

- |                            |                                          |
|----------------------------|------------------------------------------|
| 1. 学校の授業やクラブ活動で            | 7. 国際大会(パラリンピック・オリンピック・世界選手権など)を<br>観戦して |
| 2. 医療関係者のすすめで              | 8. 国内大会(障害者スポーツ大会・国民体育大会など)を<br>観戦して     |
| 3. 福祉関係者のすすめで              | 9. 講習会や交流会で紹介されて                         |
| 4. 家族のすすめで                 | 10. テレビや雑誌などメディアを通じて                     |
| 5. 友達や知人のすすめで              | 11. そ の 他 ( 具 体 的<br>に )                 |
| 6. 健常者を対象にスポーツ指導して<br>いたから |                                          |

(7-1) 上記回答で最もあてはまる番号をひとつお知らせください。 番号⇒

問 8. 公認障がい者スポーツ指導員としての現在の活動をお知らせください。

問 9. 公認障がい者スポーツ指導員としての今後の活動予定や目標をお知らせください。

問 10. あなたは普段どのようなスポーツをしていますか？(趣味として)

問 11. 障害者スポーツ指導をする上でのあなたの目標をお知らせください。(〇はいくつでも)

1. 障害者にスポーツする楽しさを広めたい
2. 障害者の健康増進に寄与したい
3. 障害者の運動能力を高めたい
4. 障害者アスリートを養成したい
5. 障害者に対する社会意識や環境改善を促したい
6. その他 (具体的に \_\_\_\_\_ )

問 12. あなたはリオ 2016 パラリンピックをテレビやインターネットで観戦しましたか。(〇はいくつでも)

- |                          |                              |
|--------------------------|------------------------------|
| 1. テレビで中継番組を観た           | 6. インターネットで選手・競技を紹介した特集番組を観た |
| 2. テレビのニュース番組で観た         | 7. (テレビやインターネットの) その他の方法で観た。 |
| 3. テレビの選手・競技を紹介した特集番組を観た | 8. テレビやインターネットで観戦しなかった       |
| 4. インターネットで中継を観た         |                              |
| 5. インターネットでニュース番組を観た     |                              |

問 13. あなたは平昌 2018 パラリンピックをテレビやインターネットで観戦しましたか。(〇はいくつでも)

- |                          |                              |
|--------------------------|------------------------------|
| 1. テレビで中継番組を観た           | 6. インターネットで選手・競技を紹介した特集番組を観た |
| 2. テレビのニュース番組で観た         | 7. (テレビやインターネットの) その他の方法で観た。 |
| 3. テレビの選手・競技を紹介した特集番組を観た | 8. テレビやインターネットで観戦しなかった       |
| 4. インターネットで中継を観た         |                              |
| 5. インターネットでニュース番組を観た     |                              |

問 14. 東京 2020 パラリンピックについてお答えください。(〇はいくつでも)

1. テレビで中継番組を観たい (特に観たい競技名: \_\_\_\_\_)
2. インターネットで中継番組を観たい (特に観たい競技名: \_\_\_\_\_)
3. 東京都の競技会場で直接観戦したい (特に観たい競技名: \_\_\_\_\_)
4. 東京以外の競技会場で直接観戦したい (特に観たい競技名: \_\_\_\_\_)
5. 特に興味関心なし

問 15. 東京 2020 パラリンピック開催決定後、身の周りで何か変化がありましたか。(〇はいくつでも)

1. 障害のある方でスポーツする人が増えた
2. 障害のある方を受け入れてくれるスポーツ施設が増えた
3. 各種施設 (公共、民間) でバリアフリー化 (スロープ、エレベーターの整備など) が進んだ
4. 障害者スポーツに関する話題をメディア (テレビ、新聞、インターネット) で視る機会が増えた
5. パラリンピックを話題にする人が増えた
6. 障がい者スポーツ指導員資格を新規取得する人が増えた
7. 特になにも変わらない

問 16. あなたが障がい者スポーツ指導員の活動機会を増やすには何が必要でしょう？

(〇はいくつでも)

1. 計画情報をもっと欲しい (イベント、教室などの開催計画や必要な資格やスキルなど)
2. 平日昼間の活動機会拡大や増加
3. 平日夜間の活動機会拡大や増加
4. 週末や休日の昼間の活動機会拡大や増加
5. 週末や休日の夜間の活動機会拡大や増加
6. 活動場所が居住地や勤務地の近く
7. 一緒に活動できる指導員仲間
8. 地域ごとの指導員組織 (例: 県北、県央、県南、沿岸など地域ごと)
9. 指導員活動にかかる経費補助の拡充 (指導員手当、交通費補助など)
10. 優秀指導員の表彰制度
11. その他 ( )

(16-1) 上記で最もあてはまる番号をひとつお知らせください。

番号⇒

問 17. 障害者スポーツの現状や課題等、ご自由にお書きください。

ご記入いただき、ありがとうございました。

**9月30日(月)**までに同封の封筒でご返送ください(切手は不要)。



## 調査報告書の各種データについて

本報告書の各種データは当財団ホームページにて公開しています。  
報告書の PDF データの他に、調査票データ等も公開予定です。

y m f s
🔍 検索



👉 Click



**2019（令和元）年度  
障害者スポーツを取巻く社会的環境に関する調査研究**

**－ 地域現場、障害者スポーツ選手キャリア、大学に着目して －**

2020年3月 発行

発行者 公益財団法人ヤマハ発動機スポーツ振興財団

Yamaha Motor Foundation for Sports (YMFS)

〒438-8501 静岡県磐田市新貝 2500

TEL 0538-32-9827 FAX 0538-32-1112

I S B N 978-4-9910824-1-2

© ヤマハ発動機スポーツ振興財団

本報告書の内容を引用された場合、その掲載部分の写しをYMFSにご送付ください。



公益財団法人  
**ヤマハ発動機スポーツ振興財団**  
Yamaha Motor Foundation for Sports

ISBN 978-4-9910824-1-2

2019(令和元)年度  
障害者スポーツを取巻く社会的環境に関する調査研究

— 地域現場、障害者スポーツ選手キャリア、大学に着目して —